1

0054346000

0054346-000

特２００－７４７

現代礼儀作法全書

国民儀礼普及会・編

帝国書籍協会

昭和１５

AIC

この著作物は、著作権者不明のため、著作
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

省務內
15. 2.22
(版出通普)

特200
747

國民儀禮普及會編

現代禮儀作法全書

はしがき

我が日本帝國は、昔から東洋の君子國と稱せられてゐる通り、國民が德義を重んじ、禮儀の正しいことによつて知られて居ります。これは氣候の順調なことや、山水の眺めの明媚なことと丶もに、日本の誇りでありまして、今では小學校に於ても、作法室なるものを特設して、義務教育を受ける學童時代から、特に禮儀作法を教へて居りますが、こんなことは廣い世界中、いづれの國にも例を見ないところであります。

大體人類が社會生活を營む以上は、社交といふことが當然必要となつてきて、これを無視しては、社會の安寧秩序は保たれないのであります。そこには勿論幸福とか、平和とかを望むことは出來ません。

それで社交の巧拙は、個人としてはその人の禍福成敗に重大な關係を持つて居りますと同時に、全般的に申しますならば社交の良否は、その民族文化の進否を表現するバロメーターとなるのであります。

文化が進むと社會生活が複雜となつてきますが、生活樣式が複雜となれば、從つて社交の核心となる諸禮法にも變化が起ります。禮法を尊重する精神や、禮法が大切であるといふ思想は、古今東西を通じて變らないとしても、形式の

上では既に死物となつて、役立たない禮式もあれば、反對に新たに生れてくる作法もあります。

上古の禮法は中世の禮法ではなく、中世の禮法はまた近古の禮法でない如く、近古の禮法も現代の禮法ではあり得ない場合が甚だ少なくないのであります。禮法はかくの如く形式の上では、國によつて違つてゐると同時に、時代によつてもまた變つてくるのであります。

それで現代に生き、現代に活動し、現代に成功しやうとする者にあつては、どうしても現代の諸禮法に通曉して、適切圓滑なる社交のコースを辿る必要が生じてくるのであります。

本書はかうした見地から、現在の躍進日本に於て、實際行はれてゐる禮法を、各方面に亘つて詳說したものでありますから、本書一冊を用意すれば、如何なる場席に臨んでも、社交上不便を感ずることなく、勿論恥を搔くやうなことは絕對にないと信ずるのでありますが、同時に單に禮法の眞髓につき、精神上の領域に立ち入つて、相當深刻な筆を加へた積りでありますから、讀んで味ふだけでも趣味を覺えるとともに、何物かの收獲のあらうことを、附記して置きたいのであります。

昭和十五年新春

著者識

目次

緒言……一

第一章　禮儀作法の意義……四

第二章　禮儀作法と挨拶……五

第一節　挨拶の要領……五

照會　交渉
申込　勸誘
拒絕　抗議
註文　依頼
承諾　健促
請求　協議
反駁　辨解
謝罪　忠告
保證　報告

一　時令の言葉……七

初春　盛春
晩春　初夏
盛夏　晩夏
初秋　仲秋
晩秋　初冬
中冬　嚴冬
不定季

二　見舞の言葉……九

寒暑　病氣
天災

第二節　一般挨拶の仕方……一〇

訪問　紹介
集會　宴會
送迎　洋式の饗應

第三節　祝儀と挨拶の仕方……一五

新年　結婚
出産　榮轉
新築　壽賀
病氣全快　昇進
誕生　七五三

第四節　婚禮儀式と挨拶の仕方……一九

迎への口上　合盃のときの口上
舅入のときの口上　廻禮の口上

第五節　葬儀と挨拶の仕方……二〇

第六節　服裝の仕方……二一

燕尾服　タキシード

フロックコート　モーニングスート
サックスート　婦人禮裝
婦人散歩服　通常服
通常禮服　大禮服
普通和服禮裝
第七節　服裝と裝身具の仕方……
第八節　接客及び對談の仕方……
第九節　食事の仕方……
第一〇節　贈答品の仕方……

第一編　美容と禮儀作法……二七

第一章　美容法……二七
第一節　美の觀念の變遷……二七
第二節　肉體の美化……二七
第三節　食物と美容……二八
第四節　皮膚の美化……二八
第五節　入浴……二九
浴湯溫度　入湯時間
浴場の選擇　洗料
手拭　浴後
第六節　洗面……三〇
第七節　素顏美……三〇
第八節　整形美容……三一

第二章　化粧の仕方……三一
第一節　白粉の塗り方……三一
第二節　口紅と白粉……三二
第三節　雀斑を隱す化粧……三二
第四節　荒れた顏の化粧……三二
第五節　春の化粧……三二
第六節　夏の化粧……三三
第七節　海水浴の化粧……三三
第八節　秋の化粧……三四
第九節　頰紅……三四
第一〇節　濃化粧……三四
第一一節　眉墨……三五
第一二節　アイシャード……三五
第一三節　頸首の黑くならぬ化粧……三五
第一四節　顏の荒れぬ豫防……三五
第一五節　小皺の防ぎ方……三五
第一六節　クリームとベルツ水……三六
第一七節　面皰と雀斑……三六

第一八節　マッサージの仕方……三六
第一九節　毛皮を纏つた時の化粧……三七
第二〇節　不幸時の服裝と化粧……三七
第二一節　化粧品の今昔……三八
第二二節　白粉の良否の見分け方……三九
第二三節　石鹼の見分け方と使ひ方……三九

第三章　毛髮の手入……四〇
第一節　毛髮の美……四〇
挿繪　正裝用の髮と髮飾
第二節　毛髮の手入……四〇
第三節　癖直し……四一
第四節　脫毛の豫防……四一
第五節　潮水に毛髮の浸つた場合……四二
第六節　夏の髮の結ひ方……四二
第七節　涼しい束髮……四二
第八節　病人の毛髮……四二

第四章　社交ダンス……四二
ダンスの種類　スロー・トロット
クイック・ステップ　ブルース
ウオルツ　タンゴ
ルンバ
挿繪　社交ダンスの踊り方

第二編　服裝と禮儀作法……四五

第一章　服裝と禮節……四五
第一節　我が國現代の服飾……四五
第二節　習慣と作法……四五
第三節　和洋共通の心得……四五

第二章　和服の着方……四六
第一節　舊慣との差別心得……四六
第二節　時代に順應の作法……四六
第三節　和服の禮裝……四七
男子の禮裝　婦人の禮裝
挿繪　婦人の禮裝
第四節　縞物と絣に就て……四九
第五節　浴衣の今昔……五〇
第六節　帶の變遷……五〇
第七節　袴の心得……五〇

第八節　帽子……五一
第九節　履物……五一
第一〇節　扇子……五二
　挿繪　扇の使ひ方
第三章　洋服の着方……五二
第一節　禮裝の區別……五二
第二節　燕尾服……五三
第三節　フロック・コート……五三
第四節　モーニング・コート……五三
　挿繪　モーニングの着方
第五節　タキシード・コート……五四
　挿繪　タキシード・コートの着方
第六節　脊廣服……五四
第七節　ドレシング・ガウン……五五
第八節　チョッキ……五五
第九節　外套……五六
第一〇節　ワイシャツ……五六
第一一節　カラー……五六
第一二節　帽子……五七
第一三節　ネクタイ……五九
第一四節　釦のかけ方……五九
第一五節　シャツ及びズボン下……六〇
第一六節　靴と靴下……六〇
第一七節　手袋……六一
第一八節　ハンカチーフ……六一
第一九節　男子の禮服……六二
第二〇節　婦人の洋裝……六三
第四章　裝身具……六六
第一節　懷中時計……六六
第二節　指輪……六六
　挿繪　指輪の正しいはめ方
第三節　寶石……六八
第五章　衣服の着方……六九
第一節　一般の心得……六九
第二節　二枚襲の着方……七〇
第三節　長襦袢の着方……七〇
第四節　腰帶の締め方……七一
第五節　帶の締め方……七一
第六節　帶揚の結び方……七一

第七節　洋裝の仕方……七二
第八節　洋裝の一般作法……七二
第三編　訪問と禮儀作法……七三
第一章　正しい訪問の仕方……七三
第一節　服裝上の心得……七三
第二節　時間の嚴守……七三
第三節　訪問六禁……七四
　早朝夜間の訪問　午前中の訪問
　食事時間の訪問　安息日の訪問
　名刺を持たぬ訪問　小兒や犬などを連れた訪問
第四節　慶弔時の訪問……七四
第五節　取次に對する心得……七五
第六節　携帶品……七五
第七節　履物の取扱ひ方……七五
第八節　接客の心得……七六
第九節　來客に對する家人の心得……七六
第一〇節　來客の送迎……七七
　挿繪　來客の案内の仕方
第二章　應接……七七
第一節　應接室に於ける心得……七七
第二節　扉の開閉……七七
　挿繪　扉の開閉の仕方
第三節　叩扉と應答……七八
第四節　外套と上靴……七八
第五節　着席前後の作法……七九
　先づ自己の姓名を名乘ること
　挨拶前の着席は禁物　男女同席の場合の挨拶
　指定の椅子以外に着席せぬこと
　繪畫調度品などを見廻さぬこと
　婦人には席を讓ること　饗應品には辭退せぬこと
　正しく着席すること　對手の身體に手を觸れぬこと
　絶えず時計を見ないこと　煖爐等を獨占せぬこと
　長居せぬこと　度々席を立たぬこと
　婦人に先立つて出入せぬこと
　婦人より誘はれた場合
　挿繪　椅子のすゝめ方
第六節　握手の作法……八一
　必ず右手ですること　堅く握らぬこと
　手套を着けてゐるとき　必らず上席者から行ふ
　婦人に求めぬこと　婦人の求めは謝絶せぬこと

着席後は差控へること　一同に求めぬこと
挿繪　握手の仕方
第七節　人に接する一般心得……八二
容姿を整へること　動作と擧動
他人に對する態度　言語を謹むこと
顏面表情
第八節　紹介に就ての心得……八三
挿繪　紹介の仕方

第三章　名刺……八五

第一節　名刺の由來……八五
第二節　名刺の種類……八五
第三節　名刺の置き方、受け方作法……八六
男子の場合　婦人の場合
夫妻同伴の場合　郵送の答禮の場合
宛名を書く場合　訪問目的を附記する場合
贈答品に添へる場合　名刺の折り方
挿繪　名刺の受け方

第四章　對話……八八

第一節　言葉遣ひ……八八
明晰正確な言葉　言語の選擇
必要以外の言葉　敬語
第二節　對話二十禁……八九
傍見　話題の誤り
執拗　獨占
進歩　肩越し
世辭　贅言
私事　反逆
嚴痴　耳語
嘲笑　年齢
物品の價格　容貌の批評
氣轉　宗教政治等の問題
第三節　忌み言葉……九一
第四節　外人と對話する場合……九二

第五章　一般作法……九三

第一節　民衆に對する心得……九三
携帶品の注意　喫煙
道路の清潔　立話
婦人を呼び止めること　婦人や老幼を劬れ
出入口を塞ぐ　左側通行

第二節　途上の作法……九四
途上知人に遇つた場合　知人同伴の婦人に遇つた場合
婦人同伴の場合　他人の事柄
他人に物を問ふ場合
第三節　敬禮の仕方……九五
立禮　座禮
挿繪　立禮の仕方　座禮の仕方
第四節　座作進退の心得……九六
着座　立ち方と歩き方
第五節　高貴の方に拜謁する作法……九七
挿繪　尊貴の方に拜謁の仕方

第六章　贈答……九八

第一節　進物選定の標準……九八
物品贈答の意味　贈答の場合
挿繪　贈物の作法
第二節　贈答に就ての注意……九九
返禮の可否　地方の習慣
寫眞の贈答
第三節　包裝の樣式……九九
金子　衣服類
鰹節・海苔　魚鳥類
第四節　表書の認め方……一〇〇
吉事　凶事
謝禮　見舞
年始　中元・年末
餞別　安着祝
金子　普通の進物
第五節　熨斗と水引……一〇一
熨斗　水引
挿繪　水引のかけ方
第六節　品物の並べ方……一〇二
魚類　鳥類
鰹節　鷄卵
果實
挿繪　魚のならべ方
第七節　進物の出し方と受け方……一〇三
出し方　受け方
第八節　答禮の心得……一〇四
第九節　花卉の贈答……一〇四
挿繪　花の贈り方
第一〇節　花言葉……一〇五

第一一節　月の花……一〇七
第一二節　色の感情……一〇八
第一三節　世界の國花……一〇八

第四編　應接と禮儀作法……一〇九

緒言……一〇九
第一章　正しい挨拶の仕方……一一〇
第一節　社交と言語……一一〇
第二節　年賀の詞……一一一
第三節　時候見舞の挨拶……一一一
春季　夏季
秋季　冬季
第四節　物を贈る例……一一一
第五節　中元の挨拶……一一一
第六節　歳暮の挨拶……一一二
第七節　婚禮の挨拶……一一二
招待を受けた場合　婚禮當日の場合
披露に招く場合　結婚祝を贈る場合
嫁の荷物を持參した場合　双方の親同志の場合
親族より双方の親への場合
御禮廻りの場合
第八節　出産時の挨拶……一一六
産婦の姑に對する場合　産婦の夫に對する場合
産婦に對する場合　産婦よりの答禮の場合
第九節　誕生祝の挨拶……一一八
誕生に招く場合　招待を受けた答禮の場合
祝物を贈る場合
第一〇節　雛祭の祝物持參の挨拶……一一八
第一一節　入學に關する挨拶……一一九
通知の場合　本人へ祝賀の場合
入學者の家族への場合　家族より答禮の場合
第一二節　就職依頼の挨拶……一一九
第一三節　榮轉祝ひの挨拶……一二〇
第一四節　新築祝ひの挨拶……一二〇
第一五節　壽筵の際の挨拶……一二〇
第一六節　引越の際隣家への挨拶……一二一
第一七節　召使より新主人への挨拶……一二一
第一八節　來訪者に對する挨拶……一二一
第一九節　初對面の挨拶……一二二
第二〇節　轉居暇乞の挨拶……一二二
第二一節　弔問の挨拶……一二三

第二二節　會合の挨拶……一二三
第二三節　停車場に見送る時の挨拶……一二三
挿繪　停車場の見送り方
第二四節　停車場に出迎へる時の挨拶……一二三
第二五節　入營者に對する挨拶……一二四
第二六節　退營當日出迎の挨拶……一二四
第二七節　出征を見送る挨拶……一二四
第二八節　凱旋兵への挨拶……一二四
第二九節　見舞の挨拶……一二五
近火見舞の場合　類燒見舞の場合
病氣見舞の場合
第三〇節　祭禮に人を招く挨拶……一二五
第二章　電話と社交……一二六
第一節　電話の正しいかけ方……一二六
掛ける時刻　電話番號
呼出しを待たさぬこと　要件は正確に
電話の終つた時
挿繪　電話のかけ方
第二節　正しい電話の開き方……一二八
信號があつたら直ぐ出ること
名乘の注意　本人が不在の場合
精通した人が聞くこと　留守を使はぬこと
第三節　電話の言葉……一三〇
言葉遣ひは丁寧に　明朗で平靜に

第五編　饗應と禮儀作法……一三一

第一章　和洋共通の作法……一三一
第一節　宴會時間の心得……一三一
時間の確守　開宴時間
第二節　服裝其他の心得……一三二
服裝　着席
態度と姿勢
第三節　料理に就ての心得……一三三
喰べ方　好まざる料理
料理の批評　飲酒の心得
辭去の作法
第二章　和食の心得……一三四
第一節　席順……一三四
第二節　配膳の作法……一三四

挿繪　膳の持ち方
第三節　盃の献酬……一三五
第四節　飯の喰べ方……一三六
第五節　箸の扱ひ方……一三七
挿繪　箸の置き方
第六節　汁の吸ひ方……一三八
挿繪　お膳のすゝめ方
第七節　膳のすゝめ方とひき方……一三八
第八節　給仕の仕方……一三九
飯　汁
取肴　引肴
焼物　鉢盛
挿繪　御飯の盛り方
第九節　酌の仕方……一四〇
銚子　徳利
挿繪　酒の注ぎ方
第一〇節　茶と菓子……一四一
挿繪　お菓子のすゝめ方
第三章　洋式宴會の心得……一四二
第一節　晩餐會……一四二
第二節　招待の作法……一四二
第三節　宴會の服装……一四四
第四節　席順の心得……一四四
第五節　着席に就ての心得……一四五
挿繪　食卓につき方
第六節　配食の受け方……一四五
第七節　ナプキンの取扱ひ方……一四六
挿繪　ナプキンのかけ方
第八節　ナイフとフォークの使ひ方……一四七
挿繪　ナイフとフォークの使ひ方
第九節　スプーンの取扱ひ方……一四九
挿繪　スプーンの持ち方
第一〇節　パンの喰べ方……一五〇
挿繪　パンの喰べ方
第一一節　各種料理の喰べ方……一五〇
スープ　前菜又は小菜
魚類　主菜
野菜　蒸焼肉
生菜　間食物と菓子類
粥と茹玉子其他の注意
挿繪　スプーンの喰べ方　前菜の喰べ方

魚料理の喰べ方
第一二節　洋酒に就ての心得……一五八
第一三節　乾盃の仕方……一六〇
第一四節　清涼飲料の飲み方……一六一
挿繪　清涼飲料の頂き方
第一五節　ソースと薬味の常識……一六二
第一六節　各種果物の喰べ方……一六二
林檎　梨
蜜柑類　瓜類
柿　苺
バナナ　葡萄と櫻桃
果物の砂糖煮　胡桃類
挿繪　果物の喰べ方
第一七節　指洗鉢と爪楊枝の心得……一六四
指洗鉢　爪楊枝
挿繪　フインガーボールの使ひ方
第一八節　紅茶と珈琲の飲み方……一六五
挿繪　紅茶々碗の据え方
第一九節　給仕を呼ぶ心得……一六五
挿繪　給仕人の呼び方
第二〇節　挿花に就ての心得……一六六
第二一節　中座と退席の作法……一六六
第二二節　答禮の仕方……一六八
第二三節　朝餐會と午餐會……一六八
朝餐會　午餐會
第二四節　夜會……一六九
第二五節　アフターヌーンとアトホーム……一七一
第二六節　茶話會……一七二
第二七節　園遊會……一七二
第二八節　結婚披露會……一七二
第二九節　奏樂及び餘興……一七四
第三〇節　喫煙に就ての心得……一七四
第三一節　洋式宴席の諸心得……一七四
第四章　茶代と心附……一七五
茶代　心附
第六編　冠婚葬祭と禮儀作法……一七七
第一章　婚禮儀式の心得……一七七
第一節　婚禮式の種類……一七七
家庭結婚式　神前結婚式

キリスト教結婚式
挿繪　神前結婚
第二節　結納の心得……一七八
挿繪　結納目錄の仕方
第三節　指輪の交換……一七九
第四節　調　度……一七九
第五節　式日の選定……一七九
第六節　新婚旅行……一七九
第七節　新婚に關する贈答……一八〇
第八節　式　服……一八〇
挿繪　婚禮の式服
第九節　出嫁の儀……一八一
第一〇節　三々九度の仕方……一八一
挿繪　三々九度の盃の仕方　婚禮式場の床の間飾
第一一節　色直し……一八三
第一二節　緣つなぎの盃……一八三
第一三節　饗　宴……一八四
第一四節　其他の儀式……一八四
里　開　舅　入
披　露　廻　禮
配　物
第一五節　西洋式の婚姻……一八五
婚約と指環　結婚日の選定と財產讓狀
婚姻免狀　式　服
陪席婦人　儀　式
饗　宴　婚姻の名刺
第一六節　結婚記念……一八七
第二章　葬儀の心得……一八八
第一節　一般葬儀の次第……一八八
通知と葬儀發表　納棺と通夜
喪　帳
挿繪　喪　表
第二節　神葬式作法……一八九
入棺式　葬　列
祭　場　玉串の捧げ方
第三節　佛葬式作法……一九一
通　夜　戒　名
納　棺　佛前の式
葬　列　式　場
燒　香
挿繪　遺骸の飾り方

第四節　基督教式作法……一九二
納　棺　告別式
式　場
挿繪　告別式
第五節　現代式の簡略な葬儀……一九三
第六節　埋葬式……一九四
土　葬　火　葬
第七節　葬送に就ての心得……一九五
葬儀係　會葬の謝禮
會葬者の心得　廻　禮
返　物　忌　服
第八節　靈祭の儀式……一九七
神　式　佛　式
基督教式
第三章　出產其他諸儀式の心得……一九八
第一節　出產祝……一九八
命名祝　宮參り
箸立の祝
第二節　七五三の祝……一九九
初　生　初節句
挿繪　雜の飾り方
第三節　賀　壽……二〇〇
還　曆　古　稀
喜　字　八　十
米　壽　白　壽
賀壽の贈物
挿繪　餅幟の立て方
第四節　年中行事摘要……二〇一
第五節　祭　祝……二〇一
第六節　祝祭文朗讀の作法……二〇二
國　祭　祭　典
雜　典
第七編　結婚と禮儀作法……二〇三
第一章　理想的結婚年齡……二〇三
第一節　九歲の花嫁……二〇三
第二節　十三歲のママ……二〇四
第三節　法律上の結婚適齡……二〇五
第四節　理想的な結婚年齡……二〇六
第五節　職業婦人と結婚年齡……二〇七

第二章　人相と相生による結婚……二〇九

第一節　體質から見た男女の相性……二〇九
第二節　趣味性から見た男女の相性……二一〇
第三節　年齢や九星等から見た男女の相性……二一一
第四節　笑つても白齒は見せぬ人……二一二
　挿繪　齒の觀相
第五節　眉は賢愚の辨……二一三
第六節　氏なくして玉の輿に乘る額……二一四
第七節　柔かい毛に幸福は宿る……二一五
第八節　大口は安產の吉相……二一六
第九節　亭主を尻に敷く笑ひ方……二一七
第一〇節　鬚のほつれも仇にはならぬ……二一八
第一一節　美醜も時に罪あり……二一九
第一二節　獅子鼻とて心配御無用……二二〇
第一三節　黑子は顏の愛嬌者……二二一
第一四節　口ほどに物をいふ眼……二二二
第一五節　一見親心男女百面相……二二四

第三章　結婚前の性病……二二四

第一節　或る青年の打明け話……二二四
第二節　結婚出來ない病氣と缺陷……二二六
　肺結核　　子宮の發育不完全
　無月經其他の機能障害　　缺陷があつても幸福な生活
　毛のない惱み　　精神病
第三節　世を暗くする性病……二二九
第四節　幸福な結婚の一條件……二三一

第四章　見合から披露まで……二三三

第一節　古今東西見合百景……二三三
　寫眞　見合の一方式
第二節　きつと成功する見合の仕方……二三五
第三節　婚約の持つ意味……二三六
　婚約時代の男女交際　　天地に恥ぢぬ交際
　婚約時代は觀察時代　　家族本位の交際
　手紙の交換
　寫眞　婚約中の交際
第四節　無難な仲人の選び方……二三九
　信頼出來る仲人　　指導者としての仲人
　仲人への謝禮
第五節　結婚初夜の花嫁知識……二四二
第六節　新舊とり〳〵の婚禮儀式……二四五

　家庭結婚式　　神前結婚式
　家庭神前結婚式　　教會結婚式
　佛前結婚式　　任意の結婚式
　寫眞　盃の頂き方
第七節　擧式當日花嫁方の心得……二四七
第八節　新婚旅行はどうするか……二四九
第九節　結婚披露を語る……二五一
　甲夫人の場合　　乙夫人の場合
　丙夫人の場合　　丁夫人の場合
　寫眞　披露會のお迎へ

第五章　婚禮作法と儀式……二五四

第一節　結納の心得……二五四
　結納の意味　　結納の式禮
　結納の品　　目錄の書き方
　親類書の認め方　　結納の贈り方
　結納受書の認め方
　寫眞　結納の届け方
第二節　結婚式日取りの定め方と月經の調節……二六〇
第三節　嫁入道具とその目錄の書き方……二六一
第四節　嫁入道具の送り方……二六二
第五節　擧式當日の双方の準備……二六四
　式場の床飾　　待女郎
　嫁迎の使者　　島臺
　押臺　　手掛
　置鳥置鯉　　銚子
　提子　　瓶子
　燭臺　　三獻の肴
　寫眞　結婚式場の床飾
第六節　門出の挨拶と祖先への報告……二六七
第七節　門出の盃事……二六七
第八節　嫁入の行列……二六八
第九節　婚家に到着した時の花嫁の心得……二六九
第一〇節　三々九度の順序……二六九
　神酒うつし　　花嫁着座
　花婿着座　　初饗
　三方の持ち方　　引渡のすゝめ方
第一一節　いよ〳〵夫婦固めの盃事……二七一
　花嫁より開始　　組かへの仕方
　加への禮拜
　挿繪　三々九度の盃
第一二節　親子盃の仕方……二七三

第一三節　總客の盃の仕方……二七三
挿繪　親類の盃事
第一四節　關盃の式のこと……二七五
第一五節　色直しの盃事……二七六
第一六節　里歸りと里開き……二七六

第八編　生花と禮儀作法……二七九

第一章　緒言……二七九
第一節　生花の作法……二七九
第二節　華道の流派……二八〇
挿繪　小野妹子
第三節　生花の方式……二八一
挿繪　眞行草　二圖
第四節　花の止め方と矯め方……二八三
挿繪　花止
第五節　花器の種類と生け方……二八四
挿繪　花器　二圖
第六節　花器の手入と買ひ方……二八六
第七節　花臺の使ひ方……二八六
第八節　床に花を飾るときの注意……二八七
挿繪　花の飾り方
第九節　季節の花十二ヶ月……二八八
挿繪　月見草　アマリリス　おもだか　ダリヤ
第一〇節　花を切つた後と切る時の注意……二八九
第一一節　水揚げ法……二九〇
挿繪　えにしだ　しをん
第一二節　霧のかけ方……二九二
第一三節　生花の材料の選擇……二九三
第一四節　根締の主役……二九三
第一五節　盛花の花止と止め方……二九四
第一六節　籠の花の挿し方……二九五
第一七節　投入れの止め方……二九五

第二章　活花の儀禮……二九六

新年の花　紀元節の花
天長節の花　三月節句の花
五月節句の花　婚禮の花
古稀、賀壽の花　出征、凱旋の花
新築開店の花　病氣見舞の花
忌み嫌ひの花
挿繪　正月の花

第三章　各流派の生け方……二九九

第一節　チューリップの生花……二九九
挿繪　チューリップの生花
第二節　緋桃の生花……三〇〇
挿繪　緋桃の生花
第三節　蓮翹の生花……三〇〇
挿繪　蓮翹の生花
第四節　牡丹の生花……三〇一
挿繪　花器の上から見た圖
第五節　葉蘭の生花……三〇二
挿繪　葉蘭の生花　二圖
第六節　櫻の生花……三〇二
挿繪　櫻の生花
第七節　山茱萸の生花……三〇三
挿繪　山茱萸の生花
第八節　黑松の釣生花……三〇三
挿繪　黑松の釣生花
第九節　シクラメンの盛花……三〇四
挿繪　シクラメンの盛花
第一〇節　苔松と黃薔薇の盛花……三〇五
挿繪　苔松と黃薔薇の盛花
第一一節　花菖蒲と海芋の盛花……三〇六
挿繪　花菖蒲と海芋の盛花
第一二節　フリジヤの投入……三〇七
挿繪　フリジヤの投入
第一三節　白玉椿の投入……三〇七
挿繪　白玉椿の投入
第一四節　スキートピーの投入……三〇八
挿繪　スキートピーの投入
第一五節　鐵線蓮と白常夏の投入……三〇八
挿繪　鐵線蓮と白常夏の投入
第一六節　紫陽花と芍藥の瓶花……三〇八
挿繪　紫陽花と芍藥の瓶花

第九編　茶の湯と禮儀作法……三〇九

第一章　緒言……三〇九
第一節　季節と茶事の種類……三〇九
朝茶　夜咄
名殘のお茶　口切りの茶
王服のお茶　茶室と壘の名稱

挿繪　茶室畳の名稱
第二節　時刻による茶事の種類……三一一
曉　朝茶
前茶　正午
菓子　後見
夜會　不時
大寄せ
第三節　普通の茶會……三一二
第四節　お茶に呼ばれた時の注意……三一三
挿繪　茶道具の名稱
第五節　前禮……三一三
第六節　當日の心得……三一四
第七節　後禮……三一五
第八節　お茶用語……三一五
第二章　茶道の流派……三一六
第一節　茶會の心得……三一七
炭手前　懐石
濃茶手前　薄茶手前
盆點
第二節　茶の湯の道具……三一九
挿繪　茶室
第三節　濃茶平手前……三一九
茶道具の運び方　茶入の出し方
袱紗さばきと柄杓の扱ひ方
茶筅とぢ　茶のはき方
茶の點て方　茶の飲み方
茶碗及び袱紗拜見　茶碗の始末
茶杓及び眞水差の始末　三器の示し方
三器拜見の仕方　道具の片付け方
挿繪　茶器の出し方　袱紗さばき　柄杓の扱ひ方
茶の點て方　茶碗の始末　茶器の拜見
茶碗の扱ひ方
第四節　薄茶平手前……三二四
道具の運び方　茶の點て方
柄杓の扱ひ方　茶の飲み方
挿繪　菓子の置き方
第五節　煎茶……三二五
綠茶の入れ方　茶のすゝめ方
茶の受け方　茶の飲み方
番茶の入れ方
第六節　紅茶……三二七

第七節　洋式お茶の會作法……三二七
第八節　主なる茶室……三二八
第一〇編　書翰文と禮儀作法……三二九
第一章　書信の目的……三二九
第二章　和洋共通の慣例と作法……三三〇
第一節　用紙……三三〇
第二節　書體……三三〇
第三節　文章……三三〇
第四節　署名と日附……三三〇
第五節　封緘……三三一
第六節　書信の祕密……三三一
第七節　葉書……三三一
第八節　返信……三三二
第九節　切手の貼り方……三三二
第三章　日本の慣例……三三二
第一節　正式は毛筆……三三二
第二節　書翰箋……三三二
第三節　文體……三三三
第四節　他人の妻に對する手紙……三三三
第四章　歐米の慣例……三三三
第一節　若き婦人への手紙……三三三
第二節　既婚婦人への手紙……三三三
第五章　書翰文の構成……三三三
第一節　冒頭語……三三四
往信用　返信用
第二節　前文……三三六
第三節　時候用語……三三七
第四節　先方の起居……三四一
第五節　當方の起居……三四二
第六章　本文の書き方……三四三
第一節　祝賀……三四三
第二節　音問……三四四
第三節　贈答……三四六
第四節　謝禮……三四七
第五節　見舞……三四八
第六節　通知……三四九

第七節　照會……三五一
第八節　借用……三五一
第九節　謝罪……三五二
第一〇節　誘引……三五四
第一一節　謝絕……三五四
第一二節　督促……三五五
第一三節　勸告……三五六
第一四節　弔慰……三六〇
第一五節　紹介……三六一
第一六節　依頼……三六三
第一七節　註文……三六三
第一八節　招待……三六四
第一九節　懇談……三六五
第二〇節　送迎……三六六
第二一節　商用……三六八
第七章　末文……三七一
第八章　結語……三七三
第九章　追書、袖書……三七四
第一〇章　日附、署名、宛名、脇付、封緘……三七五
第一節　日附……三七五
第二節　署名……三七五
第三節　宛名……三七五
第四節　脇付……三七六
第五節　封緘……三七七
第一一章　自他の稱呼……三七七
第一節　一人稱、二人稱……三七八
第二節　三人稱……三七九
第一二章　書信の慣用語……三八一
第一三章　口語體……三八五
第一四章　文例……三八八
第一節　祝賀……三八八
年賀狀
結婚を祝す
出產を祝す
入營を祝す
開店を祝す
轉居を祝す
入學を祝す
卒業を祝す
榮轉を祝す
新築を祝す
長壽を祝す
議員の當選を祝す

全快を祝す
凱旋を祝す
歸朝を祝す
勳章を受けし人に
第二節　晉問……三九三
暑中見舞
寒中見舞
餘寒見舞
梅雨見舞
殘暑見舞
陣中見舞
第三節　贈答……三九五
花を贈る
蔬菜を贈る
西瓜を贈る
松茸を贈る
歲暮の祝儀を贈る
土產物を贈る
記念品を贈る
花卉に添へて
果實を贈る
草餅を贈る
筍を贈る
寫眞を贈る
書物を贈る
膳部を贈る
供物を贈る
第四節　謝禮……三七九
贈物を受けし禮
饗應せられしを謝す
滯在中の禮
應接の勞を謝す
借入金返濟の禮
會葬の禮
仲裁の勞を謝す
媒酌の勞を謝す
見舞を受けし禮
周旋の勞を謝す
就職を祝されし禮
見送りを謝す
報酬を受けし禮
第五節　見舞……四〇〇
病氣見舞
火事見舞
洪水見舞
暴風見舞
留守見舞
營中見舞
地震見舞
負傷見舞
忌中見舞
盜難見舞
第六節　通知……四〇二
結婚の成立を報ず
出產の通知
入學せしを知らす
卒業せしを知らす
就職せしを知らす
安着を報ず
開店の通知
轉居の通知
入營の通知
病氣の通知
死亡通知
轉任の通知
辭職を知らす
社員解雇の通知
出立の期日通知
試驗の成績を知らす
徵兵檢査の結果を報す
農況を報ず
運動會の模樣を知らす
營內の模樣を知らす
第七節　照會……四〇四
學校の模樣を問ふ
舊友の住所を問合す

出立の日時問合せ　借家の有無を問合す
商況を問合す　身元信用につき問合す
緣談について問合す　入學試驗について問合す
在宅の有無を問合す　忘れ物について問合す
電話の讓渡につき照會
第八節　借　用……二〇九
金子の融通を乞ふ　書物の借用を乞ふ
器具の借用を乞ふ　寫眞機の借用を乞ふ
第九節　謝　罪……二一〇
無沙汰を謝す　粗忽を謝す
失言を謝す　違約を謝す
違算を謝す　妨害せしを謝す
物を贈られしを謝す　招待を受けしを謝す
旅行中世話になりしを謝す
結婚の盡力を謝す　仲裁の勞を謝す
第一〇節　誘　引……二一二
遠足に誘ふ　旅行に誘ふ
見物に誘ふ　避暑に誘ふ
茸狩に誘ふ　花見に誘ふ
登山に誘ふ　參詣に誘ふ
傍聽に誘ふ　釣魚に誘ふ
夜學に誘ふ
第一一節　謝　絕……二一五
招待を斷る　誘引されしを斷る
加入を斷る　約束を斷る
緣談を斷る　保證を斷る
注文品を斷る　出席を斷る
貸金を斷る　出資を斷る
第一二節　督　促……二一八
貸金の返濟を促す　代金支拂の請求
注文品の催促　書物の返却を促す
貸與品の返却を促す　緣談について催促
第一三節　勸　戒……二一九
修學を勸む　不勉强を戒む
轉業を戒む　轉地療養を勸む
飲酒を戒む　投機を戒む
不養生を戒む　貯金を勸む
加盟を勸む　賭事に耽ける人へ
製品の不評判につき忠告す
第一四節　弔　慰……二二三
落第の友を慰む　失敗せし友を慰む
悔みの手紙

第一五節　紹　介……二二四
就職希望を紹介す　奉行人を紹介す
取引先を紹介す　知人を紹介す
第一六節　依　賴……二二五
手傳を賴む　買物を賴む
下宿の周旋を乞ふ　小店員の周旋乞ふ
就職の周旋を乞ふ　保證を乞ふ
文章の添削を乞ふ　注文品の延期を乞ふ
農作物の分讓を乞ふ　田地賣却の周旋を乞ふ
子守女の周旋を乞ふ　運轉手の世話を賴む
紹介を乞ふ　留守を依賴す
建築の設計を乞ふ　子弟の監督を乞ふ
仲裁を乞ふ　勸誘を乞ふ
第一七節　注　文……二三〇
書物の注文　呉服類の注文
印刷物の注文
第一八節　招　待……二三一
新年宴會に招く　祭禮に招く
結婚披露に招く　新築披露に招く
勸迎會の案內　初午に招く
園遊會に招く　端午に招く
納涼に招く　觀月に招く
忘年會に招く　誕生日に招く
壽宴に招く　開業祝に招く
留別會に招く　送別會に招く
全快祝に招く　法律に招く
懇親會に招く　移轉祝に招く
第一九節　懇　談……二三四
座談會開催につき相談　貯水池開鑿の相談
堤防修理につき相談　道路開通の相談
壽筵開催の相談　土地の客附につき相談
第二〇節　送　迎……二三六
遊學者を送る　入學者を送る
轉任する人を途る　官吏の赴任を迎ふ
第二一節　商　事……二三七
披露の手紙　申込書
請求の手紙　注文の手紙
辯解狀　推薦狀
試賣を依賴する手紙　商品賣込の手紙
避暑案內の手紙　商況報告書を依賴する手紙
注文承諾の手紙

——終——

緒言
第一編　美容と禮儀作法
第二編　服裝と禮儀作法
第三編　訪問と禮儀作法
第四編　應接と禮儀作法
第五編　饗應と禮儀作法
第六編　冠婚葬祭と禮儀作法
第七編　結婚と禮儀作法
第八編　生花と禮儀作法
第九編　茶の湯と禮儀作法
第一〇編　書翰文と禮儀作法

現代禮儀作法全書

緒言

古事記に「伊邪那岐神、妹伊邪那美神と一もに、天の御柱をめぐり、契を結び給はんとして、伊邪那美神先づ、あなにやし、え男をと宣ひ、次に伊邪那岐神、あなにやし、え少女をと宣ひ、御子を產せ給ひしところ、何れも天神の御意にかなはなかつたので、鹿の肩骨を燒いて禱り、天意をうかゞひ奉りしに、男神をさしおいて、女神より先に宣ひしは惡しとあつたので、あらためて伊邪那岐神より宣り直して契り給ひ、やがて多くの國々を產み給ふた云々」とあるのを見て、和學者はこれを以て禮の濫觴なりと主張し、且つこの二柱の神が、天の御柱をめぐり給ひしは、本朝に於ける婚姻の始めであると說いて居る。これに對して漢學者は、我國の禮法は支那と交通する頃になつてから、彼地より渡來したもので、それ以前には我國には、禮法はなかつたものゝごとく反駁して居る。

是等の說は、いづれも據りどころもあり、一應は有理のごとく思はれるが、元來禮法なるものは、何時の世、いかなる者によつて創始せられたものといふべき性質のものでなく、人類が先天的に享有せる本性の發露であつて、舊約の創世記に「アダムはその妻イヴの勸めにより、園の中央にあつて果實を食ひしに、彼等の目は俱に開いて、その裸體なることを始めて知り、無果花の木葉を綴つて裳を作つた。彼等は園の中に、日の涼しい頃歩み居たるに、エホバ神の聲を聞いたので、アダムとその妻は、エホバ神の前を避けて身を隱した。エホバ神アダムを呼び、汝はいづこに居るやと尋ねしに、アダムは、われ園の中に神の聲を聞き、裸體なるにより、恐れて身を隱した」との物語に現はれて居る、アダムが裸體を恥ぢた如きもまた禮の一端である。

人類は元來集團的生活を好み、太古蒙昧の時代に於て、木實を食ひ、樹下石上を宿とした蠻族でも、必らず同類相依り、相集つて部落を作り、社會的の生活を營んだことは、あらゆる歷史の明證するところである。而して人類が、社會的生活を營むについては、その團體を統一し、保護し、發達せしめる必要上、暗默の裡に秩序を保つことを認めたに相違ないが、この秩序の觀念は、人類本然の性たる畏敬、尊信、恥羞及び和合の

念を基調として、最も自然的に生じたものである。然るにかゝる時代の元始人類は、その性が淳樸寡慾にして、思想も極めて單純であつたから、感情の發動するまゝに、喜怒哀樂の發作もまた端的であつた。それと共に一面には又、神明及び父母長上を尊信する念も深く、少しく奇異の現象を見れば、直ちに神明の爲し給ふところと解し、若し神慮に悖つては、冥罰を蒙むらんことを恐れ、各自發動を抑制し、行動を慎み、何等形式的道德律の存せぬ時代に於て、既に信仰、約束、愛敬等の光明を有してゐた。然してこの三者は、年と共に漸次發達し、信仰は宗教となり、約束は法令を生じ、愛敬は禮法となつて、いよいよ社會國家の安寧秩序を保つに至つたのである。

經書に「天子禮を制し庶民之を行ふ」とあることにより、禮なるものは、天子の作爲し給ふものゝ如く解する者もあつたが、是等は「君主は天の命を奉じ、これを四海に施すにより、尊稱して天子といふ」との思想より生じ、禮法もまた、天子が天の命を受けてこれを作り、庶民をして行はしめたものとの誤解に過ぎない。

禮法はあくまで人類の有せる、自然の意志の表情より生じて進歩發達したもので、何者と雖もこれを作り得る性質のものではなく、假令これを作爲するとも、決して故意をもつて作るべきものではない。されば「君主制禮」の如きは、單に君主は時勢の要求に應じて禮の根本精神に基き、その時代に適し、人情に投ずべき禮法儀式を制定し、庶民はこれによつて行動すべきを意味するに過ぎないのである。

禮記に「禮は敬するのみ」とある。敬とは易經にある「內を直くする」の意で、常に慎みあるをいふのである。釋名には「禮は體なり」とある。體については、周禮の春官註疏に「心を統るを體といふ」と說いてある。また說文には「禮は履なり」とある。履とは卽ち、人の道を履み行ふの意である。

禮の字を、その組合せによつて解剖すると、豐に從ひ示に從ふとなつて居る。豐の字の本體は豐で、祭祀に用ゐる器物の形象である。故に豆に從つて居る。豆は木來菽麥の類ではなく、神前に物を供へるとき、これを盛る豪で俎豆と續くべき文字である。次に示は神といふ字のごとく、クニツカミと譯して居る。是等を綜合するときは、禮は神祇に奉事するの意志形體を採つてその名としたものといひ得る。

然して單に字義の上より、禮を分類すれば、有形的と無形的との二つとなる。前記釋文の「禮は體なり」說文の「禮は履な

り」などの語は、有形的に觀察したもので、日常の行爲を慎むべきを誡めたものである。次に禮記の「禮は敬なり」は、孟子が「辭讓は禮の端なり」といつたのと同じく、意志の上より觀察したものである。かくの如く、禮に內外二方面の意義を有せることは、自他の見解より來つたもので、例へば自己の身についていへば謹慎の義となり、他人に對しては愛敬の意となるからであつて、貝原益軒も禮を說いて「禮は心に慎みありて、人を敬ふを本とし、萬事を行ふに則に從ひて、正しく理あるをいふ……威儀を正しくするとは、身の形儀をつゝしむなり、これ禮儀の重んずるところなり。外の形儀みだりなれば、內心も共に不敬となるなり。敬みは心にあるのみならず、內外ともに正しくすべし。坐す時、臥す時、皆禮ありて怠るべからず」と說いて居る。

禮の最も大切なるところは精神と活用である。而して禮の精神とは「行修言道の質」をいふのである。若し禮にして精神なきときは、親疎を定め、疑滯を決し、同異を別ち、是非を明らかにすることが出來ぬ。卽ち虛禮である。次に禮の活用とは、從容迫らず、恭敬度を失はず、緩急節に中るの謂ひにして、卽ち和である。故に聖賢は和を以て天下の達道となし、大小の事、皆これによつて處決するのである。

然るに和の貴きを知りながら、これを行ひ能はざる所以のものは、禮を以てこれを節することなきがためであつて、かくの如きを虛式といふのである。虛禮と虛式とは期道の茶毒である。故に苟くも禮を學び、これを行はんとする者は、禮の精神の存するところを探求し、よく活用の道を明かにしなければならぬ。然らざれば、折角仁義道德を說き、倫理修身を講じても、その功果を收めんことは不可能である。禮記に「道德仁義は禮にあらざれば成らず。教訓俗を正すは、禮にあらざれば備はらず、爭ひを分ち訟を辨ずるは、禮にあらざれば決せず。君臣上下父子兄弟、禮にあらざれば定らず。官學師に事ふるに、禮にあらざれば親まず。朝に班し軍を治め、官に莅み法を行ふ、禮にあらざれば威嚴行はれず。禱祠祭神鬼神に供給する、禮にあらざれば誠ならず、莊ならず」と說く所以である。

才智に富み、學識深く、技藝に長ずるとも、禮なきときは傲に長じ、慾を縱にし、志を濫さんことを思ひ、樂しみを極めんことを希ひ、或ひは恭にして勞し、勇にして亂れ、直にして窮し、富貴にして驕に流れ、貧賤にして志偏きに至るのである。經書に「人にして禮あれば安く、禮なければ危し」とあ

るのはこのことである。

第一章　禮儀作法の意義

禮を分つときは禮儀と作法とになり、之れを併稱して普通に禮法と稱して居る。然して禮儀とは經禮の謂ひで、精神思想の準繩となるべきものであり、作法とは威儀卽ち典禮の謂ひである。語を換へていへば、敬愛と遜讓との本性を發露したものが禮儀であつて、これは精神上のことであるから無形であるが、この赤誠を行爲として表はすに至つて、玆に始めて作法といふものが生じて來る。されば愛敬すべきを愛敬せず、崇拜すべきを崇拜せざるを無禮といひ、上長の面前に於て安りに横臥し、或は食卓に向ひて噴嚏し、或はまた坐臥進退に規律なきがごとき行爲を、無作法と言ふのである。

かくの如く嚴密に區別するときは、禮儀と作法とは二にして一ならざる如きも、禮儀を缺ける作法は、これを作法と稱するを得ず、作法なき禮儀は、これを禮儀と稱することを得ないのであるから、二者の區別はいつしか混合し、禮儀といへば作法をも含み、作法といへば、また自から禮儀をも含むやうになつたのである。

禮の精神は、萬代不易のもので、何人たりともこれを變更することを得ないが、禮の活用たる作法に至つては、人智の發達と、時勢の推移とに順應して、その形式を變へなくては、如何に優雅な起居、審美た進退といへども、要するに死法にひとしく、これを以て眞の禮法といふことを得ないから、支那に於ても殷は夏を損益し、周はまた殷を損益するといふ如く順次變遷し、我國に於ても、上世期の作法は中世期の作法にあらず、中世期の作法は、近世期の作法にあらずといふ如く、その形式は、常に世とゝもに變更して居る。

然しながらその推移變遷は、すべて自然に基くべきもので、私意を以てこれを考案作爲することは許されない。若し强ひて私意をもつて考案せんか、如何に優麗高雅なりとも、これを以て作法と稱するを得ず、所謂優倡侏儒の戲技に過ぎないことになる。故に日常の作法に於ては、迂遠なる古禮の式法を學ぶ必要はない。時の宜しきにしたがつて、これを行ふまでのことであるが、作法には作法として、終始一貫して、秋毫も犯すべからざる法式があるから、時宜に從ふといつても、この法式を無視することは出來ない。然してその作法の法式なるものは、

一　人に對するには至誠と同情とを以てすること。

二　公私の別を明らかにすること。

三　上下の別を誤らぬこと。

四　常に意氣の平靜を保ち、その行爲は閑雅高潔なること。

五　起居進退節に適ふべきこと。

六　時の宜しきに從ひ、人に不快の念を起さしめざること。

七　阿諛に流れ、諂佞に陷らざること。

等である。作法は單に法則を知るのみで滿足すべきでない。實踐をもつて主とすべきものである。故に作法を學ばんとする者は、先づ座作進退の法式より入つて、常に實踐躬行せんことを心掛けねばならぬ。進退記に記されて居る次の一文は、深く玩味すべき言である。

人の躾は角のなきを宜しとすと古より言傳へたり。角のなきとは、立居振舞常に慧りて、ことゞくしく人目に立つことなきを言ふなり。常に我家にある時禮儀作法なく、濫りに我儘にする人は、必ず嘲がましき座敷に出で、人の立居振舞の正しきを見て、我と我身の振舞の惡しきことを悟り、人に恥づる心出で來る故に、心後れて立居振舞も自から姿縮け、陽かならずして、卑しく見ゆるものなり。それを左樣に見えぬやうせんとて、俄かに人々の立居振舞を眞似て、常に仕馴れぬことをする故却つて見苦しく、自から角も出で來て人の目に立ち、ことゞくしく見えて惡しきものなり。常に我家にある時、立居振舞ひ、物の取扱ひ、物言ひ、物食ふことまで、他人の前にある心にて謹み、たしなみて仕馴れたる人は、如何なる貴人高位の御前、晴れたる座敷に出づるとも、心おくれることなく、人に恥づる心もなく、立居振舞すらゝと暢かにして、少しも角といふものなく、人の目に立つ節もなし、之を良しとするなり。心滯る時は事も滯り、心滯らざる時は、事も滯らずして、自から角なきなり。只常に、我家に在る時の躾け肝要なりと知るべし。

第二章　禮儀作法と挨拶

第一節　挨拶の要領

一般の禮儀作法と挨拶の仕方については夫れゞの部門において詳述することにし、本節においては各部門に入る前提としてその要點を述べたに過ぎぬ。從つて各部門と重復の個所もあるが、讀者において豫め御承知を乞ふ。

照會　照會の理由を述べて、然る後具體的のことを聞き合すこと。

交渉　無理押しでなく正々堂々と、筋道の立つた理屈をもつて話を進めること。

申込　自分の意思要求を先方に諒解せしめて、これが應諾を得るのが目的であるから、先づ十分に申込の事由を詳述し、然る後同情を求めるやうな言辭を以て申込むこと。

勸誘　先方に或る種の衝動を與へ、然る後わが方へ引付けねばならぬから、先方の身分、境遇、性質等をよく考察し、先づその慾望を挑發せしめてこれを誘導すること。

拒絶　拒絶はその事の善惡利害の如何にかゝはらず、相手方をして、その希望を裏切らしめる結果となるのであるから、その拒絶すべき理由を十分に述べ、柔和なる態度と、穏和にして同情ある言語をもつてこれに對し、決して惡意を以て、先方の意思に逆ふが如き言辭を弄してはならぬこと。

抗議　當然の條理を述べて對せねばならぬが、その條理を述べるに當つては、權威者の如き傲慢なる態度を以てせず、飽くまで謙遜なる態度、優和なる言葉をもつて、悠々と話しを進め、決して威壓するが如き、また焦噪にして激したる如き言語を發せぬこと。

注文　恩を賣るが如き、或は命令するが如き態度に出でず、飽くまで禮讓を旨とし、溫顏和言をもつて相手に對し、言ひ違ひ、聞き違ひのなきやう注意すること。

依頼　誠意を盡し、對者の同情に訴へるに十分なる言語態度をもつて臨むべきであるが、徒らに言辭を飾り、哀訴嘆願するが如き言動は、却つて相手の反感を招いて失敗するものと心得ること。

承諾　承諾は對者に滿足を與へる結果を來すから、往々にして言語動作とも傲慢に傾きやすく、そのため、折角他の申込を承諾しながら、却つて不快の念を起さしめることがある。故に如何なる場合でも誠意を失はず、且つ禮を案さぬやう注意すること。

催促　催促には相當の權利が伴ふから、往々にして權柄づくの態度に陷りやすいものであるが、かゝる態度をもつて臨むことは、既に應諾せんと思つて居る相手も、却つて反感を抱き、拒絶することがないとはいへない。故に催促は權柄ぶるよりも、寧ろ同情を求めるが如き言動を以て、相手に接すること。

請求　請求の理由を詳述し、溫和なる言語、切なる情を以て、相手を動かすこと。

協議　辭を低くし、協議といふよりも、寧ろ依頼するが如き態度を以て臨むこと。

反駁　感情に囚はれ、或は情實に動かされることなく、先づ冷靜なる批判の後、自信を以てなさねばならぬが、勝利を得んことにのみ拘泥せず、若し先方の條理が我が主義及び主張以上であることを發見した場合は、潔よく勝を讓ること。

辯解　殊更に己れを庇護せんとせず、單に有りのまゝを述べて、相手の批判に訴へるべきであるが、その言動は、勿論丁寧にして、儀礼的であること。

謝罪　陳謝は申譯のための謝罪ではなく、衷心より己れの非を謝する態度に出ればその言は盡さずとも、先方の曲意を氷解せしめることが出來るから、何處までも衷心から陳謝すること。

忠告　先づ自分が、忠告される當人の立場に立つて見て、如何なる理由を述べ、如何なる言語をもつてすれば、相手の感情を害せずして、我が忠告を入れしめ得るかを冷靜に考察し、飽くまで同情ある態度にて、誠意をつくし、溫言をもつて、成るべく簡明にその非を誡めること。

保證　あやふやなる言行を避け、斷乎として、飽まで自信ある態度をもつて明瞭に證明し、對者をして信用せしむるに努めること。

報告　報告は虚僞は素より、已れの想像を加へることもまた禁物である。飽くまで有りのまゝを報告すること。

一　時令の言葉

初春　餘寒が誠にきびしう御座います。
○春とは申しましても嚴しい寒さで御座います。
○朝夕はまだ〳〵嚴しい寒さで御座います。
○日增しに暖かになつて參りました。
○漸く春めいて參りました。

盛春　暢やかな時候になりました。
○長閑な時候になりました。
○大層暖かに成りました。
○めつきり暖かに成りまして御座います。
○花がそろ〳〵咲き出しまして御座います。
○いゝ陽氣になりまして御座います。

晩春　花もそろ〳〵散り初めました。
○そろ〳〵夏が近づきました。

○日中は暑さを覺える時候になりました。
○夏らしい景色となりまして御座います。

初夏　そろ〳〵暑くなりました。
○暑さもやう〳〵募りまして御座います。
○昨今は急に暑くなりまして御座います。
○戸外はもう眞夏のやうで御座います。
○青葉の蔭がなつかしい時候となりました。

盛夏　酷しい暑さで御座います。
○早くも眞夏になりました。
○昨今は煎付くやうな暑さで御座いました。
○本年の暑さは格別で御座います。
○もう暑さも峠で御座います。

晩夏　まだ〳〵暑さも酷しう御座います。
○殘暑の酷しさはまた格別で御座います。
○朝晩はどうやら涼しくなりました。
○日中は相變らずの暑さで御座います。

初秋　朝夕は涼しくなりました。
○朝夕は蟲の聲が聞ける時候となりました。
○漸く秋らしくなりまして御座います。
○朝夕は凌ぎやすくなりまして御座います。
○日に增し涼しくなつて參りました。
○秋の時候になつて參りました。

仲秋　朝夕は肌寒くなりました。
○袷の欲しい時候となりました。
○急に涼しくなりました。
○夜長の候となりました。
○すが〳〵しくて心地のよい時候となりました。
○一雨ごとに涼しくなつて參りました。

晩秋　そろ〳〵冬も近づきました。
○朝夕は袷でも凌ぎ難くなりました。
○寒い冬が近づいて參りました。
○秋も暮れまして御座います。

初冬　日增に寒くなりました。
○朝夕は急に寒くなりました。
○そろ〳〵寒さに向つて參りました。
○朝夕は白いものを見る時候となつて參りました。
○行火の戀しい時候となりました。

中冬　お寒う御座います。

○寒氣も追々と酷しくなつて參りました。
○いよ〳〵お寒い時候となりました。
○一方ならぬ寒さで御座います。
○其後はめつきりと寒さが加はりました。

晩冬　酷しい寒さで御座います。
○本年の寒さは格別で御座います。
○堪え難い寒さで御座います。

不定季　氣持のいゝお天氣で御座います。
○鬱陶しいお天氣で御座います。
○いゝ工合にお天氣になりました。
○毎日お天氣で結構で御座います。
○いつ迄もいやな雨が降りつゞきまして御座います。
○いつまで續きますのかいやなお天氣で御座います。
○久しぶりにいゝお天氣になりまして御座います。
○近頃はお天氣つゞきで結構で御座います。
○一雨來るとよろしう御座います。
○もう程なくお天氣になりますで御座いませう。
○不順な時候で御座います。
○時節柄まことに不順で御座います
○毎年の例でいやな時候になりまして御座います。

二　見舞の言葉

寒暑　昨今は酷しい寒さ(暑さ)で御座いますが、如何でゐらつしやいますか、別段お變りも御座いませんでせうか。
○近年にない暑さ(寒さ)で御座いますが、皆さまお變りは御座いませんか。
○本年の寒さ(暑さ)は格別で御座いますが、御一統さまにはお達者でゐらつしやいますか。
○仰せの通り寒に酷しい暑さ(寒さ)で御座いますが、お蔭さまで此方はみな無事で御座います。
○仰せのやうに本年は格別の寒さ(暑さ)で御座いますが、お蔭をもちまして一同達者に暮して居ります。

病氣　承りますれば御母堂さまには、先達てより御病氣ださうで御座いますが、御容態は如何で御座いませうか。
○久しく御無沙汰をいたしまして、少しも存じませんで居りましたが、御老人樣には、近頃御病氣ださうで驚きまして御座います。存じませぬことゝて、お伺ひも致しませずまことに失禮をいたしました。

○日増しに御快方の御事と存じますが、御容態は如何で御座いませう。

○わざ〳〵御見舞下さいまして有難う存じます、ほんの一寸した感冒で御座いまして、この節はお蔭さまにてよほどよろしう御座います。

○わざ〳〵のお見舞で恐れ入りまして御座います、何分老人のことで御座いますので、良くなつたり、悪くなつたり、差引が御座いまして定りかねて居ります。

○この品はまことに御粗末で御座いますが、御病人さまに差上げて頂きたう御座います。

○この品は御病人様のお口には如何かと存じますが、何卒お目にかけて頂きたう御座います。實はあれこれと探しましたので御座いますが、一向見當りませぬので、失禮ながら斯樣なお粗末なものを持參致しまして失禮に御座います。

○わざ〳〵お尋ね下さいました上に、お心にかけ、大好物のものを頂きまして、さぞ當人も喜ぶことで御座いませう。

○お見舞下さるばかりでも有難う存じまするに、かやうな結構な品物まで頂戴いたしまして、何んとも忝う存じます。お言葉に甘えまして遠慮なく頂戴いたします。

○天災只今は突然御近所よりの出火にて、さぞお驚き遊ばしたことで御座いませう。幸ひ類焼を免れましたのは、御不幸中の幸ひで御座いました。

○御近所よりの貰ひ火にて御類焼遊はされまして、お氣の毒の至りで御座います。

○御類焼の御厄難にお罹りになりまして返す〳〵もお氣の毒で御座います。然し世の諺にも焼け太りと申すことも御座います通り、この御不幸が、今後如何ほどの御幸運を招かぬとも限りませんから、何卒お氣落しのなきやうお願ひいたします。

第二節　一般挨拶の仕方

訪問　初めて人を訪問せんとするときには、先づ名刺を以つて先方に至り、玄關に立つて「御免下さい」とか「御願ひ申します」とか、相當の言葉を以て案内を乞ひ、内から返辭があつたら少し脇によつて控へて居る。かくて取次の者が玄關へ現はれたら、その坐するを待つて會釋をし、名刺を取次の者の前に置き

「私はかやうの者で御座いますが、何々の件につきまして、

御主人に御面會が願ひたくて參りました。御多忙のところを恐縮で御座いますが、御在宅ならば、お取次を願ひます」

といふ風に挨拶をするのである。

若し名刺を持つてゐないときは「私は何々と申す者で」と姓名を名乘り、尚ほ丁寧にするときは、自分の勤め先、或は住所等をも告げる。かくて取次によつて、主人の室に案内されたならば、正しい態度と作法をもつて室に入り、主人に對して挨拶を述べ、次に用談に移るのであるが、初對面の場合は、室内に入つて席につくとゝもに、主人の方から

「御訪ねを受けました何々は私ですが、貴公が何々さんで御座いますか」といつた風に、差出してある名刺によつて、言葉をかけるのが法であるが、若し主人にその心得なくして、或は他の事情のために、その言葉がかゝらなかつたら、此方より次の如き挨拶をするのである。

「御多忙の際、突然御邪魔をいたしましてまことに恐縮で御座います。失禮ながら、貴下が御主人（又は何々）樣でゐらつしやいますか」

これによつて、座中の人が主人なりや否やを確め、然る後初對面の挨拶をするのである。その初對面の挨拶は、普通

「初めてお目にかゝります。昨今はまことに酷しい暑さで御座いますが、御健昌で御結構に存じます。私は名刺にある通りのもので御座います、何卒以後よろしくお引立のほどを願ひます」

この挨拶に對し、主人の方よりも、勿論何んとか返禮があるから、それを受けて後ち用談に移るのである。

要談に移るときは

「早速ながら」とか「本日伺ひました用件は」とかの冒頭を述べ、それより徐かに、しかも要領を明らかにして、簡單明瞭に用談を終り、常の作法によつて辭し去るのである。

紹介　男子同志を紹介するときは、地位身分の下の者を上の者に、男女を紹介するときは、男子を婦人に對して紹介するのが禮である。

今甲が乙を丙に紹介せんとする時は、その仕方は、甲は先づ兩者の間に介して

「御紹介いたします」と豫告して、乙丙の兩人に注意を與へ、然る後丙に向ひ

「こゝに御出でになるのは、何の何さんであります」と乙の身分職業及び、甲なる身分との關係を述べて紹介し、次で乙

に向ひ

「この御方が、いつか御話したことのある丙さんです」といつた風に引合すのである。

これに對して被紹介者たる乙は、初めて丙に對して言語を發し

「御尊名は、甲さんよりかね〴〵承つて居ります、爾後何卒よろしくお願ひいたします」といつたやうに挨拶し、丙は又これに對し

「これは申し後れて失禮いたしました私は丙で御座います。御同然によろしくお願ひ申します」といふ風に返禮し、これにて紹介は終るのであるが、場合によつては甲は、乙丙の兩人を介錯して握手させることがある。

握手が終つて乙は甲に對し、丙に紹介して貰つたことに對し、感謝の意を表するため

「有りがたう」などゝ、簡單に挨拶するのである。

紹介者なくして、甲乙兩人が、直接に自己紹介をする場合もある。

かゝる場合は、一方より袖手たる他方に名刺を渡し

「私は斯樣の者ですが、將來よろしくお引立を願ひます。御尊名はかね〴〵承つて存じて居ります」などゝ挨拶し、それに對し、一方は丁寧に名刺を受け、自分の名刺をも渡した後も

「お互ひに、よろしくお願ひいたします」といふ風に答禮をするのである。

この場合の挨拶は何れも成るべく簡單でよい。

集會　自分に關係ある同業組合會、同窓會、慰安會、懇親會等にその會員の一人として招かれ、列席したときには、先づ幹事の者または司會者に向つて挨拶を述べ、次に會員一同に對しても一應の挨拶あるべきである。

幹事側に對する挨拶の口上は

「この度は、いろ〳〵と御盡力を願ひまして、例年の如く、盛大なる何々會をお開き下され、並々ならぬお骨折に對しまして、厚く敬意と謝意を表します（又は厚く御禮を申上げます）」といふ風でよい。それに對して幹事または司會者側からは

「御多忙のところを、わざ〳〵御出席下さいまして御苦勞さまで御座います」などゝ返禮がある筈である。

また列席せる會員一統に對しては、單に「皆さん御苦勞さまで御座います」と述ぶればよろしいのである。

宴會　宴會に招かれたときには、先方に至り主人に對面の上、先づ祝詞と謝辭とを述べねばならぬ。たとへば結婚披露の祝宴ならば

「この度は御令息何樣と、何子孃との御婚儀も滯りなく相運びまして、まことにお目出たう存じます。就きましては御披露のためとありまして、御懇切なる御招待を蒙りまして、有難う存じました。外々のことなら兎も角、人生何よりの御慶事で御座いますから、遠慮なくあやかりに參りまして御座います」といふ風に述べるのである。

これと同時に、一定の場所に名刺を置くのである。

それに對して主人側からは「有難たう存じます」と、先づ祝詞に對する謝辭を述べ、ついで

「御多忙の折柄、わざ〳〵お招き申し上げて、何んの用意も御座いませんが、何卒ゆる〳〵お遊び下さい」といふ風に答禮して、控室に案内するのである。

他家に招待されたとき、贈物でも見る場合には

「失禮ながら拜見いたします」と主人に挨拶して後ち、一定の作法によつて拜見し、自席に歸つて後ち

「流石はお好みだけに、御結構で御座います」とか、或ひは又「有名なお品だけに、意想外にお見事で御座いました」などゝ挨拶するのが法であつて、見たまゝ何んの挨拶もせぬのは非禮である。

さりとて、餘計なことを言つたり、褒め過ぎたりすることは、猶ほ以て慎まねばならぬ。

かくて用意も整ひ、會場に案内されて食卓につくと、主人側より一同に向ひ

「さて御覽の通り何んの用意も御座いませんが、本日をお祝ひ下さる思召にて、十分召上つて下さい」などの挨拶があるから、その時には一同禮拜してこれに應へ、次で一番上席の者は、列席者に向ひ

「どなたもお先へ失禮いたします」と挨拶して箸をもつたら一同もそれに倣つて飲食を初めるのである。

送迎　知己友人が他に轉任または長途の旅に立つにつき、退去の挨拶を受けたら、それが名刺ならば此方も名刺、手紙ならば此方も手紙、また本人直接の訪問ならば、此方も先方を訪問してこれに應へ、然る後ちいよ〳〵出立の當日、汽車または船の乘場までこれを見送るのである。

この時は、本人よりも少しく早や目に現場に赴いて、當人の來るを待ち、來たらすぐこれを出迎へて一禮し、簡單にして且つ慇懃に送別または祝別の辭を述べるのである。そのときの言葉は、たとへば轉任ならば

「いよ〳〵お立ちださうで、お名殘り惜しう御座います。何卒御道中お氣をつけて行かれますやう、なほ先方へお着きになりまして後ちも、從來の如く御交際をお願ひいたします」

とか、一層簡單に「いよ〳〵お別れに臨みまして、將來の御榮達を衷心よりお祈いたします」とかいつた風に述べるのである。

かくて先方が船または汽車に乘り込んだら、見送る者もその後についてプラットホームまたは桟橋に出で、發車または解纜のときは脱帽して一禮し、その姿の見えずなるまで目送するのである。

外國人の來朝するのを迎へるときは、大抵船から上陸して來るから、到着前に波止場に赴き、船着けの場所に入つて待ち、船が着くと同時に、休憩所を出で、定められた場所にて迎へ、歓迎の挨拶をするのである。

このときの言語は、英米人ならば英語、佛蘭西人ならば佛語といふ風に、その人の國語が出來ればこれに越したことはないが、さもない時は、日本語で簡單に、然かも友情のこもつた言語態度をもつて述べるのである。

洋式の饗應　洋式の饗應は午餐會、晩餐會、レセプション、アトホーム、園遊會等であるが、この中レセプションとアトホームとを總稱して、一般に夜會といつて居る。

午餐會と晩餐會とは、日本流の會食であつて、最も親密な間柄において行はれるものであるから、これに招かれても、禮服の着用には及ばない。

晩餐會の招待狀には、返事は求めないことになつて居るが、案内狀を受取つた側からいへば、相當の挨拶をするのが禮である。

午餐會も晩餐會も、その時刻は午後四時から五時までの間が通常であるが、音樂などを入れて興を添へるときには、それより遲くなることがある。然し如何に遲くなつても、十時になつたら、辭して去らねばならぬ。

夜會の中レセプションは、國務大臣が外國使臣を歓迎したり、或ひは外國政府の代表者が、日本の名士を招待して、親交を求めんとする場合に限つて行はれ、餘興としてダンスが

行はれる。この案内狀に對しては、回答は不要とされて居る。

アトホームは個人同志の交友を温める目的をもつて開かれ、餘興には音樂が伴ふのが常である。その案内狀には、普通は回答を要しないことになつて居るが、受けた方よりすれば、何等かの回答を與へるのが禮にかなつた行爲である。

夜會の開會時間は九時が普通で、定食は十一時から十二時までとなつて居る。會食が初まる前に、主人は來賓中の最も高位の婦人の手を取り、主婦は高位の男子の手を取つて會場に案内するが、これより先來賓中にも、それ〴〵相手を定めることになつて居る。

夜會に招かれたときは、それより一週間以内に、お禮のため、先方へ名刺を持つて行くのである。

園遊會は多くは個人的のもので、何かの慶事の祝宴を兼ねて行はれるのが常である。然してその案内狀は、二週間以前に出すべきもので、宛名は先づ夫婦同列、主催者側も主人夫婦の連名とするのが法である。

この案内狀には、回答を求めないことになつて居る。

當日になつたら、會場の入口にテントを張つて受付を設け、こゝに主人夫婦が出て客を迎へるのである。

招かれた者は、既に送られた案内狀を入場券として差出し、主人夫婦に挨拶して後ち、案内者に導かれて會場に赴くのである。

時刻は大抵午後三時に始まり、六時に終るが、開會の時刻となると合圖の鐘を鳴らして式場に集合し、それより主人側の挨拶がある。

これに對して來賓は、祝意または敬意を表するため答禮の挨拶をなし、それを終つて宴會場に案内されて饗宴となるのである。

かくて饗宴も餘興も終つたら、來賓は主人夫婦に挨拶して退出し、その翌日改めて、招かれた方へ名刺を持參して、お禮の挨拶に代へるのである。

第三節　祝儀と挨拶の仕方

新年　年賀の訪問は成るべくならば三ケ日、おそくとも松の中にすべきもので、正式の服裝を整へ、名刺を用意して出かける。先方に對する挨拶の口上は「新年お目出たう存じます、昨今中は一方ならぬ御世話樣になりまして、まことに有難う御座います。本年も相變りませずお引立を願ひます」といふ

のが紋切形で、これに對して受けた方は「お目出たうございます。お早々とお越し下さいまして恐縮に存じます。私どもこそ、いろ〳〵とお世話になりまして、厚くお禮申上げます。本年も何卒相變りませず」といつた風に挨拶する。

結　婚　結婚の通知を受けたら、早速先方へ出かけて行つて、祝詞を述べる「何子樣は、この度御良緣がお調ひになりまして、まことにお目出度う存じます。御兩親樣も、定めし御安心なさいましたことで御座いませう」若し新郎側ならば、最初の「何子樣」を當人の男名に代へるか、或は「御令息樣には」とすればよい。祝品を持參した場合は、祝詞を述べた上それを差出し「これは誠にお粗末で御座いますが、お祝ひの印までに持參いたしました、幾久しくお納め下さいませ」と述べる。

祝品を受けた方は「これは御丁寧に恐れ入りました」と兩手で受けて一寸戴き、上座に据ゑた後ち「娘(又は息子)の結婚につきまして、御鄭重なお祝ひの品をいたゞき、まことに有難たう御座います、幾久しく頂戴いたします」と挨拶を述べる。

披露宴に出席したとき招かれた自身が新婦側の知人であつた場合は、新婦及びその兩親に向ひ

「この度はおめでたう存じます、今日はまたお招きに預り、有難うございました。喜んで參上いたしました」と挨拶を述べる。このとき新婦側の兩親は、これを新郎並に新郎側の兩親に紹介するから、その紹介のあつた後で、新郎側に對し「この度はおめでたう御座います。私は何某樣(嫁方の姓をいふ)から、常々お世話になつて居る何某でございます。どうぞ幾久しくよろしくお願ひ申します」と挨拶し、次で双方の知己親戚に對しても「今日はお目出たうございます」と、一應の挨拶を述べるのである。

出　產　出產のお祝ひには、玄關で家人に向ひ「この度はお坊ちやま(又はお孃さま)御出產ださうで、まことにおめでたう存じます」と祝詞を述べ、次で「御產婦樣も赤さんも、お健やかで居らつしやいますか」と見舞ふ。さらに祝品を贈るならば「これは心ばかりで御座いますが、お祝ひの印までにお目にかけます。どうぞお後を御大切になさいますやうに」と述べて辭去する。

受けた方では「御丁寧に恐れ入りました。まことに有難う存じます。お蔭さまで產も案外輕く、兩人とも丈夫でございます」と述べ、客が玄關から歸るとき「さつた產褥に居りますので、お目にもかゝらず失禮いたしますが、產婦もさぞかし喜ぶことで御座いませう」と言ひ添へる。

出產の祝ひは、普通二週間位ゐは、產婦は產褥に居るから、そんな中へ訪問するのは失禮である。成るべくおそいのがよいが、若し都合で早く行つた場合は、座敷に通らず、玄關で應待するのが禮である。尤も極めて親密な間柄ならばこの限りではない。

榮轉　榮轉する人に對しては、早速先方を訪問して「この度は御榮轉でお目出たう存じます。お國元の御兩親樣も、定めしお喜びのことゝ存じます。然し折角御懇意に願つて居りましたのに、お別れいたすのは、お名殘りをしう御座います」と挨拶を述べる。

これに對して受けた方は「わざ〳〵お訪ね下さいまして恐れ入りました。お蔭さまで何地(轉任先)へ參ることに成りました。こちらに居ります間は、いろ〳〵お世話樣に成りまして、お禮の申しやうも御座いません」と返禮をする。若し轉任先が、近い所であつたら、最後に「若しあの邊へお越しの節は、是非お立寄り下さいますやう」といひ添へるのも禮である。

新　築　新築の祝詞は、新築祝ひの招待を受けてから先方に參つて「この度は、大層御立派な御普請がお出來上りになりまして、まことにお目出たう存じます。この邊は空氣もよろしく、閑靜でもありまして、それにお庭も廣々として、實に結構で御座います」といつた調子で挨拶する。

受けた方は「ほんの雨露を凌ぐだけの住居で御座いますが、空氣のよいだけが仕合せです。邊鄙ですから、何のおもてなしも出來ませんが、本日は御ゆつくりお遊び下さい」などゝ挨拶するのである。

壽　賀　壽賀の祝詞は本人よりも、その子や孫に述べるのが普通で、「御隱居さまには本年古稀に當らせられるさうで、御長命の上御丈夫なことは、この上もなくお目出たう存じます。私共もあやからせて頂きたいと存じまして、つまらぬ品ながらお目にかけます」などゝ述べる。受けた方はこれに對し「お忙しいところを、わざ〳〵お越し下さいました上、結構な品を頂戴して、まことに有難たう存じます。老人も喜ぶことでございませう。お蔭さまで至つて丈夫で、一同喜んで居るやうな譯でございます」といつた調子で挨拶をする。

病氣全快　病氣全快を祝する挨拶は「御主人様には御病氣が御全快なさいましたさうで、まことにお目出度う存じます。長い間の御看病で、奥様にもお大抵ではいらつしやいませんでしたでせうが、これで御安心でございませう。御大病の後は却つて以前よりも御健康におなりなさる例が多うございますから、御主人様も、御丈夫におなり遊ばすこと〻存じます。然し只今は不順勝ちでございますから、どうかお後を、呉々もお大切になさいますやう」といつた風に述べる。

これに對して受けた方は「態々の御越しで恐れ入ります。また病中は度々お見舞下さいまして有難うございます。お蔭様ですつかり全快致しまして、昨日床上をいたしました。これも皆様の御親切の賜と、當人初め、家内一同感謝致して居ります。まことに有難う存じます」と述べる。

昇進　昇進の場合は、その事を聞いたならば、成るべく早く先方に赴き「この度はお目出たう存じます。これと申すも、平素御精勤の結果でございまして、定めし御滿悦の御事と恐察申上げます、この品は心ばかりのお祝ひの印までにお目にかけます。何卒御納め下さいますやうに……」といふ風に挨拶する。受けた方はこれに對し「御多忙のところを恐れ入ります。殊に結構なお祝ひまで頂きまして、有難う存じます。今後とも、よろしくお引立のほどをお願ひ申上げます」などと口上を述べる。

誕生　誕生祝に招かれるのは、極めて親しい間柄であるのが普通だから、挨拶も打ち解けて簡單に「今日はおめでたう御座います」と述べて祝品を出せばよい。これに對して受けた方は「御忙しいところを、ようこそお越し下さいました。殊に結構な品を頂きまして有難う存じます。折角お招き申して、何んの用意もありませんが、どうぞ御ゆつくりなさつて下さい」など〻挨拶する。

七五三　「本年は三郎様のお三つの御祝ひださうで、お目出度う存じます。暫くお目にかゝりませんが、定めし御成人でゐらつしやいませう。これは粗末な品で御座いますが、ほんのお祝ひの印までに差上げます。どうかお納め下さいませ」など〻祝詞を述べ、祝品を贈る。受けた方では「これは〳〵御心配をかけて恐れ入ります。折角のお志ですから、有難く頂戴いたしますが、三郎も定めし喜ぶことでございませう。有難う存じました」など〻、お禮の挨拶を述べるのである。

第四節　婚禮儀式と挨拶の仕方

結納のときの口上　男女双方の婚約が成立し、結納を贈る場合は、新郎の方より、普通の召使頭といつた地位の者が、結納の使者となつて、新婚の方に赴くのであるが、このときの口上は

「手前主人より申上げます。さてこの度は目出たく御縁談が調ひまして、お嬢様をお迎へ申上げることになりまして、主人始め一同の者も喜んで居ります。就きましては嘉例により、御結納を持參いたしました。何卒幾久しくお受け下さるやうお願ひいたします」といふのであつて、これに對して新婚の方では、次の如き答禮の挨拶をするのである。

「御丁寧なる御挨拶にて痛み入ります。御縁とは申せ、この度は不束なる者を、お厭ひもなく貰つて頂くことになりまして、當人は申すまでもなく、一同この上もなく喜んで居ります。就きましては、只今は御結構なるお贈物にて、まことに有難く、幾久しく頂戴いたします。何卒御主人様へもよろしくお傳へ下さいませ。尚ほお使ひ向御苦勞に存じます」

連れへの口上　輿入の當夜、仲人が新婚を迎ひに立つた時には「この度は御婚儀も滞りなく相調ひ、いよ〳〵本日はお盃といふことになりましてお目出たう存じます。就きましては用意萬端整ひましたので、主人名代としてお迎ひに參りました」と口上を述べ、これに對し新婚の方は

「この度は種々と御配慮に預かり、本日目出たくお盃事と申すことになりまして、有難たう存じます。また只今は、お迎ひのためお越しを願ひまして御足勞さまで御座いました。只今直ちにお供をいたしますから、暫時お息みを願ひます」と答禮するのである。

合盃のときの口上　三々九度の盃事のとき、用意萬端整つて、一同設けの席についたら、媒酌人は一同に向ひ「これよりお盃をいたします」と述べ、型の如く盃事を行ひ、それの濟んだ後で、再び一同に向ひ「盃事目出たく相すみました」と告げるのである。

この時新郎新婦は、それに對して、格別の挨拶は述べない慣例となつて居る。

男入のときの口上　盃事が終つてから、五日の後男入と稱し、新婚の父母を新郎の方へ招待することになつて居る。（現今では、簡略して式の當日、新婚と共に、その父母も新郎の

家に行くことが行はれる）このとき、新婦の父又は母は、新郎の父母に向つて

「この度は御縁とは申しながら、不束な者を、貰つて頂きまして、いよ〳〵お盃事も滞りなく相すまされ、これにて安心いたしました。何を申しますも、まだ子供で御座いまして、萬事不行屆勝のことゝ存じますが、何卒末長く御教示のほどを願ひます」と挨拶し、これに對し、新郎の父母の方よりは、次の如き答禮の口上を述べるのである。

「御丁寧な御挨拶にて痛み入ります。實を申せば、分に過ぎました御嬢女で御座いますが、これも御縁なればと、一同喜んで居ります。この上は、子につながる御縁といたしまして、親は親同志、一層御親密に願ひたう存じます」

禮禮の口上　萬端の式が濟んで後、新夫婦は同行して、親戚知己並に、婚儀について世話になつた家へ禮に廻るのであるが、このときの挨拶は、新郎より「この度のことにつきましては、種々と一方ならぬ御配慮に預りましたが、お蔭さまにて、滞りなく婚儀萬端を相すましました。本日はお禮のためお伺ひをいたしました」といつた風に述べるのである。

第五節　葬儀と挨拶の仕方

葬儀　凶事のときの挨拶は、簡單にして同情に富み、且つ鄭重なることをもつて要旨とし、餘りくど〳〵しく述べ立てたり、或ひは無暗に慰安したり、或ひはまた矢鱈に悲しさうな言語を連ねたりすることは取らぬのである。それで普通は「御老人樣御病氣につきましては、何れ遠からず御恢復の御事とのみ存じて居りましたのに、思ひもよらず逝ぎさせられ驚き入りました。定めし御愁傷の御事と、厚くお悔み申上げます」といつた風に述べるのである。

これに對する答禮の口上は「御丁寧なる御挨拶にて厚くお受けいたします。何も定命と、一同も諦めて居ります。尚ほまた病中は、いろ〳〵と御心配に預りまして、有難う存じました」といふ風に、慇懃に述べるのである。

葬儀が終つて、會葬者が退散するときは、喪主は會場の入口の所に立ち、無言のまゝにて會葬者に挨拶し、式場係の上席の者も、そこに出でて、ごく簡單に、會葬の謝辭を述べ、それが濟んで埋葬となるのである。

式後喪主の名をもつて、會葬者に對し、一々挨拶に廻るのが本式であるが、時に簡略し、文書をもつてこれに代へても差支はない。この場合の書狀は黑枠付の端書類を用ひるのが慣例となつて居る。

第六節　服裝の仕方

服裝に對する用意や心づかひは、日本でも外國でもその精神は一つで優美、品格、禮儀に適ふ人と言はれんためであつて、その人柄も嗜好も、包み隱しなく服裝と態度に現はれるものである。次に一般禮裝や訪問服等についての心得を略述する。

燕尾服　燕尾服はフール・ドレスとも、イブニング・ドレスとも言ひ男子の最上禮服で、本來は日没後に着用するものであるが、日本では晝夜とも兼用してゐる。着用については次の注意を要する。

一　シャツは純白に限り、胸に襞または上げの如きものゝあるのを用ひる。

二　カラーはシングルで立型のものに限る。

三　ネクタイは白色で横結びが定法である。

四　手袋は白や鼠色の柔かい革製のものを用ひる。

五　靴はエナメル製、靴下は四季を通じて黑を用ひる。

六　帽子はオペラ・バットといつて、シルクハットに似た平たく疊めるものが正式である。

七　上衣もズボンも共に黑であるべきである。ウエストも黑が正式であるが、近頃では白色のものが流行する。

八　外套は四季を通じ必要で、禮服用としてはインバネスを用ひる。

九　ハンカチーフは麻製のもので色合は白を用ひる。

ステッキも附屬品の一つとして用ひられるが、燕尾服の場合は裝身具その他の裝飾は、成るべく素質なものを用ひなくてはならぬ。

タキシード　タキシードは燕尾服の略式として着用するもので、これも晝夜兼用になつて居る。シャツは純白、カラーはシングルでもダブルでも差支なく、ネクタイも黑の蝶形でも白でもよく、靴下は黑、靴はエナメル、帽子は中折でも山高でもよく、夏は麥稈帽でも差支はない。上衣もズボンも黑を用ひるが、上衣の型はスーツに似て、襟の返りに斜子織りの地厚の絹をつける。ウエストは黑でも白でもよい。

フロックコート　フロックコートは羽織袴のやうに、晝の禮裝として用ひられるが、着用に際しては次の諸項に注意を要す

る。

一　上衣は純黑が普通である。變り色を用ひるのは略式であるから、これを着て表立つた場所へ出ることは避けなくてはならぬ。

二　パンツは縞がよく調和し、シャツは白を用ひる。

三　カラーはシングルでもダブルでも差支なく、帽子は禮裝としてはシルクハットでなければならぬが　山高でもよく夏はパナマ帽でも差支はない。

四　手袋は鼠色のキットがよく、ネクタイは白とか黑とか派手でないものがよい。

五　ウエストは上衣が黑の場合は黑が普通であるが、多くは變りウエストが用ひられる。

フロックコートは婦人禮服の裲襠のやうに、儀式張つた時にも、また羽織袴位ゐの時にも使用されるが、この頃ではその着用は少なくなつて來た觀がある。

モーニングスート　モーニングは半禮服である。燕尾服は勿論フロックでもタキシードも餘り固くるしすぎるといふ場合、このモーニングを用ひるのが常で、紳士の通常服となつてゐる。注意としては

一　シャツは白が正式であるが、縞でも差支はない。

二　靴は黑で、カラーはシングルでもダブルでも隨意である。

三　帽子は中折、山高何れでもよく、夏は麥稈でも差支はないのである。

四　ズボンは上衣が黑ならば縞でもよく、ウエストは變り物でも上衣と同じ色合でもよい。

サックスート　サックスートは事務を執る時にも、散歩する場合にも着用するもので、四季の時候に似合つた地質を選べばよいが、大體において次の心得を要する。

一　シャツは白堅でも縞物でも隨意で、白堅は秋冬に、夏は薄手のものがよい。縞物は春から初夏にかけて用ひられる。

二　ネクタイは蝶形でもダビーでもよいが、成るべく着用する人の年齢、體格等に似合つたものを選ぶ。

三　カラーはシングルでもダブルでもよい。

四　靴は黑か赤で、夏は白もよい。

五　帽子はその人の好みに從ふ。

婦人禮裝　洋式における婦人の禮裝は多くアフターヌーン・ドレッスを用ひる。色の配合と選擇は體格に合ふものを着用し、地質や色は何を選んでも差支なく縞物、毛織物、麻、ヴ

オイル等自由であり、模樣のあるものを用ひてもよい。靴は好みに從ひ、靴下はドレッスの色に似合ふものとし、帽子は着物と同色または配合のよいものを選べばよい。

婦人散歩服　婦人の散歩服としてはストリート・ドレッスが普通である。地質は絹、毛織物、麻など何れでもよく、帽子はドレッスと調和するもの、靴や靴下は服裝に配合し、輕快味のあるものを選ぶ。

序でに婦人の日本式服裝についての心得を次に述べる。

通常服　裲襠は冬ならば綿子、紗綾、綾、羽二重、平絹、夏ならば紗、絽、すゞしを用ひ、袴は地質色目ともに隨意、服は冬季は羽二重、夏季は晒を用ひる。

通常禮服　裲襠は冬は縮緬または綿子その他何れにてもよく、夏は紗。袴は地質色目とも隨意。服は冬は白羽二重、夏は晒である。

大禮服　裲襠は冬は地唐織物、夏は二重織物、袴は色目は緋、地は好みのもの。服は冬は白の練絹、夏は晒、單衣は色目隨意、地は唐織物。

以上は勅任官、麝香間祗候の人々の夫人の所用である。

普通和服禮裝　服は白襟紋付、地質は四季とも隨意。訪問には無紋のものが禮式であるが、若し紋のあるものならば縮紋の裾模樣とする。帶は絽物の丸帶で、訪問には染丸帶でも豐夜帶でもよい。足袋は白、履物は草履とすべく、時としては黑塗駒下駄、表付フェルトでもよいが、キルクは禮裝ではない。羽織は着用しないのが禮で、若し着用した場合は乘物の中に脱いで置いて人に接すべきである。

第七節　服裝と裝身具の仕方

午前中家に在るとき又は旅行する時、日中に訪問の衣服を着するのは世間の習慣に背くものである。衣服は次の如く、普通には四種あればよい。

一　家内で着用する普斷着（デザビレー）。

二　買物に出たり、旅行する時等に着用するもの（トアレット・ジユマテン）。

三　訪問、接待、散歩用の日中服（トアレット・ドジウル）

四　音樂會、觀劇用の宴會服（トアレット・ドジネー）。

寶石類の選び方は年齢によつて異るが、次の諸項に注意して選擇すれば間違ひはない。

一　若い婦人は結婚の時でも金剛石は用ひない。二十歲までは

白色の眞珠、瑠璃、青藍の寶石等で、飾具に黄金を用ひることは少ない。

二　華美で小形のものがよく、黄金の腕時計も避くべきである。

三　裝飾物は硬質の貴重なものよりも細工のよいものを選ぶ。

四　二十歳以上の婦人は柘榴石、孔雀石、紫水晶、エモー等の高價なものを用ひる。

五　貴重な寶石は既婚婦人に限つて用ひる。

六　若い婦人は指輪は用ひないのがよいが、用ひるなら質素なものを一つ右の手に指して差支ない。

第八節　接客及び對談の仕方

遠來の客や久々で訪ね來た人に對しては、食事を供するのが禮である。接遇は言ふまでもなく物靜かに、且つ懇切になすべく、來客が席に着かぬうち、その室を立ち去るのは失禮である。

數人の來客が一時に同席する場合は、甲乙の差別なく取扱ひ、言行は巧言令色は卑しい態度であるから避けなくてはならぬが、無愛想で客を手持無沙汰の感を與へるのも宜しくない。快感を與へるのが何より大切である。對談については次の注意を必要とする。

一　音聲は低くとも明朗にわかりやすく語ること。

二　對談の間は先方の談話の終るまで靜聽にすること。

三　對談は議論にわたらぬこと。

四　性急で短氣な話し方はせぬこと。

五　他人の談話の中に割込んでこれを妨げないこと。

六　他人の行狀については不敬の說話を避けること。

七　特殊の場合の外は外國語や學術上の專門語などは使用せぬこと。

八　他人の談話の誤りを咎め立てせぬこと。

九　私事を衆人の前で語らぬこと。

一〇　利潤や價値の說話は儀式の席ではなさないこと。

尙ほ洋式で家庭的に客を招待する場合は、次の諸項に注意することが大切である。

一　洋式では夫妻を共に招待するのが常例であり、又客數は偶數であることが正式である。

二　饗宴當日は食堂の外に別に一室を用意し、來客の携帶品を置く場所とする。

三　化粧室を設けて美しく裝飾し、鏡を備へ、卓または棚を備へて上に香水、白粉箱、ピン入れの箱などを置き、飾らにタ

オルを入れた鉢またはタオル掛けを置くこと。

四　食卓の整理は人數相應の大きさの食卓を食堂の中央に置き、ラシヤの卓被をかけ、その上を白リンネルの布で被ひ、中央には美しい盛花を置く。

若し食卓が大きければ花は幾つも並べ、花と花との間程よき位置を見計つて菓子皿、果物皿を配列する。客の着くべき席の前には肉刀、食匙、肉叉、酒盃、大コップを型の如く配列し、パン皿の上には手巾を疊んで載せ、その上にパンを置く。

五　食卓は成るべく大きくして客が窮屈を感ぜぬやうにする。又椅子の配置が餘りに離れてゐては談話に不便であるから、客と客との間は六十乃至七十センチメートルくらゐとする。

第九節　食事の仕方

梨　梨は皮を剝いて四角に切殘し、そのまはりを食べる。

蜜柑　蜜柑は小刀目を三つ入れて皮を取り、肉の二つを小刀を入れ打ちかへして內の肉を食べる。

柿　柿は二つに割つて皮を剝き、種を取り去つて食べる。

瓜　瓜は添へられた楊子で突き、種を取り去つて食べる。

串物　串に刺したものは先づ串を抜き、手で摘んで食べる。物などの串に刺したものは、串を持ち箸で食べる。

餅　焼いた餅は手で取り、その他は箸で取る。尤も楊子または箸を添へたものはそれで取り、紙に受けて食べる。

饅頭　饅頭は左の手で取り、右の拇指と食指で摘んで食べる。

强飯　へぎに載せて出すものであるから摘んで食べる。箸が添へてあつても用ひないのが作法である。

粽　粽は箸を持ち添へ笹の元を上にして左手に持ち、右の手で卷き目を解いて食べる。

雜煮　婦人は椀を取り上げずそのまゝで食べる。汁を吸ふには箸を下に置き、椀を取上げて吸ふ。

吸物　初献のときに先づ汁を吸ひ、後に實を食ひ、二献には實を食べて後ち汁を吸ひ、三献は初献と同樣にする。

第十節　贈答品の仕方

婚禮その他吉凶事の贈答は勿論、年始、歲末、病氣、火事等の見舞ひの心持ちを以て、物品を贈答するのは我國古來の習慣でもあり、また人情の發露でもある。贈答について心得べきは身分相當といふことが第一である。過分の贈物は時として心事

を疑はれる虞れがあり、また負惜みなりと笑はれる場合さへある。

禮儀の贈物はそれ相當の形式を備へたものがよい。これは價の高下についてゞなく、品物の種類と贈り方についての注意である。また引越し蕎麥などのやうな習慣によるものゝ外は、價實のこもつた物が望ましく、價の如何は問題外である。病氣見舞に自家の鷄卵を贈るなどは、一流の菓子店の大きな折詰よりも嬉しいものである。

遠來の珍物を福分けとして知己の間に分つのは極めてよいことであるが、夕刻に牡丹餅の類を、貰ひ物だとか、澤山貰つたとかの口上を添へて分つのは宜しくない。

記念といふこともよいが、贈品は後々に殘らぬものを選ぶがよい。然かし書籍に封じた花の一輪とか繪葉書に認めた詩歌などは嬉しく思ふものである。

結婚の贈物は珍奇なものよりも月並みの方が無難であり、年始歲暮の賜物は價の如何を問はず、慣例に從ふべきである。或る年には立派なもの、或る年には安價なものを贈るなどは宜しくない。轉居や新築祝ひには家具類がよい。

風水害の見舞には飲食物、勝手道具等がよく、旅行する人に對しては毛布、ハンカチーフ、シャツ等がよく、洋裝して旅立つ人にはネクタイ、カラー、靴下などもよいが、相手に依つては荷物になつて迷惑な場合もあるから、是等のことを考慮に入れなくてはならない。

第一編　美容と禮儀作法

第一章　美容法

第一節　美の觀念の變遷

美しいといふことは、それだけで一つの大きな價値と役割を有つから、少しでも美しくありたいといふ欲求は、女性のみが獨占するものでない。たゞ現在までの社會情勢が、特に女性の美容を求め、美しさを望んだゝめ、女性と美容とは離されないものとなり、技巧的にも進歩して來たのであるが、美の基準となると、隨分漠然たるもので、その時代により美人の標準が異なつてゐる。

日本には天平時代には、丸顏で頬の豐かな肉體的美人が愛せられ、江戸時代に入つては楕圓式の面長な、柳腰の婦人が美人として歡迎され、日本式美人のサンプルとなつた。然るに近代では著しく生理的要素が加はり、均齊の取れた彈力ある體格と聰明美が第一に要求され、美人の概念を根底から覆へして、人工的な不健康な美が排せられ、自然的な健康美が要求されて來た。卽ち美の正統に立ちかへつたわけである。

第二節　肉體の美化

近代美容學の第一頁は、均齊のとれた彈力ある體軀をどうして得るかにある。大體誰れにでも、多くの長所と短所を有つてゐるもので、完全に美しい身體の持主といふものは、極めて少數である。故に一般的にいへば、自身の肉體の長所はますゝそれを保持し、短所を補ふやうにしなければならぬ。

姿勢を常に正しく自然にしてゐることは、美的價値のあるものである。頭を高くし、胸を張り、背を眞直ぐにし、脚は膝の所で引きしめるようにすると、美しい姿勢になり、歩行などの場合にも、それらを最も自然的に動かすとき、美しい姿態が生れて來るのである。

次ぎに體軀の美化に價値ある運動を擧げると、直立の姿勢で軀幹を屈したり、伸したりすることである。これは意識的に行はなくても、荷物を脱いだり着たりする際、部屋の掃除、寢床の上げ下しにも、自然に行はれる運動であつて、體軀の美化に著しく効果のあるものである。尤もこの種の美化運動には、出來る限り伸ばすといふことが大切であり、立つてゐるときは腰

をしつかり浮かし、胸を張り、腰部を引いてゐなければならないし、坐るときは上體を伸ばしてゐなければならぬ。

體軀の美化に最も効果あるスポーツは第一に水泳、第二に乘馬などである。これは全身の筋肉を、殆んど同樣に使用するためによいのである。この反對の結果を及ぼすものは、日本人の生活に最も多い、緊張して長座することである。子供が長時間小學校に坐つてゐることや、ピアノ練習や手仕事などに熱中する長座なども、體軀の美化といふ點からいへば、よい結果を及ぼさないから、夫等の前後になるべく全身を動かすやうな運動を努めて取ることが必要である。なほのびのびと身體を横たへ休息することは、身長の發育を促し、殊に發育期の少女達に必要な休息法である。

第三節　食物と美容

食物が美容に關係あることは、美容が健康を基礎とする以上に當然である。女性美の要素となる皮膚脂肪の美しさなども、榮養が適度に攝取されてゐるときに得られるもので、榮養過多は下腹部がだぶ〳〵したり、必要以上に肥る原因となり、榮養不良はその反對の結果を美容上におよぼすのである。容姿を整くしない程度で、美味しく、榮養的な食物を攝ることが必要であつて、それには食物を攝る質量と、運動とが釣合はねはならない。

個食をせず、控へ目に攝り、運動に應じて少くし、就寢前は胃の負擔を輕くして置くことは一般的の注意であり、肥滿した人は運動をし、睡眠を短かく、衣服を薄くするとゝもに果實、野菜、サラダなどを主とし、また白身の魚またはハム、卵くらゐに留めることが必要である。又脂肪をつけるためには運動を少くし、睡眠を充分ならしめ牛乳、鳥肉、糖分などを多く攝り、野菜も芋類の澱粉性のものを攝ると効果がある。

第四節　皮膚の美化

美しい皮膚は生々とした色艶と、滑らかな感觸にあることは勿論だが、夫等を得るためには紅、白粉を使用する技巧的なものよりは、醫學的な皮膚の美化がより以上に必要である。

先づ第一に便泌を避けねばならない。便泌は婦人に多いものであるが、これは皮膚を汚なく、生氣を缺くものにするから、朝食前に冷水、平野水、ソーダ水、牛乳などを飲用するとゝもに、果物、野菜類を比較的多く攝るやうに心かけ、便意がなくても便所に行く習慣をつけると、大抵はなほるものである。止むを得ない場合は下劑を使用するが、常續的に使用しないことが必要である。

次に著しく影響を與へるものは、婦人的疾患であつて、皮膚の色が冴えずどんよりとし、眼の周圍が黑ずんだりするのは多くこれに原因してゐる。姙娠、分娩、產褥などによつて、皮膚の美しさを失ふのは事實であるが、その時期を經過すると、自然に美しさを取り戻すものである。母乳榮養をなすことは、美容上否とする傾向があるが、實際はかへつて母體の新陳代謝を高め、復舊作用を營むものであるから必要である。

以上の外に、榮養の惡いときは皮膚は弛んで黃色を帶び、皮下脂肪が消失したときは、皺が出來るとゝもに赤くなり、血液循環や呼吸作用に異常があると青くなり、貧血したり、腎臟や心臟に故障のあるときは、著しく蒼白くなる。是等を完全に除却して初めて美しい皮膚を持ち得るのである。

第五節　入浴

最近衛生上の見地から錢湯浴槽の湯を換新して復醒藥などを調べて錢湯の危險を說く學者もあるが、錢湯のためには今までどれほど清潔と健康を得てゐるかわからないのである。住宅にそれほどの餘裕なく、燃料に意外の費用を要する都會住居の中流階級以下にあつては、誰も彼も浴室を設備して置くことは不可能であるから、錢湯がないとすれば垢の中から眼や鼻を覗かせなければならぬ。錢湯は都會住民になくてならぬ設備である。混浴であるから黴菌も居るであらうが、物事には利害が伴ふ。現在國民生活を標準とするならば、その利害比較は玆に記すまでもなからう。衛生の施設を完備させるのは甚だ結構であるが、錢湯の危險のみを說いて、浴室の設備のない都會住民を苛かすのは少々罪である。

入浴は垢を去つて皮膚を清潔にし、血行をよくし、新陳代謝を促す保健上の良法である。皮膚の清潔は美容と密接の關係があり、皮膚が不潔ではいくら化粧しても、却つて垢と化粧物とが混和密着して皮膚の分泌作用を阻止する。この衛生法からいつても、また美容法からいつても、最も必要な入浴についての心得を左に摘記する。

浴湯溫度　浴室の溫度は攝氏二十五度から三十度内外を可とする。湯の溫度は攝氏三十八九度以上四十三度までゞあるが、概して入浴好きの日本人は習慣によつて、西洋人よりは高溫

度の湯に浴するのが例である。

入湯時間　十分乃至十五分が適度で、熱い湯に餘り長く入つてゐるのは有害である。

浴湯の選擇　生理衛生などは疾病治療法としてならば溫泉を推賞すべきであるが、單に美容法を主とする場合は鹽湯、鏡泉硫黄分を含有する溫泉には入浴しない方がよい。

洗　料　垢を去るには純良な洗粉か、玉子糠が皮膚のため安全で、石鹼はあまり用ひない方がよい。石鹼を用ふるならば、純良な品を選ぶのが必要で、遊離アルカリや他の不純物を交ぜたものは、皮膚を荒らすことが甚しい。

手　拭　手拭は軟かいものを用ひ、且つ決して顏を擦つてはならない。又在來の垢擦なる臭紬の布帛は、却つて皮膚の表面を粗糙ならしめる。

浴　後　浴後は乾いた手拭、タオルにて皮膚の溫りを穩かに拭き、稀薄な硼酸水、グリスリン、オデルミンなどを顏面に塗布すべきである。

第六節　洗　面

洗面には、決して熱い湯を用ひてはならぬ。夏に冷水、冬に熱湯などで顏を洗ふのは、顏面皮膚を刺戟してよくない。何時でも微溫湯を用ふべきである。最も有効な洗面法としては、上等の無砂糖一合ほどを婆に入れ、微溫湯に侵しよくしぼつた白湯を用ひること、またザラメ、氷砂糖を熱湯に溶解し、これを溫めて微溫湯にしたものを用ひること、硼砂の微溫湯を使用することなどである。

右を洗面器に入れ、毎朝または化粧の先に洗面し、顏は後方から前方に向ひ、掌にて摩擦するのが顏面の垢を消滅させるに効がある。

第七節　素顏美

磨き上げた素顏の美は、化粧した美しさよりは遙等眞床しく上品である。これには先づ身體を健康にしなければならぬが、その他の方法としては常に入浴を怠らず、また洗面は前記の方法により水は軟水を用ひ、入浴後もまた前記の方法で皮膚を養ひ、殊に平素から荒れ性の婦人は、毎夜就寢前にリスリン若しくは淡白なクリームを顏面手足に擦り込み、毎朝これを洗ふやうにすれば脂肪や垢がよく取れて皮膚を美化する。

冬期寒風に吹きさらされると、皮膚は非常に荒れるから注意せねばならぬ。白粉を平素多く用ふる婦人は、皮膚の榮養に注意しないと烏膚になり易いところへ、無暗に石鹼をつけてゴシ〳〵磨いたり、白粉を多量に塗けたりしては、荒れを增すのみで効るものではない。

第八節　整形美容

これは尖端的であり、又最も根本的な美容法であるが、實際的にはまだ〳〵多くの問題が殘されて居る。二重瞼が妹惑的であると言つても、下手にすれば却つて醜味な顏になつたり、隆鼻術にしても外科手術は巧くいつても、他の顏の道具とそぐはない、冷たい感じの鼻になつたりし易いから注意を要する。たゞ齒列矯正だけは、美容的に效果はあるとされて居る。

第二章　化粧の仕方

第一節　白粉の塗り方

白粉は咽喉笛の下邊から、乳房の方へ全體に塗るのであるが襟の邊りから下部の方へかけて漸次薄くする方がよい。さうすると顏面を薄く塗つてゐても、生々とした化粧振りを見せることが出來る。若い人が頸を濃く塗つたときに、どうかすると頸の下處から剝げて黑い筋がつくから、塗るときによく注意することが必要で、薄化粧の場合は手拭か、軟かい紙で顏面を擦でゝ置くことにも注意せねばならぬ。

入浴後の化粧は先づライラック水などを頸から顏面へかけて塗り、それを乾いた綿紗で拭き取り、顏へクリームの少量を塗つて綿紗で能く拭き、その後へ白粉を顏面から塗り始めるのである。白粉を塗るには先づ水刷毛で鼻筋よりつけ始め、次に兩頰から頸へかけて薄く塗り、叩き刷毛を綿紗に卷いて白粉を拭き、濃い部分は水で抹す。それより掌に粉白粉を充分につけその手で顏の全體を平均に叩き氣味に抑へ、後へライラック水を水刷毛の代りにつける。若しこれが薄いときには幾度も繰返せばよい。

掌に白粉を塗るのは、粉白粉を顏面に塗るためでなく、手の脂肪を防ぐための必要からである。襟の方はライラック水を手につけて、それで充分に頸筋に繰返してつけて、その後を水刷毛で叩き、最後に上等の粉白粉を脱脂綿に撒き、抑へながら顏の全體へつければよい。

第二節　口紅と白粉

口紅はチックを指頭で唇へ揉みこみ、軟かい紙で輕く拭き取る。口紅は自分の唇の色に似寄つた紅を用ひた方がよい。白粉も色の黑い人は幾分黄色を帶びたものを用ひ、血色の悪い人は肉色の白粉、顏色の赤過ぎる人は綠色の白粉を用ひるなど、すべて皮膚の色と釣り合つたものを選ぶことが大切である。昔から片化粧と稱し白粉だけ塗るのは、不祝儀のときばかりに限つた位ゐであるから、一寸紅をさして後を拭き取つて置く位ゐはしないと、折角の化粧も引き立たないものである。

鼻の低い婦人は青味を帶びた白粉を、眼の際から鼻の峰の兩側へザット引く。斯うすると目鼻が高く見えて化粧も引立つてくる。

第三節　雀斑を隱す化粧

雀斑のある婦人は、油氣の少くないクリーム耳掻一杯くらゐを顏の全體へ塗りこみ、雀斑のある部分へは頰紅を塗り、その上から粉白粉をつける。それでも雀斑の見えるやうなら更らにその上へ頰紅を塗るとよい。

第四節　荒れた顏の化粧

晴天が續いて空氣が乾燥すると、殊に冬季などは顏が荒れて化粧も鮮やかに出來ぬものだが、これを防ぐには毎夜寢る前に加里性實達を多量に含ませ石鹸を掌につけ、頸筋から顏面へかけて撫で廻し、その後を微溫湯で石鹸氣を脫き、水氣の無くなるまで拭き取つてからレモンクリームとか、コールドクリームの類を掌に受けて、顏面から頸筋へかけて薄く塗つて置けばよい。

顏面へ塗るときは指頭へ力をこめて、逆に塗り込むやうにして、頰から額へかけて、徐々に塗る。かうして五六度も塗つてゐる間に、自然と皺かくなつて頰へ血の氣がさして來るから、さうしたらそのまゝで寢て翌朝顏面を洗ふとき、前夜のクリームを洗ひ落して朝化粧をするのである。

第五節　春の化粧

春先きは顏面に地荒れしたり、分泌物が生じたり、化粧顆れがするものである。これを豫防して皮膚を美しくするには、麻布の糠袋を使つて顏面をよく洗ふことが必要である。分泌物が

多いと化粉する下から脂肪が浮き出でゝ、鼻の頭など俗に銀ばるといつて剝げやすくなる。それで寒先きは寒い時分のやうに白粉下とか、クリームとかいふものを使ふ必要はない。顏面から出る自然の分泌物を白粉下に用ひる方が、白粉が剝げないで立派な化粧が出來るのである。

化粧をするには、顏面をよく洗つてから、水白粉を丁寧に塗り込む。厚化粧をするなら、薄化粧を幾度も繰返す方がよいので、一體に厚く塗つても完全には出來上るものでない。

第六節　夏の化粧

夏期の化粧には、先づ皮膚の垢を洗ひ落すことが肝腎だから入浴するか蒸し西洋手拭で垢を拭き取るかして、充分に皮膚を柔かく淨めてから、素化粧に取りかゝる。素化粧をするにはグリスリン製の白粉下とか、クリームをよく皮膚へぬりこみ、軟かい紙で一旦それを拭き取つてから本化粧をする。尤も脂肪性の婦人ならばグリスリン製、荒れ性の婦人なら脂肪製のクリームを選むべきである。白粉を付けるときは、白粉下のまだ充分に拭き切らぬを程度として取りかゝるのがよい。

水白粉を使つて薄化粧をするには、白粉下の乾き切るのを待つて、指頭で水白粉を丁寧に塗り、濡れた手拭でソット叩いてから極く少量の粉白粉を、刷毛でまだらにならぬやう輕く拭いて置く。練白粉を使ふ場合は白粉下の乾ききらぬ間がよろしい。斑が出來たら濡れた手拭とか、刷毛で取り過ぎないやうにして取る。粉白粉で薄く前のやうに叩いて拭き、頸と顏面では頸を濃く顏面の方は成るべく生地に近い薄目に刷くのである。

第七節　海水浴の化粧

海水浴へ出かける場合には、先づ顏の全體へクリームを刷けてザット拭き取り、その後へ濃く白粉を刷ける。海水浴から歸つて來たら鹽分のない清水で、植物性の洗粉なり米糠でよく顏を洗ひ、その後を清水で洗つて水氣を拭き取つてから、化粧水を塗つて白粉を刷けて置く。寢る前にも洗粉とか米糠で顏を洗ひ、化粧水を塗つて置くやうにすればよい。

海水浴や溫泉場へ行き、皮膚の荒れたのや色の黑くなつたのは急に恢復るものではないから、氣永くソロ〳〵恢復させねばならぬ。その應急手當として、汗が出たなら微溫湯で搾つた手拭で汗を拭き、顏を洗ふには微溫湯で植物性の洗粉を塗つて洗ひその後へ糸瓜の水、胡瓜の水などを掌に滴して指頭で頰か

ら額際へかけて逆に塗り込み、それへコールドクリームとか、マッサージクリームを指頭で薄く顔面へ擦りこみ、その上を西洋手拭で輕く拭いて置く。さうして白粉を刷けたら、その上を粉白粉とか、水白粉を薄く刷いて置くのであるが、出來るなら皮膚の荒れの恢復するまで、白粉を刷けぬ方が安全である。

第八節　秋の化粧

秋の日に焦けると、舊の通りな白さにならないから、成るべく日光を直接に受けないやう、外出の時などには洋傘を用ひることを忘れてはならぬ。顔面を洗ふには米糠を用ひて靜かに輕く洗ふのである。湯上りのときなどに、冷りとする秋風に當らぬやう注意も肝要である。化粧するには先づ顔面へマッサージクリームを塗つてよく刷り込み、その後を胡瓜の水を掌へ滴し、指頭で平らに刷り込み、別に洗面器へ微温湯を移し、一旦スッカリ洗ひ落して、日焦除けの化粧水をウッスリと塗り、その後を堅く搾つた手拭で拭きとり、白粉を少し濃く塗けて濡れた手拭で疎のないやうにし、白粉が浮き上つたときは少し白粉を叩きつけて置き、頬紅を少し華やかに塗けて置けばよい。

第九節　頬紅

頬紅を自然らしく見せるには、白粉を塗る前に頬紅をつけた方がよいわけであるが、頬紅は肌にヂカにつけると紅やけが出來易いから、下地は化粧水だけでなく、クリームもつけて、頬紅が毛穴の中まで浸透しない、やうにする。それから水紅や棕紅は、粉製よりも紅やけの甚しいものが多いから成るべく使はぬこと。若し夜のお化粉などで粉紅では不十分な場合であつたら、良質の口紅をコールドクリームで伸ばしてつけると綺麗につき、頬と唇の色が同じでよい。

尚ほ頬紅はパフでなく、刷毛の方がムラなくつくが、この刷毛もときく揮發油で洗つて、清潔にしておくことが必要である。

第十節　濃化粧

濃い化粧は白粉を三度に塗り、クリームを塗つた上へは、掌で白粉を刷けてはならぬ。それは掌の温みでクリームが溶けて、白粉が寄るからである。こんな場合には、板刷毛で白粉をつけ、その後を牡丹刷毛で刷き、タルカムパウダアをたつぷり

掌でもんで顔面と頸とを叩き、白粉を毛孔に入れる。さうして浮いた白粉は、叩刷毛で打ちながら濡れた手拭で拭き取るのである。

第十一節　眉　墨

眉墨は近代化粧をリードするものゝ一でであるが、薄く自然の眉を修整する程度につけないと、顔の表情が全然異つて固定した眉を生じやすい。眉の引き方も勿論その顔にふさはしく、丸い顔の柔和な感じの顔に、ディートリッヒのやうな、吊上つた細い眉は滑稽であるし、豐かな肉付の顔には流行おくれでも、矢張りやゝ太目の眉が望ましい。

第十二節　アイシャード

アイシャードは眼を大きく、陰影の豐かな顔にするものであるが、下手に塗るときは娼婦の如く下品に見えるものである。色は日本人としては茶、青が最も無難で、紫などには手を出さないに限る。痩せた眼の窪んだ人が使用するときは、ますゝその感を深めるから注意を要する。

第十三節　頸首の黒くならぬ手入

冬期になると頸首や手足が黒くなる人がある。これは幾ら洗つても毛立ばかりで一向綺麗にはならない。かゝる人は夜寢る前に、白粉を頸首や手首へ淡く塗つて、毎朝洗粉又は米糠で洗ひ落すやうにし、一週間も續けてゐる間に、舊の通り白くなるものである。

第十四節　顔の荒れの豫防

外出の際に素肌に風の當るよりも、白粉の上からであれば幾分風あたりが弱くなるから、皮膚を保護する上からよいことである。白粉でなくとも、化粧水でもつけて外出するやうにし、冷たい風にあたつて來たときには、直ぐ暖かな室内に入ることは、皮膚のためによくないから、玄關とか家の入口で兩手で三四度輕く擦で廻してから、暖かい室内に入るやうにすれば、荒れを防ぐことが出來る。

第十五節　小皺の防ぎ方

日本酒を少量づゝ顔面に塗つて置くと、皮膚が生々して來る

から小皺が寄らなくなる。殊に神經質の顏面のトゲ〳〵してゐる婦人は、毎夜少しづゝ酒精分を用ひて寢る方かよい。肉食するよりも菜食する方が小皺が出來ないものであるが、殊に海藻を食べると顏の光澤がよくなり、筋肉も美しくなつて毛髮の榮養にもなるとされて居る。

第十六節　クリームとベルツ水

大抵の人は顏を洗つた後でクリームやベルツ水を使ふ。クリームは皮膚を保護するためによいが、あまり保護し過ぎると皮膚を弱くする憂ひがある。それで一度クリームを使ひはじめたら、いつも丹精してつけなければならぬ。湯上りなどちよつと手後れをしたり、忘れたりして一度でもつけずに置くと、皮膚が弱くなつてゐるため直ぐ顏が荒れる。ベルツ水もよいが、長く使つてゐると却つて皮膚が硬くなる嫌ひがある。

第十七節　面皰と雀斑

面皰を治すには加里酸一〇〇に安息香丁幾六〇を混ぜて皮膚にすり込む。またアルコールにリスリンラウヘンヂル精各五〇と、サルチル酸二を混ぜ塗布してもよい。黑子を取るには硝酸を筆の先につけ、一日一回づゝ黑子の頭へ塗ると一週間位で取れてしまふ。

雀斑は白茯苓の粉末を蜂蜜で解き、寢る前に擦りつけて翌朝洗ひ落し、これを根氣よく行へばとれる。

齒を白くするには硼砂十六匁を一升の水に入れて火にかけ、溶解したら下し、冷えぬ內に樟腦及び浸藥一匙づゝを加へて瓶に入れおき、毎朝盃一ぱい位を一合六勺ほどの微溫湯に混じて齒を洗ふと、光澤を出すばかりでなく齒質をもよくする。

第十八節　マッサージの仕方

マッサーヂに使ふクリームの量は、顏だけには茶匙に三分の一、頸には三分の二位である。若し脂肪性の人ならば、多少少量に顏へ塗り擦げて、指が自由に滑る程度でよい。マッサージは少くとも五分間はしなければ効果がない。その方法は

一　鼻の筋を縱に
二　口の周圍に添つて半圓形を交互させ
三　唇の兩端を中から外へ廻す
四　兩頰を外へ
五　頸から耳の下へ向けて
六　眼の周りを目頭からグルリと一廻轉させる（こゝは特に輕く）
七　額は兩外へ
八　小鼻は鼻先へ向けて螺旋狀に

以上を中指と薬指で約五六回繰返すのである。その後を石鹼で洗つては何の効果もない。脫脂綿かガーゼで、クリームを拭きとつてから、開いた毛穴を引きしめるために、アストリゼントローションで拭いて置けばべたつかつい。

第十九節　毛皮を纏つた時の化粧

毛皮のショールやオーバーも、酷寒時にはお洒落の域を越えて防寒實用として一般化して來た。然かし大體日本人が毛皮を着こなすことは、却々むづかしいことであるから、化粧や髮型も特殊な注意をしないと、折角の毛皮も蕪無しになり勝ちである。

先づ毛皮は何れかといへば、日本人のやうな黑髮には不調和であるし、また線の細い平面的な顏は、毛皮に壓され易いものである。アクセントの强い、そしてスッキリした化粧をすることが秘訣である。徒らに白粉、紅、口紅、眉墨などを惜しみなく使つた顏は、むしろ動物園さへ驚愕させて滑稽な感じがするから、白粉は拔きにするか、つけてもチョコレート色位ぬにし、眼や唇はどちらか一個所を强調すると、くつと立體感が出て効果的である。

次に髮はすつきりと上げること、耳の後や襟際のモシヤ〳〵した髮型は一番野暮であるから、襟元はぐつと上げ、ウエーブよりも大まかなカールやロールで纏めて、油をつけてしつとりと艶を與へるのである。

最後に毛皮を纏つたときに、如何にも寒さうに背を丸くしてゐるのは、毛皮の手前殊更みつともないから、必らずシヤンと眞直にして、颯爽と歩かねば釣合はない。

第二十節　不幸時の服裝と化粧

不幸時にはいふまでもなく、服裝は成るべく質素にしなければならぬ。式法としては草履ねに髮を上げて、白の着物に白の帶であるが、一段略して黑の着物に黑の帶を用ひても差支はない。

化粧は片化粧といつて、決して紅を用ひてはならない。唇にも紅でなく白粉をつける。その白粉も薄くつけるのである。髮には白元結は用ふべきでない。今では若い婦人が銀杏返し

の上に、黒の元結をかけてゐる者を見受けることがあるが、昔は夫に死別してからでないと、黒元結は用ひないことになつてゐた。帯の結び方も白の着物のときはかけ下のときのやうに結び、黒の着物のときは角の出しに、下の方に小さく地味に結ぶのが、哀悼の意にかなつてゐるのである。

第廿一節　化粧品の今昔

昔から鶯の糞は肌理を細かにして色を白くするといふのでは化粧料の一つとして使はれたが、鶯の糞の中の蛋白質が艶肌、潔白の作用をするのである。またサトイモの葉の上に溜つた露で顔を洗ふと、皮膚が滑らかになるといつて、田舎の婆などはよく朝戸外に出て、露で顔を洗つてゐるが、硬水の井戸水よりも、天然の蒸溜水の方がよいのは當然である。朝露ならば必らずしもサトイモの葉の上のものとは限つてゐない。

十五世紀の頃英吉利の婦人が用ひたといふ、マスター・アレキス美顔術といふのは、若い小鳥を巣立ちしない前に捕へ、四十日の間茹卵で飼育したのち絞殺し、タルク・アルモンド油などで包んで、滲み出した汁を使ふのだが、恐ろしく手數のかゝつた化粧水である。

先年英國のある好事家が、今から五千年前の昔、即ち埃及のツタンカーメン王が、ルキリアの墓場に埋葬された頃の、埃及の一貴婦人の化粧クリームを掘り出したことがあつた。堅く密閉された陶器の容れものゝ中に入つてゐたといふが、分析して見たところ原料は殆ど獣脂が九割、あと一割は樹脂であつた。

「なんだ、そんなものが貴婦人の常用クリームなのか？」と軽蔑してはいけない。現在盛んに婦人が使つてゐるクリーム類も底を割れば、脂肪または脂肪酸を置換で鹸化したものとか、いろ〳〵の脂肪や樹脂をまぜて、香料を加へたものとかであるから、エニシダの匂ひがしたといふ大昔のクリームでも、馬鹿には出來ないものである。

洗顔の役目をするクレンヂング・クリームといふのが出來たのは今から二十七八年前で、當時亞米利加の舞臺化粧には五十何種もの白粉が使はれてゐたが、一度塗るとなか〳〵綺麗には落ちない。そこでこの白粉を溶すために、脂の強いクリームが出來て、それを舞臺用コールド・クリームと呼ばれたが、第一値段が高い。白粉を拭きとるだけのクリームであるから、安くて量が澤山なければ困るといふので、現在廣く使はれてゐるやうな比較的安いクレンヂング・クリームが出來たのである。容

物も當時からこのクリームに限りブリキ罐を使つたので、今もクレンヂング・クリームは罐入となつてゐる。

第廿二節　白粉の良否の見分け方

白粉の良否を鑑別するには、なか〳〵手數のかゝるものであるが、要するに鉛分の含有してゐないのが無害なのである。これを最も簡單に檢査するには、茶椀へ少量の白粉を入れ、これに半分ぐらゐの水を混和して攪拌し、硼酸少量とアンモニヤ二三滴を加へる。この場合鉛分を含有してゐる白粉は、忽ち黒色に變ずるからすぐわかるものである。

第廿三節　石鹸の見分け方と使ひ方

石鹸は日常生活に於て最も廣く使はれてゐる化學製品の一で、種類は多いが用途によつて大別すると、洗濯石鹸、化粧石鹸、工用石鹸、藥用石鹸等になり製造方法によつて大別すると、枠練石鹸と機械石鹸とである機械石鹸は枠練石鹸よりも、乾燥時間がかゝらないから、混ぜ物をすることが容易で從つて値段も安いが、石鹸の固まり方が十分でないため、水を吸收して形がくづれ易いのが缺點である。

石鹸の原料には種々あるが、普通の硬い石鹸は、油脂に苛性曹達を加へて製造する。良否を見分けるには、大體次の標準によればよいが、色や香氣は質の良否に關係はない。

一　游離アルカリを含まぬこと。石鹸の端をナイフで切り取り嘗めてみて非常に辛くピリ〳〵と舌をさす場合は、アルカリ過剰の石鹸であるから、これを使用すると顔や手の皮膚を荒し、また衣服の質を傷める。

二　游離脂肪を含まぬこと。石鹸の表面に密着させて西洋紙で包み、一週間ぐらゐして取り出し、もし包紙に油がにじんでゐる場合は脂肪分の多い石鹸であるから、これを用ひると汚れが落ちないのみならず却つて油で汚すことになる。

三　澱粉や粘土等の不純物を含まぬこと。湯に溶かしてヨード丁幾を二三滴たらして、青色に變ずるものは澱粉が混ぜてある。また試驗管に入れアルコールで溶かして見て、溶けるものは純粹の石鹸であるが、粘土は溶けずに沈澱するからすぐわかる。

使用上の注意をいへば、品質さへよければいゝので、家庭用としては香料のために高價となつてゐるものを用ひないこと。また一度に多くつけるよりも、先づ少し掌につけて顔

を洗ひ、再度繰り返すとよい。頭部や女の髪などは殊にさうで、一旦湯で洗ひ次に少し石鹸をつけて洗ひ、今一度洗ふと石鹸は少くてすみ、落ちも一番よい。尙石鹸入れは使用後必らずよく水氣を拭き取つておかねばならぬ。

第三章　毛髪の手入

第一節　毛髪の美

正裝用の髪と髪飾

折角眞直に伸びてゐる黑い髪の毛をわざ〳〵燒鏡などをあて縮らす風が最近流行するが、あれは日本人の體格と皮膚、色の美を損ずるばかりでなく、二千何百年の歷史を有する習慣風俗からいつても感心出來ない。性來の縮毛、赤毛、癖毛で滿足に日本髪を結ひ得ない人が、その缺點を彌縫する手段としてならば已むを得ないが、滿足な頭髪を持つてゐる人まで、頭に雀の巢を造る必要はないと思ふ。

昔支那の褒姒が肺病であつたか胃病であつたか、始終胸先に痛みを覺えるので自然眉の間を顰めてゐた。その風情が雨に惱む海棠の趣があるといふので後宮三千の美妃が、みなその眞似をしたといふ話があるが、燒鏡はこれに類した愚かさである。日本の婦人としては矢張り烏の濡羽色、漆のやうに艶々としたのが美しい。

第二節　毛髪の手入

毛髪の手入は毛根に血行をよくすることが大切で、それには毎月二度は髪を洗ひ、毛髪に附着してゐる塞埃や分泌物などを除却しなければならぬ。これは宮に毛髪の美を保つばかりでなく、不潔と不衞生から免かれる必要な心がけである。その上空氣の流通をよくするために、時々解いて風を通さなければならない。

毛髪の洗滌料としては鷄卵の黃味、または卵白を塗つた後ち微溫湯で洗ふか、或は布海苔に饂飩粉を交へて微溫湯で洗ふかして、最後の濯ぎ湯の中に椿油二三滴を落して濯ぐのがよい。

椿油の搾糟に布海苔を混ぜて洗つても、毛髪を痛めず軟かに黑さを增すといはれてゐる。

石鹸、曹達を用ふるのは、毛髪の脂氣を去つて折れ易くし、且つ赤くするから差控へる方が安全であるが、已むない場合石鹸で洗ふならば刺戟のない純良な石鹸を微溫湯に溶いて濯ぎ出す。石鹸でぢかに頭髪をゴシ〳〵擦つてはならない。

また毛髪を洗ふにあまり油氣が脫けてから、力一杯揉むと毛髪を損める。毛髪の澤山ある人が癖毛になるのは、無暗に揉み過ぎるからである。洗ひ髪をなすには西洋手拭で幾度も水氣を拭き取るか、自然に乾くのを待つ方がよく、日光へ晒すと赤くする虞れがある。さうして乾いた毛髪には、椿油を頭の地から毛髪全體に萬遍なくすり込むのである。

雲脂を取るため純良の酒精をガーゼに含ませ、頭の地を丁寧に拭くのは血行をよくする上にも有効であるが、毛髪に酒精が直かにつくと赤くなる憂ひがある。

第三節　癖直し

雲脂を除るため、櫛の齒を立てゝ頭部の地を掻くと、氣持のよいものであるが、櫛の齒を立てゝは禿を作る原因になる。又癖直しに熱い湯を用ひるのは衞生上害になるから、成るべく熱い湯は用ひない方がよい。雲脂の多量にある人は、癖直しの湯へ硼酸を少し加へ、布片に浸して頭部の地肌を撫でると清潔になる。

毛髮は每日梳く方がためになるやうに思はれるが、毛髪のためには餘り稀數は使はぬがよい。埃さへ被らなければ、三日に一度ぐらゐの程度が適當で、梳く際には毛髪の赤ばんだ細い婦人は、生際から一寸ぐらゐ後の方を梳くやうにせぬと、次第に生際が薄く脫けあがつて來る。

第四節　脫毛の豫防

夏でも運動さへ怠らなければ食慾が進み、食慾が進めば榮養が攝れるから、古い毛が脫けて新らしい毛に生え代り、毛の脫け落ちることは決してない。暑いからといつて運動を怠ると秋になつて毛が落ちる。働いて能く食べ攝生さへよければ、春夏秋、いつも毛の脫けることはない。次に副食物は寒中には脂肪の多いもの、夏は淡白したものを選び、夏ならば月に二回、多ならば二ヶ月に三回づゝ毛髪を洗ふのが適當であるが、特別に汚れるやうな仕事に從事する人は、勿論これ以上に洗滌しなけ

ればならぬ。

第五節　潮水に毛髪の浸つた場合

海水浴などでは潮水へ毛髪を浸けぬやう注意することが肝腎であるが、若し毛髪が潮水に濡つた場合は、椿油の搾り糟、饂飩粉、布海苔などで毛髪を洗ひ、洗つた後を清水に純良椿油を四五滴落して洗ひ、水氣を拭ひ取つてから少量の椿油をつけて貰くと毛髪は赤くならず黒い光澤を保つことが出來る。

第六節　夏の髪の結ひ方

夏期は櫛卷が一番であるが、丸髷は束髪よりも入毛が少ないからよい。夏期は頭部を輕くするやうに心掛けることが必要である。夏季には毛髪の脱けることは心配するが、日に三十本から五十本ぐらゐは普通で、決して病氣のためではない。

第七節　涼しい束髪

束髪にはいろ〳〵な芯を入れるから、熱と汗のために息苦しくて頭部が時々痛くなることがあるが、これを防ぐには黒色の薄絹を小さく三角形か細長く縫ひ、樟腦を入れて口を閉ぢ、入毛の下へ入れて置けば、風の吹くたびに何となく微かな香りがして、汗の臭ひも取れ熱も除れてよい氣持になる。

第八節　病人の毛髪

病人でも身體を動かさぬ程度に、毎日毛髪の手入れをせぬと恢復後に目立つて毛髪が脱けるから注意が必要である。禿頭は頭部を重曹水でよく洗ひ、イヒチョール二・五とラノリン二五・〇を混和して軟膏として用ふればよく、又電氣療法も効果がある。毛を濃くするには硼砂一匙に酒石酸四グラム、オルモンド油四グラム、ベルガモット香油一滴を、三合餘の熱湯に注いでよく洗へば美しくなる。

第四章　社交ダンス

ダンスの種類　現代一般に行はれて居る社交ダンスは、フォクス・トロット、ブルース、ウオルツ、タンゴの四種類に大別されるが、これ以外にも、フォックス・トロットにはスロー・フォックス・トロット、クイック・ステップ、ルンバ・トロット、ミドウエイ・リズム、ウオルツにはヘヂテーション・ウオルツ、モダン・ウオルツ、タンゴにはアルゼンチン・タンゴ、フレンチ・タンゴがあるやうに、時代によつて次々に新しいステップが考案されてゐる。大體に於てスロー・トロット、クイック・ステップ、モダン・ウオルツ、ブルースの五種を心得て居れば、どこへ出ても恥を掻くやうなことはない。

社交ダンスの踊り方

スロー・トロット　踊りの基礎をなすものは歩行とスリー・ステップで、他のステップはこの二つの組合せか變型であり、音樂は四分の四拍子の緩やかなもので、リズムに強弱長短はあつても、伴奏は強弱々々と正しく反覆して聞かれる。

ステップの踏出しはこの第一と第三でやるので歩行には各歩とも二拍子を費やし、スリー・ステップや弧轉には、緩速速緩と緩歩は二拍子、速歩は一拍子を用ひる。基本的フイギュアは歩行、スリー・ステップ、フェザー・ステップ、右廻り、左廻り、逆ウェーヴの六種である。

クイック・ステップ　この踊りはテンポが幾分速く、一分間五十二小節くらゐ伴奏される。その輕快にして愉快なリズムは踊る者をして華やかな情調に浸らしめるのである。

基本的フイギュアは歩行、ツー・ステップ、右廻り、左廻り、四分の一廻り、ジグザグ、クロッス・シャッセ等であるが、必ずしも以上全部を知らねば踊れない譯ではなく、一二は缺けてゐても差支はない。

ブルース　トロット同樣四分の四拍子であるが、スロー・トロットよりも一層緩やかでアクセントも一、三よりも二、四の方について居り、テンポが緩慢なため初心者にも踊り易い。基本的フイギュアは歩行、シャッセ廻轉である。

ウオルツ　ウオルツは社交ダンス中最も古いもので、現在のモダン・ウオルツまでに幾多の變遷を經、テンポも六十小節から三十六小節にまで緩くなつて居り、餘程經驗を積まないと輕快には踊れない。

基本的フイギュアは歩行、右廻り、左廻り、チェンヂ（スリー・ステップ）で、音樂は四分の三拍子、リズムは正しく

一二三、一二三となつてゐて一が强く、二三は緩く附える。ステップは常にこの第一拍子の强で踏出し、原則として第三拍子で兩足を揃へる。然かしスリー・ステップの時は揃へない。

またこの踊りに必要なものは浮揚で、卽ち第一歩の終りから爪先まで立つて身體を浮上げ、第二歩で浮いたまゝ足を運び、第三歩で足を揃へて身體を落すのである。

タンゴ　最近のタンゴはモダン・タンゴで、アルゼンチン・タンゴは殆んど顧られない。タンゴの曲は情調纏綿たる哀調で組方も他のダンスのやうに兩人正しく向き合ふのでなく、互ひの身體が何れも少し左寄りに位置し、寧ろ男子の右膝が婦人の右膝に近く向き合ふ。歩行も他のダンスは足を床から離さないが、タンゴは必ず足を少し床から離して歩く。

そのフイギュアの重なるものは歩行、プロゲレッシーヴ・サイド・ステップ、左廻り、サイド・プロムナード、パック・コルテで、音樂は四分の二拍子、一拍子一歩を原則とし、歩行以外は一拍子に二歩行く場合がある。卽ち速々緩で一拍子二歩、緩歩は一拍子一歩である。テンポはブルースと同じぐらゐで、歩幅がブルースより幾分狹くなる。

ルンバ　ルンバは中央キューバの民踊で、千九百十四年頃既に世界を風靡したが、身振りの多い野趣に富んだシャッセが、近代人の意に適ひ再び流行を來したものである。

トロット同樣四分の四拍子で、一分間四十四小節から四十六小節ぐらひ奏する。重なるフイギュアは歩行、右廻り、左廻り、クロック・シャッセとデテーション、リンク、コルテ、ルンバ・ターン、サーキュラ・ターン等であるが、後の二三は知らなくても踊ることが出來る。

第二編　服裝と禮儀作法

第一章　服裝と禮節

第一節　我が國現代の服裝

現代我國の服裝は、實用服としては洋裝時代といつても過言でなく、最も保守的な家庭婦人の服裝でさへ、夏季は殆んどホームドレス全盛時代の觀を呈して居る。然かし無條件に取り入れた洋裝も、その發祥地たる歐洲地方とは、夏季に於ける氣候狀態を著しく異にし、また冬季に於ても室內裝備の不完全な我國の住宅に於て、そのまゝの洋服が衞生上特に體溫調節補助機關としての役目の上に、大きな缺陷のあることに氣づいたやうで、言はゞ今や服裝再吟味の風潮が見えてゐる。夏時に於ける男子のノー・ネクタイ運動、冬季に於ける婦人子供洋服の保溫問題などがこれを反映するものである。

儀禮服としては男子は、公式上のものは祭服を除いては、洋裝を以て禮裝と規定されて居るので、自然一般通常禮服としても洋裝となつたものであらうが、女子は公式にも和洋二樣式が採用されてゐるためか、傳統を重んずる婦人の禮服としては斷然和服であるといひ得るのである。然かしながら一面社交服としての洋裝も、次第に增加の傾向を示して居る。

第二節　習慣と作法

「形正しからざれば威重からず」は古今東西を通じての金言である。然かし形を正しくせよとは、何も美服を飾れとの意味ではない。服裝を整へるのは威容を正しくすることで、自己を正しく保ち、正しく示す必然の手段である。

ところでこの服裝には各民族によつて異つた風俗、習慣、作法があり、また時代の推移により、生活の必要に應じ改廢さるべきものもあらうが、必要なくしてこれを破壞するのは、民族の傳統歷史を無視し、自己の矜持を失ふものである。

自己を正しく示し、また他人を正しく見るには、先づ以て服裝に於ける正しい習慣と作法とを知らねばならぬ。

第三節　和洋共通の心得

服裝は常に正しく、常に淸潔にすることを怠つてはならぬ。垢の付いた衣服を着てゐては、他人に對して不快の念を與へる

のみでなく、自己の健康にもよくないのである。「服裝の健は心の鏡なり」との西諺を味ふべしである。

服裝はその基準を自己に見出さねばならぬ。他人が着て似合つたからとて、それが自分にも似合ふであらうとの考へは間違ひである。身長の高い人と低い人、痩せた人と肥つた人、色の白い人と黑い人などの差によつて、似合ふべき服裝も相違があり、身長の低い人が格子縞を着たり、肥つた人が横縞を着たりすれば、餘計に天性の缺點を暴露する。服裝を撰擇する前に、先づ自己の特長と缺點をよく知るのが肝要である。

百合の清楚、牡丹の濃艶、自然の美は配合に無理のないところに發揮される。徒らに商人の宣傳に惑はされ、流行にかぶれるのは自己沒却の甚だしきものである。身體に似合はぬ千金の美服よりは、自己の身體に合つた浴衣一枚の方が、どれほど配合の美を得るかを考へねばならぬ。

第二章　和服の着方

第一節　舊慣との差別心得

日本人として當然守らねばならぬのは、和服に於ける作法である。元來日本人と歐米人とは、骨格において根本的に相違があつて、何千年來日本人の體格と習慣に適應するやうにこしらへられた和服と、明治の初期より一般に行きわたつた洋服と何れが似合ふかは、眼の判斷があまりにも明らか過ぎる。然かし實際生活上の必要から、その似合はぬ洋服を着なければならない場合が多くなつた現代では、時代遲れの國粹保存を振ぎ出すのも目先の利かない愚かさであるが、さりとて生活上何等の必要をも認めないのに、好んで似合はぬ洋裝をするのはそれにも增した愚かである。

これを反對に考へて、外人が和服を着けたさまを見ると、隨分滑稽に思はれる。それと同じく日本人が洋裝したのを外人が見たら、可なり滑稽を感ずる無作法もあらうと思はれるのである。出來れば和服を着、日本語を使つて世界を濶歩したいのであるが、それが出來ないため、不似合の苦痛を忍び、生活の必要上洋服を着るのであるから、必要のない人は和服を着けてゐる方が作法上安全な方法である。

第二節　時代に順應の作法

時代に伴つて生活の手段や、方法は變つて行くから、その必要に應じて服裝の作法が變つて行くのは是非もないが、改善を加へる前に、一應據つて來つた舊慣なり作法なりを知つて置かねばならない。これを思はずして無意味の破壞を行ふことは民族歴史の冒瀆である。

近來盛んに和服の改良が唱導されまた實行されるのは結構なことであるが、またその必要以外に脱出して和服の特長、優邁の歴史などを沒却した舊慣破壞も少くない。かゝる風潮は改善ではなくして改惡であり、却つて外人の笑草になるであらう。常識の第一歩としては、自己の服裝における舊慣と作法位は知つて置かねばならぬ。

第三節　和服の體裝

用途	帽子	上着	下着	襟	羽織	帶	袴	足袋	履物	扇	外套
儀式	山高中折	黑色、染紋、五ツ紋、色合は夏物には薄色を用ふるも可	白又は鼠色（冬）白無地（夏）	下着の色合と同じ	黑色、染紋、五ツ紋、紐は白	角帶	縞襠高袴	白	草履用ふ	インバネス	
訪問	山高中折	縞物	小紋形、更紗、縞物、無地物	下着の色合と似通つた無地物を使ふ	黑色、紋の數及染縫は隨意	角帶 兵見帶	縞襠高袴	白紺	草履表付の下駄	隨意	インバネス

時代により且つ階級によつて多少の差別はあり、衣冠束帶に笏を持ち、十二單衣に檜扇を翳した大宮人の體裝や、素袍、大紋、長裃などは、現代離れして一般民衆には頗る縁が遠いから、此處には現代に即して一般に遵守される和服の體裝を記するに止めて置く。

男子の裝　無地紋付に袴または紋付の羽織である。紋は着物羽織共に五つ紋を正しとし、略しては三つ紋をも用ひる。着物の地質は春秋冬は羽二重、夏は絽または麻帷子を用ひ、色は春秋冬及び夏の絽においてはすべて黑、麻帷子には白又は薄き水淺黄をも用ひるが、これは白を以て正しいとせねばならぬ。十六歳以下は殿斗目を用ひたが漸次廢され、現今では多くの場合縞物を以て代用するやうになつて居る

下着は白を正式とするが、上着と同じものを用ひても差支ない。羽織の地質は春秋冬は羽二重または紬子、夏は紗で四季を通じて黒の無地紋付である。

德川時代は主として羽二重を武家が着用し、一般町家は紬子を用ひる風習もあり、現今では地方によつては昔ながらの紬子を着用してゐるが、着心地の點からも、また保存の點からも、羽二重の方が優つてゐる。羽織紐は白の太白が正しいが、略して白の平打を用ひても差支ない。參考のため前表に詳しく表記した。

婦人の禮裝　德川時代には婦人の正裝としては、士分以上は小袖の名殘から來た裲襠に、白無垢（年の若い婦人は縮緬に赤裏合せ着を白無垢の上に着た）で、一般町家では紋付縞模樣または裾模樣、略しては小紋の紋付なども着たが、現今では裲襠を着るのは上流社會の婚儀以外に見受けられず、一般に裾模樣の紋付を以つて正式の禮裝としてゐる。

婦人の禮裝

裳は三枚が本式で、下着は白が正しいが、大抵は下着にも同じ模樣を設き、具つ略して二枚とし、模樣も裾模樣から漸次高樓模樣に變化して、最近は胸にまで及んだものもある。振袖は婚儀以外十六七歳以下の晴着に着用される。紋は五つ紋が正式であるが、略して三つ紋をも用ひる。然かし縫紋は正式の禮服に用ふべきでない。地質は羽二重、縮緬、夏は紗で色は振袖以外黒が正式である。然し最近の傾向として、染直しの利く繻子關係から色物が多く用ひられてゐる。

婦人の禮裝に羽織を用ひるのは違法である。禮裝のみでなく何んな場合にも、羽織を着用して他人に接するのは違式である。この違式の無作法が一般的に及んだのは、德川末期江戸櫓下の花柳社會の流行が、一般町家に及ぼしたものといはれるが、それすら常着の上に用ひて暑さを防いだものに過ぎなかつた。現今の如く訪問、外出、甚しきは盛裝の一つに誤解してゐるなどは、在來の習慣を無視する無作法のみでなく、下肢の短かい日本婦人の體格の缺點を補ふために、美化された帶の特長を沒却するの愚さを敢てするものである。

に婦人が夏羽織を着て時意とするに至つては、自から和服の傳統と特色を失ひ、すべての調和美を破壞するものといはねばならぬ。

用途	上着	下着	襟	帶	羽織	扇	足袋	履物
通常禮服	黒又は色物の模樣五つ紋染紋	白又は上着と同色同模樣	白	丸帶	絶對用ひず	用ふ	白	草履
訪問服	色物の模樣物、紋は三つ又は一つ	適宜	白、色物模樣物	丸帶、袋帶	用ひるも可	隨意	白	草履、下駄の場合は表附
凶事	黒無地	白又は黒	白	黒丸帶	絶對用ひず	用ふ	白	草履

禮裝の襦袢は男女共に白が正式であるが、略して襟だけを白にしても差支ない。例により左に婦人の禮服を表記する。

第四節　縞物と絣に就て

男子が禮裝に縞物を以つて無地物に代へることは、德川時代一般町家の風から來たものであるが、その縞物も無地物の代用であるから、微塵縞または鄙縞の細かいものを着用するのが本來で、縞柄の荒きもの、格子または横縞の如きは禮裝に避くべきである。

絣は贅澤な大島絣にしても常着に過ぎないから、他人に接する略裝としても絣の着物は遠慮すべきである。然かしこれとて現代の如く、和服の作法が紊れてゐるときは已むなく寛大に見るとしても、羽織たけは無地または縞物を以つてするのが作法である。これは歐米において突嗟の場合、背廣服を着替へることの出來ない場合は、帽子だけを絹帽に改めるのと同一の身嗜みである。對の大島を着用して、これ見よがしに得得たるは笑ふべき無作法で、從つて絣に白足袋を穿き、袴をつけなどするのは甚しい違式である。尤も紺の薩摩絣は同地方における慣例から訪問または略式禮裝として差支ないとされてゐる。されば學生などの略式禮服または訪問服裝として、薩摩絣やこの代用品たる久留米絣などを着用するのは、或はその當を得たものであるといへるのである。

第五節　浴衣の今昔

浴衣は湯帷子の轉訛したもので、昔の汗衫と同じく汗取りの具である。然かし汗衫が後世宮女または、童女の表衣として初夏に用ひられたのを思へば、浴衣が現今の如く湯上り以外に着用されるのもまた怪しむに足りないが、汗衫が後世表衣に變化したのは、汗取りに生絹の帷子などを用ふるやうになつたゝめで、この點からいふときは浴衣が現今の如く、浴衣の本旨を失つたのとは趣を異にしてゐる。

浴衣は素肌に着るのが本當で、下に襦袢を着、足袋を穿き、甚しきは浴衣の上に袴をはくなどは、簡易主義からは結構てあらうが、禮儀、作法を無視する簡易は考へものである。

地質は絹にもせよ綿織にもせよ、浴衣の本來から素肌に着すべきで、そこに三伏の涼味を味ひ得る譯で、浴衣着で他人を訪問するなどは、最も慎まねばならぬ。

第六節　帶の變遷

男子の禮裝には必らず角帶でなければならぬ。その結び方については昔は武士と町家の者との間に差別があつたが、現時は一般に町家の結び方たる兩がけ結びが行はれる。

兵兒帶は薩摩の兵兒が締めたから起つた名稱で、維新前後から一般に傳播したが、次第に變遷して白縮緬になり、錦紗になり、派手な紋模様を染め出すに至つて、兵兒帶の意義は全く失はれたのである。

婦人の禮裝は丸帶に限り地質は錦、厚板、繻珍などと種々ある。晝夜帶は日常晝夜の常着に締めるもので、禮裝には用ふべきでないことはいふまでもない。

第七節　袴の心得

男子の禮裝着用としての袴は、襠高袴が正式であるが、元來が折目の正しきを示すものであるから、地質は仙臺平、博多平、五泉平などが多く用ひられた。然かるに近來は都平其他の流行が濫出し、殊に最近はお召、結城の類まで袴地に應用され、夏にはまた着袴なども流行し、袴の本義を失ふに至つた。

セルの行燈袴は明治末期から流行を見た。これは正式の禮裝に用ふべきものでなく、防寒用兼着物の前を汚さない經濟用である。

第八節　帽子

公家、武家の大禮服に對する冠、烏帽子などは別として、近古結髮時代には帽子を被らなかつたが、結髮が斷髮になつて見ると、頭の上が淋しいのと、洋服との對照上、和服にも帽子がなくては不恰好になつて來たので、遂にこれを被るのが作法の慣例になつて來た。然かし絹帽では和服の禮裝に不似合なので、山高帽を禮裝用に定めたやうなものゝ、帽子における確定律はまだ存在してゐる譯でなく、夏は麥藁帽を用ひたとて咎め立てするほどの違式ではないが、世間並に山高や中折を用ひるのが作法上無難であらう。

第九節　履物

足袋　足袋は白を以て正しとすべく、綿足袋は常着以外用ふべきでない。地質は男女とも羽二重、キャラコ、白木綿などで、地質の異つたものまたは色變りのものは、他人に對して禮を缺くものである。防寒用としてコールテン足袋も時代向ではあるが、以上の心得を知つた上で穿くべきである。

草履　禮裝に對する正しい履物は、男女ともに畳草履であるが、これは現代的でないから舊慣を重んずる嚴格な家庭以外には殆んど用ひられない。これに代へて男子は壓表の駄下駄で「のめり形」のが通例とされ、夏期は籐表を用ひる人もあるが、これは略の略である。略式ならば舊慣上雪駄は當然許さるべきものであるが、籐表の雪駄は作法上慣むのが禮でであらう。鼻緒は白の鹿皮ならば如何なるときに用ひて差支ないが、現今では鼠、茶、黑などを用ひても怪しまないやうになつて居る。

下駄　薩摩下駄や堂島下駄などは、南部の糸柾でも平素穿きで、決して禮裝に穿くべきものでないが、略裝として紺の薩摩絣に、木綿袴をつける地方習慣に從ふ場合には、壓表の下駄では對照がとれないから、當然薩摩下駄を用ふべきである。

婦人の禮裝に對する下駄は、年齡により木履または「あとまる」を選むべきで、兩刻は略の略たるものである。鼻緒は白が正式であるが、これは男子ほどに舊慣を守る必要なく、色物を用ひても差支ないとしても、成るべく單色を選むのが無難である。

雨天のときは勿論男女とも足駄を用ひて差支ない。この場

合爪袋は黒に限られ、近來女用の爪皮に見受ける模様付のものは禮裝としては違式の無作法である。

第十節　扇子

男女ともに禮裝には必らず扇子と懐紙を用意すべく、これは洋服の場合の手袋と同じ作法であるが、男子用としては白扇の大和骨が正式で、女子は塗骨にして金銀地が正式である。

扇の使ひ方

第三章　洋服の着方

現代の二重生活は歐米の模倣から來た憎みであるが、それが對外關係が密接になり複雜になつた今日では、已むを得ぬ生活上の必要もあり、法令を以つて禮服が洋服に定められ、公式の宴會が洋食を用ふるに至つては、最早無意味の模倣では濟まされない。

自己を知るには自己の習慣を知り、他人を知るにはまた他人の習慣を知り、相共にその禮儀作法を尊重するのが共存共榮の道であるから、短を去り長を採り、生活の向上を計る上においては、彼我の慣例作法をよく理解せねばならない。

元來洋服を着、洋食を食ふ現代人は、當然その作法や禮式の一般を心得て置かねば、所謂沐猴にして冠すの嘲笑に甘んじなければならぬ。絹帽に燕尾服を着込み、自動車で繰り込んで見たところで、赤靴をはいたり、黒のネクタイをかけてゐては、折角の威容をしてすべて滑稽化し、却つて人格まで疑はれるであらうことはいふまでもない。

第一節　禮裝の區別

制規の大禮服や一定の制服や軍服は、特殊に屬するものだから茲には省き、普通禮裝といへば燕尾服で、これは法令を以つて一般儀禮の際に、着用すべきものと定められてゐる。

フロック・コートを日本では禮服のやうに誤解してゐるが、これは訪問、接客用の通常服裝で、禮服といふべきものではない。略式禮服としてはタキシード・コートもまたフロックに次ぐ通常服である。この區別は洋服を着る上において、是非心得て置かねばならぬ。

第二節　燕尾服

燕尾服はフルドレッスまたはイヴニング・コートともいふが制規の大禮服に對して小禮服などゝもいはれる。元來は夜會服で夜間公式の宴會、結婚式、披露宴、舞踏會、觀劇會、音樂會または婦人同席の宴會などに着用する禮裝である。英米兩國では夜間專用の禮服とされ、英國では「イヴニング・ドレスを夕食前に用ふるなかれ」といはれる位ゐだが、其他の歐洲各國ではその範圍を廣くして、一般晝間でも着ることになつてゐる。我國でも特に法令を以つて、燕尾服は晝夜の別なく一般の禮服と定められてゐるのであるから、公式の場合はこれを着用すべきである。

地質は黒の三つ揃が正式であるが、近來は四季通じて、白のチョッキを着るのが流行し、その地質も上着と同じく羅紗を用ふべきを、リンネル地を代用しても、敢て違式ではないとされて居る。

第三節　フロック・コート

フロック・コートは通常服で一名プリンス・アルバートといひ、英國では一般に廣く着用されてゐるが、米國ではモーニングのために壓倒されて、老人または寺院專用の服裝とされてゐる。元來が晝間專用の通常服であるから、午前中または夕食後には着用すべきでないが、日本では無頓着に夜でも着て怪しまない。正式の宴會または外人などゝ同席するホテルや、船中などの食堂へ出るのには、燕尾服または略してタキシードを着用すべきである。

地質は上衣とチョッキは黒、ズボンは縞を原則とするが、慣式には黒の三つ揃ひを用ひる。但し縞のズボンを穿いたとて、違式として咎められるほどのこともなく、夏はまた白チョッキを着ても差支ない。

第四節　モーニング・コート

モーニング・コートはフロック・コートと同じく通常服であるが、フロック・コートを午後夕食までの通常服とすれば、モーニングは午前中の通常服である。ところが我國は午前午後の

區別なく、夜間までモーニングを着用して平然としてゐる。尤も米國などもまた午前午後これを着用してゐるが、もと〳〵米國は歐洲各國に比して禮儀作法の八釜しくない國である。それでも夜間モーニングを着用するなどはあまり見受けないのである。

モーニングの着方

モーニングの上衣は黒、ズボンは縞をもつて上品としまた無難とされてゐるが、鼠、茶、霜降乃至縞の色物を用ひても差支はない。尤も色物または縞物を用ふる際には三つ揃ひが原則で、夏は白のチョッキに白の縞ズボンを用ひることを作法上許されてゐるが、白無地のズボンだけは差控へなければならない。

第五節　タキシード・コート

燕尾服が正式禮服とすれば、タキシードは略式禮服即ち半禮服とでもいふべきものである。一名ディンナー・ジャットともいひ、船中またはホテルの食堂に出席する際や、或は觀劇、音樂會などに出るに燕尾服の代用として着用し、公式の場合でも服裝を指定されないときか、且つ婦人を交へない宴會などなら差支ない。着心地も燕尾服より輕快であり、非公式には如何なる場合にも差支ないから、外人と接觸する機會の多い者は一層を用意すべきである。

色は燕尾服と同じく黒が正式であるが、東洋では夏期に限り上衣だけを、白のリンネル地に蕭替へることが流行してゐる。

タキシードの着方

第六節　背廣服

背廣はビヂネス・コートまたはサックコートともいひ、純然たる事務服（略服）であつて、和服に譬へると羽織なしの着流しに當るものである。從つて改つた席へは遠慮すべきが當然で、殊に夜間の宴席または婦人の列する席などへ着用するのは論外の沙汰といはねばならぬ。

背廣は事務服だけに地質、色合などに何等の制限もないが、黒または紺の三つ揃が一番無難でもあり上品でもある。ズボンを上衣と異にする場合は、必らず上衣より薄い色、縞ならば細きものを選まねばならぬ、白の上衣に黒のズボンなどは、海軍軍人か船員は例外として一般に着用すべきものでない。

日本人は夏になるとよく白無地の背廣服を着るばかりか、甚しきは他人を訪問して自他ともに怪しまないが、是等は洋服に對する無知識を暴露するものである。白の背廣なるものは、熱帶地專用のもので、無作法を以つて目されてゐる米人ですら、避暑や郊外散歩位るに着用するに止まり、市中では一切これを着用してゐない。

第七節　ドレシング・ガウン

これは寢衣であるから自己の室内のみで着用すべきで、室外に出づべき服裝ではない。

一般日本人としては平常家庭でこれを用ふるまでに至つてゐないが、ホテルなどでこれを着るやうなことがあつたら、必らず自室の扉に鍵をかけることを忘れてはならぬ。ドレシング・ガウン一枚で室外に出るが如き無作法を、婦人などに見せたりしては、物笑ひの沙汰位ゐでは、濟まなくなることを承知してゐなければならぬ。

第八節　チョッキ

暑熱の夏でもチョッキを着るのが洋服の作法であるが、それは他人に接する上の作法で、自己の室内で打寛いでゐたり執務してゐたりする場合は、チョッキを脱いでゐやうが、上衣を脱いでゐやうが差支ない。これに反し如何なる場合、如何なる時においても、他人を訪問するのには一應案内を乞ふなり、叩扉するなりして、室内に入るのが作法であるから、そのとき應接の服裝を正しても間に合ふ筈である。萬一無斷で室内へ闖入され、服裝の紊れてゐるところを見られたとしても、それは先方の無作法であつて此方に何の罪もないが、先方が正當の順序を經て面接を乞ふ以上、こつちでも服裝の紊れてゐるのを、正しくして應待すべきがお互ひの禮式であるのに、日本人は往々應接室でチョッキなしで面接してゐるのを見受け、甚しくなるとチョッキなしで他人を訪問する者さへあるやうである。

第九節　外套

外套は戸外專用のものであるが、戸外でも儀式の際は雨天、雪中、酷寒の場合は例外として、必らずこれを脱する心がけを忘れてはならない。なほ長上の者に對して、鄭重に挨拶する場合などもこれを脱ぐべく、先方が自分より目下の者であつても、先方から禮を正しく外套を脱いで挨拶されたら、自分もまたこれを脱いで應對するのが紳士としての禮である。

禮服に對する外套はインバネス或ひはトンビが適當してゐるが、普通のオーバコートでも差支ない。然かし胸はシングルの隠釦とし、黑無地が作法上無難である。其他の略服における外套ならば、地質、色合、縞柄なども各任意に選擇して差支はないのである。

第十節　ワイシャツ

ワイシャツはホワイト・シャツの略であるから、その名の如く白を原則とし、略服以外は色物や、縞物は遠式の無作法とされてゐる。

地質はキャラコを正式とするが絹でも差支はない。但し背廣服は元來が事務服であり略服であるから、色物または縞物で差支なく、地質もボイルでもフランネルでも隨意である。

ワイシャツのカフス及びその胸の部分は、英國式に正しくいへば硬いものを用ふべきであらうが、現在では硬軟何れでも任意とされてゐる。如何なる場合でも略服でない限り、その都度新らしいものを着用すべきが作法で、背廣服でも一週間に二度位ゐはワイシャツを取換へなければならぬ。

第十一節　カラー

洋服が如何に新調のものでも、カラーやワイシャツに垢の附いたものを着てゐては、折角の威儀も殆んどその價値を失ひ、和服で襟垢や、袖口の切れた襦袢を着てゐると同樣である。これに反して假令洋服は少々古くても、この二つのものが新しく清潔であれば恥しがることはないとされてゐる。特に禮裝の際はその朝取替へたばかりのカラーでも、これを新品に改めるのを可とする。元來カラーは背廣服にあつても、毎朝取替へるのが原則である。

カラーにはシングルとダブルとがあり、この選擇について日本には誤謬が傳へられてゐる。或雜誌に「老人はシングル、青年はダブル」と記載してあつたが、これは甚しい間違ひである。儀禮の正しい英國では老若を問はず、通常服以上は多くシングルを用ふるのが例とされ、比較的儀禮に無頓着な米國では燕尾服以外タキシードでも、モーニングでもダブルを用ふるのが老若を問はぬ流行となつてゐる。然かし一般的にいへば通常服以上はシングルを用ひ、背廣服にダブルを用ふるのが、作法上無難である。勿論シングルには背廣服でも差支ない。それはカラーとしてこの方が正式だからである。從つて燕尾服、タキシードには是非シングルを選ぶべく、フロック、モーニングにもまた正式にはシングルを用ふべきである。

カラーは服裝の清潔を表示する第一の目標であるから、當然純白なリンネル製を正式とし、色物、縞物などは義人または勞働者に限られた下品なもので、紳士として決して用ふべきでない。最近日本ではソフト・カラーが流行してゐるやうだが、これは元來が夏期に、執務に汚れやすいカラーを洗濯に便するがために案出されたもので、當然背廣服に限つて用ふべきものであることはいふまでもない。

何れのカラーを用ふるにもせよ、あまり高いカラーで首を絞められてゐるやうなのも恰好が惡く、さりとてあまり低いカラーをつけて頤の下に空地を拵へてゐるのもまた不體裁である。この高低を選擇するのには、流行を顧慮するより先づ自分の頸に相談し、それによつて似合ふべき高低を定むべきである。またサイズの合はぬカラーをつけてゐるのも頗る滑稽であるから、先づ自分の頸にあてゝ小指一本を入れ、あまり窮屈でない程度のサイズを選むべきである。

第十二節　帽子

帽子は燕尾服やタキシードには絹帽を正式とする。フロック、モーニングの通常服にも絹帽を用ふべきであるが、日本人は略して山高帽を用ひてゐる。然かしこれは元來が通常服だけに何れに用ひても差支なく、夏期にあつては麥稈帽もまた通常服には許さるべきであらう。

絹帽は場合により、縞または黑の三つ揃ひ背廣服にも用ひることもあるが、これは途中急に公式訪問の必要が出來て、禮服と着替へる服のないとき、取敢ず帽子のみを禮帽に改めて行くといふ場合で、和服で袴だけをつけて行くと同樣である。

日本人は山高帽を略式禮帽と誤解してゐるらしいが、これは禮帽ではないから正式の禮服には用ふべきでない。本來和服に

しても紋付羽織袴の正裝に、帽子を被るとすれば絹帽でなければならぬが、和服には對照が取れないのと一つにはフロックなどの通常服に、山高帽を被つてゐるのを見て、フロックを半禮服と誤解したと同樣、山高帽をも略式禮帽と誤解して用ひたのが習慣となつたものである。

背廣服は略服であるから中折、山高、鳥打、麥稈、ヘルメット、パナマ何んでも差支ないが、鳥打はその名の如く獵帽であるから、狩獵、旅行、郊外散歩などの他は用ひないのが適當で、實際で平素これを常用するのは勞働者か小店員位ゐである。また中折帽は背廣服專用といつてもいゝ位ゐで、通常服以上には被るべきでない。

パナマ帽は歐米において老人の用ひるものであるが、日本では價格の高い點から曲解し、紳士が用ひて平然としてゐる。若い人には輕快清新な麥稈帽の方が配合がよい。ヘルメットは主として熱帶地方で、日光を防遮するためのもので、登山、乘馬など夏期の白服や、霜降の旅裝または略裝などを着用の場合に限られ、その他の服裝には不適當のものである。

帽子は室外で被るものであるから、室内では脱するのが作法であるが、ホテルとかビルヂングその他の洋館の廊下、通路は屋内とはいへ室外であるから、當然帽子は被るべく、これを被らない者はそこの從業員と見て差支ない。

敬禮の際は右手で帽子を取り、内側をツボンの方に向け、輕く身體に觸るゝ程度が適當である。途上或ひは廊下などで長上に出會した際も、必らず脱帽すべきが作法であるが、あまり話しが長くなつて長上から着帽を勧められた場合は、遠慮せず輕く會釋して被る方がよい。殊更に遠慮してゐると、先方でもまた被る調にゆかず、却つて禮を失するものである。

エレベーターで自己が同伴以外の婦人と乘合せた際には、必らず脱帽するのが作法とされてゐるが、知人でない限り會釋するには及ばず、たゞ帽子を右手に取るだけでよい。尤もこれはホテル、クラブなどの場合をいふので、ビルヂングなどの事務所的建物のエレベーター内では、婦人が同乘しても脱帽するには及ばない。それは事務所に來る婦人は大抵女事務員であつて、假令その中に顧のレディがゐても、それを識別するのが困難なため、ビルヂングに來た婦人は、みな女事務員と看做して、淑女に對する敬意を省くのである。絹帽に限り脱帽して膝の上に置くときには、必らず内側を仰向けにするのを忘れてはならぬ。

第十三節　ネクタイ

燕尾服に限つては特に白色蝶形のネクタイを用ひるが、この白蝶形ネクタイは燕尾服以外には絶對に用ふべきものでなく、且つ使用は一回限りで新品と取替ふべきである。地質は麻製が正式である。またタキシードには黒の蝶形が正式である。

フロックやモーニングは通常服であるから、黒の蝶形でなくとも還式とされないが、元來シングル・カラーには蝶形の方が作法上無難であり、且つ色彩上黒が一番上品であるから、シングル・カラーをつけたときにはこれを選むのが適當であらう。

葬式や追悼會などにフロックを着する場合は、黒蝶形が正式であるが、黒色のネクタイであるならば、ダビーとても敢て違式と咎めるほどのこともない。背廣服におけるネクタイは各自の任意であるから、自己の好みに從つて差支ないが、あまりケバ〳〵しいのは下品である。米國人は派手好で色彩のパッとしたのや、種々の模樣あるネクタイを用ふるが、歐洲では一般に地味で、色彩も目立ないものが多く用ひられてゐる。

ネクタイ・ピンについていふと、これを蝶形ネクタイに用ふべきでないに拘らず、無知か無頓着か、日本人は蝶形でも、ダビーでもお構ひなしに挿してゐる。ネクタイピンは蝶形ネクタイに挿すべきでなく、從つて禮裝などには忘れても用ふべきでない。その他は何のネクタイによらず、これを挿すも挿さぬも當人の勝手次第である。

第十四節　釦のかけ方

燕尾服やタキシードにおける上衣の釦は、これを掛けないのが正しいが、フロックやモーニングはかける方が正しい。但し臨機應變であまり儀式張らない場所ならば、掛けないでも差支はない。

背廣服は略服であるから、釦は掛けても掛けなくとも隨意であるが、目上の人に接するときや先方に敬意を表する場合などには、釦を掛ける方が禮である。尚ほ制服の場合は背廣でも詰襟でも釦は掛けねばならぬ。

釦は燕尾服以外定まつた方則はないが、ワイシャツの胸釦だけは燕尾服着用の際を除いて、その他は金釦にするのが不文律となつてゐる。燕尾服に於ける釦は白か正式で、以前は瀉戸物の白艶消を用ひ、一回毎に新品と取替へる習慣があつたが、現今では貝の釦が流行し、それも次第に贅澤になつて、ダイヤモ

ンドを挿入したり、白金や金で鈕の周圍を飾つたりするやうになつて來たので、一々これを新品と取替へるなどは、成金氣分の横溢してゐる米國でも見受けられない。カフスの鈕及びチョッキの鈕にも、現今は貝鈕が全盛である。燕尾服はいふまでもなく、他の服裝にも同質同型の鈕を選むのが作法である。

第十五節　シャツ及びズボン下

襯衣でも、ズボン下でも、直接肌に觸るゝものであるから、清潔を尊ぶ以上四季を通じて白にして洗濯を怠つてはならぬ。略服ならば薄色ぐらゐは差支ないが、毛絲製やネル地の黑ずんだものは、勞働者以外に着用すべきものでないとされてゐる。言ふ迄もなく襯衣の袖口が、カフスからはみ出してゐるなどは洋服着用上の禁物である。

西洋ではズボン下を穿くので猿股は用ひないが、水泳のときまたは花柳病に罹つたときはこれを用ひるのが慣習である。然かし元來が人の眼に觸るゝものでないから、ズボン下を用ひたとて、更に猿股を用ひてならぬ譯でなく、潔癖な日本人として猿股を穿くことは、咎むるどころでなく寧ろ奬勵してよい位ゐであるが、外國へ行つたとき何の氣も付かず猿股を洗濯に出さうものなら、花柳病患者と間違へられる虞れがある。

第十六節　靴と靴下

燕尾服またはタキンードの禮裝には、ディンナー・シュース（夜會靴）といつて、エナメル皮の短靴に黑リボンの飾りのあるのが正式である。然かしエナメル皮の短靴であれば鈕止でも差支ない。フロック、モーニングの通常服には、黑の短靴であれば差支なく、日本では編上や深ゴムを用ひる者が多いが、深ゴムなる靴は西洋では百姓專用のものである。

背廣服にはどんな靴でも差支ないが、略服だからディンナーシュースだけは不釣合であり、また紺の三つ揃ひで臨時半禮服の代用をなすときは、矢張り赤皮の靴は遠慮すべく、短靴にもせよ、編上にせよ、黑色を選むべきである。白靴は白のズボンと共に夏期の戸外運動か、避暑地以外には用ひぬものとされて居り、禮儀作法のあまり八釜しくない米國ですら、市内の往來ではこれを用ひないやうである。靴は常に清く美しくすべく、高價な靴でも汚れてゐては何にもならない。

オーバー・シュースは雨天の泥除であるから、これを穿いたまゝ室内に通るのは無作法である。尤も日本家屋なら靴ごと脱いでしまふからこの心配はないが、外國人を訪問したり、ホテルなどへ出かけるときは注意が肝腎である。また日本では、編上の靴紐を踵の上部に一とまきして結ぶ人を見受けるが、あれは旅行の道中ならいざ知らず、市中を歩るくには不恰好であるから一定の長さに結下ぐべきである。

靴下は通常服以上は黑が一番適當で、禮服着用の際は黑の絹製に限られてゐる。略服のときは各任意であるが、調和の點からいへば靴と同色を選むべく、假令同色でないまでも似寄りの色を用ふるのが無難である。色變りの靴下は野卑に見えて紳士の用ふべきものでない。刺繍を施したものや、青、赤などの派手なものは、婦人專用の靴下である。西洋人は靴を脱いで靴下を見られるのを非常に嫌ふ習慣があるが、これは日本人と異つて室内にゐても、靴下を脱ぐ場合は寒氣に上るときより他にないので、絶對に人に見すべきでないとされてゐる習慣からである。從つて上部さへ清足であれば、爪先や踵は少々ぐらゐ切れてゐても平氣である。靴下からは悪臭を發するから、寢るとき以外は靴を脱がない。これを心得てゐないと、親切にスリッパーを出して、却つて先方に迷惑をかけるやうなことにもなるのである。ズボンと靴との間の足首のところに用ふるスパッツは、牛ゲートルのやうな羅紗の脚絆が最初佛國から流行し始め、今では歐米に相應流行してゐるが、これは短靴に砂などの入るのを防ぐためで、旅行または海岸散歩のときに用ひ、通常服以上に着用するのは邊式である。

第十七節　手袋

手袋は何んの服にも用ひるが、取り分け禮服に手袋をはめてゐないのは甚しき無作法である。

燕尾服には白革製、タキシードには白または灰鼠の革製を用ひ、フロックやモーニングには鼠または茶の革製を用ひるのが歐洲の慣例になつてゐるが、葬送その他の凶事には黑が用ひられる。背廣服には白の他は何色でも差支ないが、服の色より淡くするのが原則である。

夜會及び舞踏會のときには男子は必らず燕尾服に、白手袋をはめてゐなければならないが、休憩のときとか、見物をしてゐる場合は、手袋を脱いで左手に持つてゐても差支ない。握手の際は左手はそのまゝにし、右手だけ手袋を脱してすればよい。

第十八節　ハンカチーフ

ハンカチーフは必らず純白なものを用ひ、地質は麻または半麻が多い。絹製または模様入りは女子専用のものであるが、燕尾服着用のときは男子でも純白の絹製を用ふることもある。色物は婦女でもあまり濃い色のものは下品として、これを持つことを憚かるぐらゐであるから、男子がこれを用ひるのは自から人格の劣等を告白する醜態である。ハンカチーフの形狀は成るべく小さく薄いのが喜ばれ、厚く大きいのは労働者の用ふべきものとされてゐる。

ハンカチーフは上衣の胸部のポケットに入れ置くべきであるが、汚れたハンカチトフはズボンのポケットに仕舞ひ込み、人目に觸れぬやうにせねばならぬ。

第十九節　男子の禮服

以上述べ來つたところに基き左に男子の禮服を表示しやう。

名稱	通常禮服	通常禮服略式	通常服（フロックコート）	通常服（モーニングコート）	通常服略式（社交背廣）
帽子	大禮服、文官、武官、大禮服、正裝 燕形　前立付	通常禮服（燕尾服） 絹高帽	通常禮服（タキシード） 絹高帽	絹高帽、山高、中折 黑羅紗	絹高帽、山高、中折 黑羅紗
衣	公定式の通り	黑羅紗	黑羅紗	黑羅紗	黑羅紗
ズボン	同上	衣と同一	衣と同一	衣と同一又は白	衣と同一
チョッキ	同上	衣と同一又は白	衣と同一又は白	衣と同一又は白	衣と同一
シャツ	堅胸式、白無地 白組揷釦	堅胸式、白無地 白組揷釦	襞胸式、白無地 白組揷釦	堅胸式、白無地 釦隨意	襞胸式、白無地 釦隨意
カラ	シングル白色	シングル、立襟 白色	シングル、折襟 白色	シングル、立襟 白色	シングル、折襟 白色
ネクタイ	白色	白色	黑蝶形	色合形狀共隨意	色合形狀共隨意
手袋	白革	白リンネル（内） 白革（外）	白絹（内） 白革（外）	鼠革、茶革、褒 の時は黑	鼠革、茶革、褒 の時は黑

名稱	通常禮服略式	通常服（フロックコート）	通常服（モーニングコート）	通常服略式（社交背廣）
帶劍	公定式の通り喪の時は黑紗で柄を包む			
靴	總エナメル黑短靴	夜會靴、總エナメル黑短靴	夜會靴、總エナメル黑短靴	總エナメル黑横釦止エナメル付黑短靴、深ゴム
外套	マントー及びインバネス	マントー、インバネス、黑色の外套	マントー、インバネス、黑色の外套	エナメル付黑短靴深ゴム
適宜				エナメル付黑短靴深ゴム
適宜				

以上の如く通常禮服の一通りを眞へることは、我國においては一般的には困難であるので、文部省内生活改善中央會では禮服の標準を如の如く簡易化してゐる。

男子禮裝　洋服の場合には無地背廣、モーニングコート或ひはフロックコートを用ひ、凶事のときには喪章を附けること、裙飾りには凶事には黑色を用ひること、帽子は吉凶とも山高または中折とし、夏時は麥藁帽などを用ひてもよい。靴は吉凶共に黑を用ひること。

第廿節　婦人の洋裝

婦人の洋服は男子よりも種類が多い。一寸例を擧げてもイヴニングトイレット（夜會服の總稱）、ウキシッチング・ドレッス（訪問服）、ウオーク・ドレッス（仕事服）などの大別があり、各國の慣習によつて種々の型に細別されてゐる。然かも夜會服の禮裝には必らず絹靴を穿くのが式であるとか、ウイジッチング・ドレッスにはボンネットを被るのが原則であるとか、各服裝によつて作法がある。然かるに多くの日本の婦人は、それを一切お構ひなしで、洋服でありさへすればよいといつた無構にガールス・エンパイア・ドレッス（女子用洋服）を大人が着たり、イクエストリアン（乘馬用スカート）を訪問服につけたりして濟ましてゐるのは、浴衣の上に丈帶を締めるが如き滑稽である。儀禮を重んずるのは文明國人の作法である。日本の婦人には日本の婦人に似合ふ和服があるのだが、時代の流行として日本においても、婦人の洋裝が年々向上しつゝあるから、左に

一般禮服の標準を表記しやう。

名稱	用途	形狀	地質	色
イブニングドレス 正裝夜會服	大體日沒時刻以後の時間に用ふ、夜の招宴、觀劇、ダンス	袖なし 首開、後開大 裾は足首まであるひは長く引く	絹ジョーゼット、タフタ、サテイン、クレープデシン、シフオンの類 ベルベット、レース オーガンディー、ブロッケード	黑、白、淡クリーム、ピンク、コーラル（珊瑚色）等、色は自由であるが無地物が正式、場合により「ビーズ」や刺繍で飾る
セミイブニングドレス、略式夜會服	正裝の時よりもやゝ氣輕な時に用ふ、家庭の晩餐に親しい人を招く時、一寸とした、ダンスパーティ、芝居、音樂會に行くとき、ホテルの夕食など	袖はなくてもあつても可、但し袖のある場合はケープ式、バフ等の變り形の裝飾的のものを可とす前開はゆるやかに袷なし裾は足首まで	ジョーゼット、サテイン、クレプデシン、ベルット、レースなど	白等よりも黑や無地物、プリントジョゼット
アフタヌーンドレス 午後の服裝正式	園遊會、正式のお茶、午餐會、テイーダンス、簡單な夜の招待、觀劇	夏は短い、袖の時もあるが、その他は大抵手首まで、背開なし前開割に大きく袷を附ける時は派手なもの、裾は足首より短かく	サテイン、クレプデシンにレースをあしらひたるもの等、その他夏はジョーゼット、冬はベルベット	無地、プリント共に可である
アフタヌーンドレス 午後の服裝普通	午後のお茶、午餐、訪問、晝の觀劇、音樂會、買物	袖その他は手首まで袷あき、袷自由 裾は正式のものよりやゝ短かめ	同上	色も地味なものが多く黑、茶が用ひられる
アフタヌーンドレス 午後の服裝略式	內輪の晝食、お茶、訪問、買物事務ごと、旅行用	袖同上 前あき自由であるが割に詰つたもの、袷も裝飾的のものでない丈もやゝ短かめ	同上 また薄いウール、革、エナメルのベルトも可なり	任意
コスチューム（スート） 通常服	買物、事務、訪問、散歩、旅行 家庭着	上衣とスカートと共布で別々に作りブラウスをあはせ用ふ スリービースのもの	毛、絹、木綿、麻	アンサンブルまたはコントラストの配色

附屬品	靴下	靴	手袋	帽子	外套
手提、小さくごく派手なものを用ふ、金銀の鎖物、ブロッケード、ビース、指輪、頸飾り、腕輪を用ふ	絹の薄地の淡色のもの	服と同色の絹布張りのもの、金銀色のもの（地は皮の場合もある）金、銀ならどの服にでも用ひられる、踵極めて高く甲の止皮はないか極く細いものを用ふ	長いのを用ふ、白ならどの服にでも可、色物黑なと、光澤のない革製	なし、帽子を被らない代りに髮は派手に複雜に結び寶石のある髮飾りを用ふ	大體白色の上等の毛皮を用ふ（ファーコート）ビロード、ブロッケードに毛皮の袷、レース、ジョーゼットのハーフコートが正式であるが派手な刺繍のある大形ショールも用ふ
同上	絹の薄手のもの	同上 または黑のエナメル	同上、色は黑か白が普通	なし	同上 毛皮附のラシヤも可ビロードのハーフコート
同上	絹	革製のハイヒール	革製の短かいもので外套または服と配合よきもの	有、外套または服と同地質のものまたは配合よきもの	ラシヤ地に毛皮の袷の絹も可、ロングコート
任意	同上	同上	同上	同上	同上
任意	地味な濃目のもの	革製であれば踵は自由		同上 ベレーでも可	同上、または毛皮のないスポーティーのものも可である。雨降りにはレインコートでも可である。
任意	毛、絹、任意	任意		共布、フエルトその他自由	任意

第四章　裝身具

第一節　懐中時計

懐中時計には型に制限なく、片蓋であらうが兩蓋であらうが任意であるが、現今では片蓋流行で兩蓋は時代遅れの觀がある。型もあまり大きいのや厚いのは流行しない。

腕時計は歐米は勿論日本でも非常に流行してゐるが、これは元來婦人用であつたのが軍服、制服または外套着用の際一々上着の釦を外して時計を出す不便さを除くため、男子の間にも用ひられて來たのであるから、通常服以上に用ふるのは本來は無作法である。

懐中時計の鎖についても別に何等の制式はないが、燕尾服着用のときだけは鎖は用ひず、絹または革製のリボンを用ひ、タキシードの略礼服にも、本來は鎖を用ひないのが正式である。

第二節　指　環

指環は婦人專用の裝身具であるが、指環の起源を尋ねるときは、婦人專用のものゝみでなく、男子もまたこれを嵌めて一種の諸身用武器としたもので、西紀前既に希臘ではこれに毒藥を仕込み危急存亡の場合これを嚥んで、自分の最後を潔くしたこともある。これがだん〳〵變形して、その用途も武器から、裝飾用になり、婦人の裝身具になつたのである。男子として指環を嵌めて差支ないのは、婚約及び結婚の指環のみで、これは女子と同じく左手の藥指に嵌めるのである。

指輪の正しい嵌め方

婚約の指環はエンゲージ・リングといひ寶石入りが普通である。また結婚の指環はウェッディング・リングといひ、金の細い薄鉄形で繼目又は切れ目がなく、端なき終りなき物に限られてゐる。婦人の指環はこの二つを除いては任意であるが、左右の手にあまり澤山嵌めるのは下品である。殊に日本の婦人が平打の指環を嵌めてゐるのは、鎖のメタルに金貨をぶら下げてゐるのと同樣、下卑た嗜好である。最近日本でもバースト

ン（誕生石）を選擇することが流行して來たが、これは西洋で寶石十二種を選び、十二ヶ月に割當て、各異つた意味を附したもので、その起源は第十八世紀に波蘭に流行し始めたのが、歐米に普遍されたといはれてゐる。寶石及びその意味は各國により多少の相異があつて一定してゐないが、多く知られてゐるのは左の如くである。

一月　柘榴石（不撓、友情）
二月　紫水晶（誠實、平和）
三月　綠柱石（確乎、勇氣、）
四月　サフイヤ金剛石（貞操）
五月　エメラルド（愛、不折）
六月　鳩珠（長命）
七月　土耳古石（成功、不惑）
八月　赤瑪瑙（幸運、和樂）
九月　橄欖石（喜悅）
十月　綠柱石（幸福、安全）
十一月　トツパーズ（友情、忠節）
十二月　ルビー（愛、成功、名譽）

この外左の如く記した書もある。

一月　柘榴石（貞操、眞實）
二月　紫水晶（平和、誠實）
三月　血石、綠柱石（聰明、沈着）
四月　金剛石（清淨無垢）
五月　エメラルド（幸福）
六月　眞珠、月長石（健康、長壽）
七月　紅玉（情熱、純眞）
八月　紅瑪瑙、橄欖石（和合、愛情）
九月　青玉（德望、慈愛）
十月　電氣石（忍耐、克己、溫和）
十一月　黄玉（友情、和樂）
十二月　土耳古玉、瑠璃玉（不撓、不屈、沈勇）

是等の寶石は指環、ネクタイピン、カフスボタン、頸飾、腕輪などにも適用し、寶石商の宣傳で各國に流行するに至つたがこれを一々規則通りに用ふるとなると、今度は七曜の寶石、時間の寶石などとます〳〵細別され、恐らく何十種と寶石を用意してゐるものでなければ實行不可能となるであらう。

指環は婦人でも二個以上嵌めるのは卑しく、數多く嵌めるよりは、自己に適當した最良のもの一個を嵌める方が上品である。その嵌め方についても、處女がルビー入りを用ふるは戀人に對する熱情を表示するものであるとか、鳩珠入りの指環は既婚の婦人が夫に對して無二の眞心を表現するものであるとか、人差指に嵌めるのは未婚者は配偶者を物色中の意であるとか、小指に嵌めるのは一生結婚しない意であるとかいふが、これなどは作法といふものではなく一つの傳說で、隱裁上からいへば指環は、左右の藥指及び左の中指以外に嵌めるのは不釣合なのでかゝることを言ひ觸らしたものであらう。一般的には未婚の人は左手の藥指以外は何れに指してもよく、既婚者はこの反對に藥指にさすべきである。

第三節　寶石

寶石の持つ色と光にそゝられる神秘な感覺は、魅惑的な存在の一つである。ダイヤ、ルビー、サファイヤなど昔から珍重されてゐるものは勿論のこと、昔は上流の人々の間では見むきもされなかつた黑ダイヤ、ジルコンスなどもたとひ價は安くともダイヤ類とはまた別個な感じを有つものとして、近代人に愛好されて來たゝめに、近頃の寶石界は非常に複雜多種になつて來てゐる。

寶石は勿論天然石が主となるものであるが、裝飾用として使用される石は適當な硬度と、光澤と、色とを持ち、無傷なものほどよい。ダイヤ、ルビー、サファイヤ類はその冠たるものでこれらしかないといふことゝ共に、寶石界の首位を占めるものである。從つて隨分高價であるが、近代一般に使用されるものはそれらの天然石を科學的に分析し、天然石を材料の一部として作られるシンセティックスが殆んどである。人造石は硝子に着色したものであるため、科學的成分は隨分異なるが、シンセティックスの方は硬度、光澤などすべて天然石と同一で、只僅かに光りの屈折狀態が異るだけであるから、專門家でなければ鑑別は出來ないわけである。

次に、若い婦人や、知識的な人々の間に愛好されてゐるジルコン、黑ダイヤなどの安價な寶石は、ウラル山脈方面に多く發掘されるもので、比較的硬度が低いものである。是等はその時の氣分により、衣服によつて自由に調和し得る色を選ぶことが出來るのと、ダイヤ類に比して遙かに個性的な感じを抱かせるために使用されてゐる。

夏向は青味を帶びたサファイヤ、エメラルド、ヒスヰなどが使用され、冬向は暖かい感じのルビー、ガーネットなどが使用されるが、ダイヤ、眞珠はその季節を問はないものである。

金剛石は元來が夜會の寶石とされて居る。殿米にあつての盛裝は、大抵夜がその主なる機會でこの際金剛石を飾つて裝身具を用ふるのが慣例である。然かし日本ではさう歐米の定規通りには行くまいが、せめて盛裝以外はこの寶石を用ふるのは見合せるのがよからう。

近來は翡翠と珊瑚が流行して帶止、根掛、簪など日本式の裝身具に盛んに用ひられる。尤も珊瑚は昔から日本で用ひられたもので、我國は世界で有名な產地であるが、翡翠は支那から輸入されたものである。共に規則的に用ひる季節が定められてある譯ではないが、色の感じから珊瑚は所謂ウオームカラーで溫かい感じがし、翡翠はコールドカラーで寒い感じがするから、從つて珊瑚は冬によく翡翠は夏にふさはしい。他の寶石類も色の感じに留意して用ひられたいと思ふ。紅玉は處女にふさはしく、眞珠は既婚の婦人にふさはしいなどゝいふものから受ける感じをいつたものである。

第五章　衣服の着方

第一節　一般の心得

着物を着崩れせぬやうに着るには、第一に襦袢や着物の仕立方に注意し、殊に着崩れは襦袢は身體に合ふやうに仕立ることが肝要である。それには普通一尺六寸五分のゆきならば、着物は身巾八寸、袖巾八寸五分、襦袢の丈は身巾八寸五分、袖巾八寸にして、袖附を着物より五分ひかへて置くと、振もゆきもきちんと合ひ、恰好よくなる。

襟芯は半襟につける人が多いが、これは半襟よりも三寸ばかり長くし、伊達卷でしつかりと卷いてしまうと、姿勢が出來て着崩れすることはない。襟芯には襦子を三枚重ねて入れるのがよいが、襦子ばかりで三重でなくとも、襦子一枚に三河木綿を重ねてもよく、また晒木綿を重ねてもよい。襦子を芯に入れた襟つきは形のよいものである。

長襦袢は踵一杯に丈をはかつてそれだけに仕立て、長く仕立てゝ腰で端折るのは禁物である。長襦袢の後に細い紐などをつけて置く人もあるが、それだけではシッカリと止らぬから、紐はつけずにしなやかな伊達卷で抑へる方がよい。

着物はあまりかぶつて着ると見苦しい。仕立てるとき自然に肩のところで、後が落ちるやうに注意する。普通に丈の餘中で襟肩二寸五分にあけ、山の印も袖附の印もして、たゞ縫ふときに裏表とも二分五厘づゝの空縫で內揚をして置く。二分五厘づゝ結局五分だけ後ろの方が短くなるから、襟肩が五分だけ後ろにづつて、肩の形が自然によく見え、然かも丈ぎに後前にしたときも少しも故障がない。

帶は脊の低い人は、少し普通巾より巾を狹く仕立て、小ぢんまりと結ひ、脊の高い人はこれと反對にする。袖丈でも脊の高い人は、充分長くして置くと、脊の高いのが目立たぬし、脊の低い人は思ひ切つて詰めるのである。また肥つた人には竪縞がよいが、あまり派手なものは餘計に肥つて見えるものである。

着物を着るには先づ襦袢の襟を合せて伊達巻でまきつけ、次に着物をほどよく襟を抜き、端折を前よりも後を下げる心持で締める。この端折紐一つで帯を締め上げた形が善くも悪しくもなるから、出來るだけ固くしつかりと一つ結び、それをもう一つ輪にして結んでゐる中に締めたのが緩んで來るから、一結びしたならば、その儘右から持つて來たのは右へ、左から持つて來たのは左へ返して、ちよつと挾んで置くと決して緩まない。結ぶところは大抵前に持つて來るので緩みもするが、右左いづれでも腰骨の處へしつかり結べば決して緩むものではない。腰紐を結んだら端折のたぐまりを思ひ切つて下へ引き下す。成るべくは人の手を借り後をこき下してもらふと帯の落付がよくなる。帯揚の芯はあまりコッ〳〵したものでなく、程よい形のものを選び、帯揚の枕に脱脂綿などを芯に入れて、長さ三寸ばかり、太さ直徑一寸二三分位ゐの小枕をこしらへて脊中にあてがひ、脊負ひあげる時、この上に帯揚を載せるやうにすると、脊負揚がぴつたりと脊中についてづり落ちない。

第二節　二枚襲の着方

二枚襲は着方の手際によつて非常に恰好の良否が出來るが、恰好よく着るには、先づ長襦袢の半襟を成べく頸筋に巻きつけるやうに着、胸の加減で半襟をフックリと見せ、着物は二枚とも襟を同じ幅に折り、下着の褄先と上着の褄先とを揃へて出來るだけ密着させる。次に上前の身幅を身體に合せ、下前は褄先を上げ加減に着れば裾の返りの恰好がよくなる。さうして伊達巻で胸と胴の形を、身體に調和させるやうに巻きつけるのであるが、この場合抜衣紋の工合で、年齢や髪の結ひ方などの釣合を考慮しないと、品のよい形にはならない。以前は下着を上着の下から一分ほど出すのが流行したが、現時は二枚ともぴつたりと合せることが流行してゐる。

帯は身長に調和させて結目は成るべく小形にする。振袖は立矢の字の場合それが地厚の錦類であつたら、成るべくその儘芯を入れずに身長に合せて結んだ端が肩の先から少し見えるやうに掛け、それに合せて斜めに出し、扱帯はだらりと下げた二つの端の差を、四寸ばかりにすると恰好がよい。

第三節　長襦袢の着方

長襦袢の着こなし如何によつて、全體の恰好に大關係を及ぼすものである。長襦袢に襟をかけるに、襟よりも芯を二三寸長くすれば、襟芯の先端が伊達巻によつて固く抑へられるから襟が崩れない。襦袢の細紐ですべての恰好を取らうとすると、これは單に衣紋を作るので襟までは抑へられない。それで伊達巻で恰好を執ることになるが、あまり肥つた乳の大きい人は、長襦袢の上から五六尺のガーゼで、乳の邊りから身體に巻きつけると、恰好がよくなる。着者に腰紐をする際は、骨盤の上にかけて背後の方を、下げ勝ちに一廻りまはして骨盤の上で一結びし、更に兩端を逆に反して挾んで置くと動かぬ。また伊達巻をするに背後の紐を、端折の中へ兩方から引き込むやうにすれば態とらしくならぬものである。前の方は端折の前が勝らまないために、下前のを端折の上の方へ丁寧にたゝんで入れ、伊達巻を確かと締めると恰好がよいものである。

第四節　腰帯の締め方

腰帯をあまり上部に締めると胴の長さを短かく見せ、腰部以下のみがだらりとして全體の均整が取れない。地質は絹や縮緬などよりも、メリンスの方がよく締るものである。何れにしも端折りの下部に隠れるものであるから、すぐ弛みのくる絹よりメリンスを選んだ方がよいのである。

第五節　帯の締め方

帯を恰好よく結び上げるには、長襦袢の着付をしつかり拵へ着物全體の調節を正くして置かないと、いくら恰好よく結んだ帯でも、すぐ弛みが來て始末に困るものである。一般向きの大鼓結びの恰好は、上部の兩耳を下げて少し左の方に曲げ、舌もあまり長くなく小ぢんまりと結ぶ。上の兩耳を下げやうとするには、帯揚げを結ぶときに、兩手で兩耳を落すとわざ〳〵皺を寄せなくとも、ぴつたりと工合よく脊中について、淑かな恰好になる。

第六節　帯揚の結び方

帯の結び恰好は帯揚げの遣り方にこつがある。それには帯の輪になつてゐる二枚の下部の一枚の方を、少し蹈らせて帯揚げに當て、帯止めをかけの折れて三角になつた處にあてゝ止めると、決して崩れることはない。脊の低い人は成るべく幅の狭い帯を上部の方に小さく締め、袖附を少なくして、袖丈を成るべく小さくすると脊を高く見せる。肥つた人は絞縮の小細い着物を着ると、幾分か姿をよく見せるものである。

第七節　洋裝の仕方

洋裝は日本の婦人には適しないが、ぬ等のためその下着の順序を述ぶれば、先づ第一にコンビネーションを着、次にコルセットをつけて靴下を吊る。コルセットは體格の相違で下肢の短い日本婦人は、あまり堅く外人風に絞めつけると却つて恰好が惡いことを注意すべきである。その次にはブルーマスを穿いてそれからスリップを着、その上に上着を着る順序である。

第八節　洋裝の一般作法

歐米諸國の洋裝についてその一般作法を二三述べて參考に供して置く。但これは男女共通である。

一　午前中家に在るとき又は旅行するときは、日中の訪問着は着用せぬ習慣になつて居る。

一　二十一歳以上の姉妹間においては同じ服裝をすることを避ける習慣になつて居る。

一　午前中は光澤のある羊皮の手袋は用ない事になつてゐる。

一　若い女の服裝は淡泊なのを高尚とされてゐる。

一　他家を訪問して滯在する如き場合でも、男女とも他人の家では平常着に着換へぬことになつてゐる。

一　靈　食の時は男子は必ずフロックコートを着用する。

一　食事に招かれたときは、大暑中でも男子は外套を着用し、食堂に入る前に、別室に外套と帽子と手袋を置くことになつてゐる。

一　イブニングドレスは午前中には着用しない。また夕刻でも六時前の時刻には用ひない。

一　散歩服は男子はサックコートを着用し、日曜のピクニックなどにもサックコートがよいとされてゐる。

我國でも洋裝した女性が儀式に臨み、また神社佛閣に參拜の場合、帽子を被つたまゝでゐるのは、日本精神に反するものとして問題になつたが、昭和十三年五月の全國學務部長會議で、今後以上の場合の洋裝女性は、必らず脱帽することに決定した。また洋裝で日本座敷へ入る場合も、日本人としては脱帽するのが禮儀であり、坐るにしても西洋人を真似て、疊の上へ横坐りなどせず、正座すべきである。尚ほ洋裝で婦人が日本座敷へ通された場合は、タイトのスカートでは足が大きく見えて失禮になるから、寛やかなスカートでふわりと腰げるやうにすれば優美である。

第三編　訪問と禮儀作法

第一章　正しい訪問の仕方

第一節　服裝上の心得

人を訪問するときの服裝は禮服を着用することはいふまでもないが、公用、祝賀、婚姻、出生、弔問、または初對面の人を訪問する際は尚更である。

日本服についていへば、平素親しく往復してゐる内輪同士でも、羽織位は必らず着用すべく、略式にする場合にも他人を訪問するには、袴を着けて行く位の心懸は忘れてならぬ。「お前俺」の心易い間柄で自然からの粗野朴訥は、人情の至露を思はせる親しみもあるが、殊更服裝に無頓着の無作法を敢てする如きは、紳士たるべき者の道ではない。

洋服にしても燕尾服、絹帽に儀式張らないまでも、せめてタキシード、フロック、モーニングなどその場合によつて撰擇し、親密なる友人以外、背廣服は遠慮すべきである。況してチョッキなしの無作法や、ソフト・カラーの執務姿で他人を訪問するのは格別の場合を除き無禮といはねばならぬ。

訪問といつても頗る範圍が廣く、公事、私事、祝賀、弔慰等に從つて各作法があり、日本服でも洋服でも、その場合に適した正しき服裝をなすが當然の禮儀である。禮を省略すれば得て無作法となりやすいが、禮を鄭重にして笑はれるやうなことはない。

第二節　時間の厳守

人を訪問するには先づ第一に先方の都合を考へなければならぬ。突然のこゝと押かけて行つて面會などは、内輪同士や親友間とかの以外には通用すべきでない。正式には一應手紙なり電話なりで訪問の要旨を述べて、先方の都合のよい日時の返事を乞ひ、指定された日時は寸刻も違へてはならぬ。萬一指定された日時に出向くことの出來なかつた場合は、其間の餘裕があれば信書、信書が間に合はないときは電話、電報、使者などで違約を陳謝しなければならぬ。

一方訪問を受ける方でも、自分から指定した時刻には、何事を措いてもその人を待ち受けてゐなければならぬ。輕卒に約束し、又輕卒に違約するといふ如きは禮を無視したものである。

第三節　訪問六禁

早朝又は夜間の訪問　時間を指定されたときは問題外として、豫告なしの略式訪問に寝込を踏み込んだり、夜中門を叩いたりするのは、追返されても反駁の出來ない無禮である。

午前中の訪問　訪問は成るべく午前中になすべしなどゝ言はれてゐるが、これは現代向ではない。歐米では至急を要する時とか、時間を指定された時以外は、午前中の訪問は成るべく見合はせるのが作法とされてゐる。これは、午前中は誰しも事務が繁忙であり、又その能率を上げ得る時間であるから、突然の訪問にこの緊要時間を費さしめるのは禮でないからである。日本においても執務の樣式が歐化されて來た今日、繁忙な職務を有つた人を午前中に訪問するのは見合はせるのが作法であらう。尤も先方が別に時間を顧慮する必要のない、安逸な生活をしてゐる人ならばこの限りでない。〉

食事時間の訪問　これは東西を通じて禁物とされてゐる。歐米に於ける突然の訪問時間は、一時頃から三時までの間を撰ぶべしとあるのは、この食事時間に觸れないためである。

安息日の訪問　日曜、祭日等は訪問を差控へるのが禮である。安息日はまた家庭の娯樂日であるから、自分の用事で他人の娯樂時間を妨ぐるのは、餘りに心なしの無作法である。今日は日曜だから先方も暇であらうなどの憶測は、社交において慎むべきである。

名刺を持たぬ訪問　訪問には必らず名刺を携へて行かねばならぬ。平素親しく往來して家人とも懇意になつてゐるならば名刺を出す要もないが、初めての訪問などでは往々婢僕か、姓名の取次を誤ることもあり、また主人不在のときなど來客を失念して、主人に通じない場合もあるから、作法としてのみでなく必要上からも、名刺を用意して置かねばならぬ。

小兒や犬などを連れた訪問　子供を連れて他人を訪問するのは先方に迷惑をかけるのみでなく、肝腎の要用もこれがため果せない虞れがあるから差控へなければならぬ。尤も親戚間や内輪同士で、平素も子供同伴で往來してゐる間柄ならば別問題である。犬などを連れて行くのも禁物であり、また要もないのに友人などを矢鱈に同伴するのは、先方の迷惑となるものである。

第四節　慶弔時の訪問

慶賀の訪問には相當の禮服を着用し、出來る限り先方に面會して祝詞を述ぶべきであるが、弔慰の訪問は、强ひて面會を求めるのは失禮とされてゐるから、かゝる際は唯來意を告げ、名刺を置いて、引き取るべきである。

また他人から訪問を受けたときに、遠かに答禮の訪問をなすべく、殊に饗宴に招かれたときには、出席の如何に拘らず、數日内に謝辭を述べに行かねばならぬ。歐米の習慣として、病氣日舞、弔問、祝賀等の訪問を受けたときは、たゞ名刺だけを答禮として送つて置く風もあるが、正式としては矢張り答禮の訪問を行ふべきである。

第五節　取次に對する心得

人を訪問して取次に出た召使等に對し、殊大振つた態度や言葉遣ひをするのは、先方の感情を害するのみでなく、自己の人格をも傷けるものである。先づ他人を訪問するときには、玄關か又は入口で呼鈴を押すとか、聲をかけるとかして取次を乞はねばならぬ。案内なくして無暗に入り込んだり、裏口に廻つたりするのは非禮の極である。取次の者が出たときは、靜かに名刺を出して、來意を告げるのが順序である。

第六節　携帶品

他人を訪問するに當り、要用以外の携帶品を持ち込むのは無作法で、殊に公式の訪問や長上の訪問などには慎まねばならぬ。

帽子、杖、傘等については、日本と歐米とは家屋の構造も違ひ習慣も異つてゐるから一樣ではない。日本式では帽子、杖、傘などは同じく玄關に置くべく、座敷へ持ち運ぶのは失禮とされてゐるが、歐米では帽子、杖などの携帶品を玄關に置くのは、家人に手數をかけるものとしてこれを避け、自から携へて客室に進むのが通例である。自動車、俥などで他人を訪問したときは、携帶品は全部車上に殘して置くのが當然である。

第七節　履物の取扱ひ方

洋風の家屋では靴を脱ぐことがないから、別に履物に對する心配はないが、日本家屋では玄關に履物は脱がなければならぬ。その作法は先づ玄關に上るとき、下座の方から門口に向つて踏み揃へ、上座に向つて上ればよい。上るとき禮を同巻へると同時に、片足づゝ上ると手を下すまでもなく、自然と踏み揃

へらることが出來る。事は誠に些細のやうであるが、些細の事にもその人の平素が偲ばれて、作法正しい奥床しさを思はしめるものである。

第八節　接客の心得

來客には出來得る限り速かに面會し、相手の身分の如何に拘はらず能ふだけ鄭重に待遇するのが義務でもあり作法でもある。服裝もまた紊れてゐたらこれを正し、正式ならば羽織袴をつけて面會すべきであるが、改まつた來客でなければ袴だけは略してもよい。來客が自分より身分低く、服裝なども粗末であつたならば、成べくその人に肩身の狭い感じを與へないやう自分も美服を遠慮し、言葉遣ひなどにも注意せねばならぬ。以上は東西共通の心得であるが、洋服の場合は假へ背廣の略式にせよ、必らずチョッキは着すべく、正式の訪問を受けたとき、日上の客であつたらば、當然通常禮服以上に改むるが作法である。

第九節　來客に對する家人の心得

客の服裝または身分によつて、家人が待遇を差別するなどのことは、往々主人の關知せぬ不快な感じを客に與へるものである。取次人は如何なる客に對しても鄭重に應待し、客の姓名を聲ねてこれを主人に取次ぐべく、また度々訪問するお客に對しては、よくその姓名を記憶し置き、重ねて同じ人に姓名を問ふやうな無作法をしてはならない。且つまた主人が談客中は、日觸り耳觸りになる動作言語を慎み、客の批評をしたり、隙見したりするなどは絶對に慎まねばならぬ。家人の不作法は直ちに主人の無作法となり、思ひがけない感情の齟齬を來たし易いものであるから、平素からよく家人に訓戒して置くことが大切である。

客の携帶品については日本式ならば帽子、襟巻、外套などは直ちに帽子掛にかけるとか、床に置くとか、玄關で一々客の手から受取つて、これを人の踏まない場所に處置するのが作法であるが、洋式では訪問者の帽子、杖などを強ひて取るのは失禮で、客が任意に處置すべきものとされてゐるから、この差別をよく心得て置かねばならぬ。

履物は洋館ならば手數はないが、日本家屋では家人が正しく揃へて置かねばならぬ。若しこれを忘れて、主人が客を送り出し玄關に立つたとき、忙てゝ脱れた履物を揃へるやうなことは失禮千萬である。

第十節　來客の送迎

自分より身分の上な人、又は公式の訪問を受けた際は、直ちにこれを玄關まで出迎へるのが禮儀である、同輩の場合は客室又は應接室の戸口に迎へ、また自分より目下は室内にゐて待受

來客の案内の仕方

けるのは東西ともに變りない。客の辭るときは同輩までは玄關に送り出で、高貴長上の客または公式の客ならば門まで出て見送り、目下の者ならば一寸席を外して挨拶すればよい。歐米では室の扉を開けて客を送り出すのが常通で、玄關または門外まで送るのは、客の身分によつて臨時するのが通例となつてゐる。

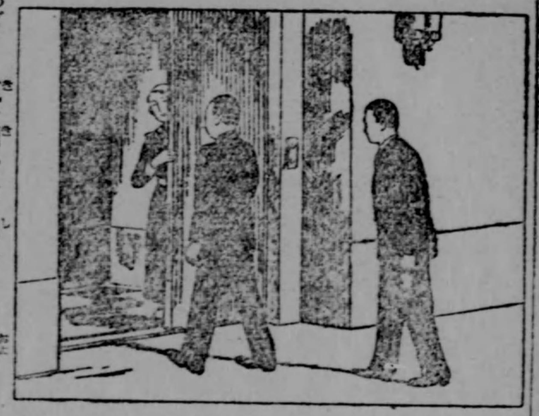
第二章　應接

第一節　應接室に於ける心得

在來の日本家屋では、特に應接室の設備なく、大抵は客間を兼用とする。尤も近來は生活上接客の必要が頻繁になつた結果、在來の日本家屋に洋風を加味した應接間を設けることが流行し、一々座敷へ招ずる煩ひを省き、簡單な要談は多く應接間で濟ますやう次第に現代化されてゐる。また洋服の客に對する便宜として卓子、机等を備付けることも一般に普及し、家屋新築の場合は勿論、改築修繕の際にも從來の一室を應接間に變更するやうになり、將來の家屋構造の一條件になりつゝあるから應接室の作法は現代人として、社交上是非知つて置くべき一つである。

第二節　扉の開閉

來訪者に對しては日本の家屋では、大抵主人主婦または女中等が案内するから、座敷の開閉は手を煩はさないで濟むが、洋館で案内者が導いてくれないときとか、室のみを教へて立去つ



扉の開閉の仕方

てしまふときなどは、自身その室の扉を開閉せねばならぬ。その場合扉を開けて室内に入つたならば、必らず扉は閉めねばならぬのは勿論であるが、若し以前から開放してあつた場合は、わざ〳〵氣を利かして閉めるには及ばないのである。

室への出入は沈着に靜謐に、足音や扉の音などを立てないやうに注意すべきはいふまでもない。

第三節　叩扉と應答

洋館にあつて案内人が扉を開けて導いてくれない場合は、必らず叩扉することを忘れてはならぬ。叩扉なしに室内へ闖入することは最も無作法で、萬一室内で主人が他客に親密の對談中であるとか、婦人客でもあつた際などは、取り返しのつかぬ失禮となるのである。

訪問者は叩扉するのが作法であると同時に、被訪問者は必らず叩扉に對する應答を怠つてはならぬ。訪問者を室内へ導くには自身が立つて扉を開けるか、或は「どうぞ」などゝ聲をかけることを忘れてはならぬ。

第四節　外套と上靴

外套は戸外で着るもので、これを室内まで着用するのは無作法千萬である。又上靴は雨天の泥除であるから、これをそのまゝ穿いてゐるのも無禮である。先づ外套についていへば、案内を乞ふときこれを脱ぐのが作法であるから、ホテル、事務所等を訪問の際には、館内に入るとゝもに、豫め外套の釦をはづし置き、室前に至つてこれを脱ぐのが原米の例となつて居る。

傘なども室内へ持つて入るのは禁物であるが、ビルディングなどの場合は、止むなくこれを室内の片隅にでも置き、上靴も其處へ脱ぐべきである。

第五節　着席前後の作法

先づ自己の姓名を名乘ること　訪問者は先に名刺を差出して懇いた場合も、面接したら再び明確に姓名を告げるのが作法である。同時に被訪問者も必らず自己の姓名を告げなければならぬ。食堂などでこれを忘れると、これが重役であるか給仕であるか、事務員であるかゞわからない。また家庭の場合、これが妻君であるか、妻君の妹であるか、召使であるかわからぬから、來訪者は挨拶にまごつくのである。

挨拶前の着席は禁物　日本式なら着席して挨拶すべきであるが應接室の椅子に向つたときには、必らず挨拶と握手（日本人同士なら握手は略す）を済ませてから着席すべきである。

男女同席の場合の挨拶　日本の習慣では先づ主人に挨拶し、次に主婦、家人に及び、若し席上に先客があらば最後に一禮すべきである。來客が多人數のときは、一々禮をするには及ばず、輕く一同に默禮すればよい。

指定の椅子以外に着席せぬこと　主人から勧められて始めて着席すべく、自分勝手に都合のよい椅子を引き寄せて腰を下すなどは、紳士としてなすまじき無作法である。なほ椅子は主人なり主婦なりの指定したものに着かねばならぬ。こんなとき辭退は禁物であるから會釋して席につくのが作法である。

繪畫、調度品などを見廻さぬこと　席上に置かれた調度品などをじろ〳〵と見廻すことは着席前も同様の無作法であるが、先客の顔まで一と渡り見廻す人がある。かうなると無作法を通り越して甚しき無禮である。

椅子のすゝめ方

婦人には席を讓ること　應接室内のみならず、如何なる場合でも、自分に椅子をすゝめられたにもせよ、同室に婦人がゐたらば、先づ婦人にこれを讓るべきである。

贈品は辭退せぬこと　自分のために出された贈品は、先方

の厚意の表現であるから辭退するのは却つて失禮である。熱いものなら冷めぬ中に味ひ、冷たいものなら暖かくならぬ中に味ふのが一般の作法である。要もない遠慮を重ねて、折角好意の茶を冷ましてしまつたり、アイスクリームを溶かしてしまつたりするのは、莫迦遠慮といふもので非禮である。日本の婦人は物を出しても容易に手をつけぬ風があるが、それでは嫌ひなのかと思ふと、唾を呑んで遠慮してゐるやうなのがある。

歐米の作法では來客用煙草の出てゐる場合、わざ〳〵自己の煙草を取り出して吸ふのは、主人の厚意に背く非禮とされてゐる。日本ではまだそれほどでもないが、先方からすゝめられた際、これを遠慮して自分のを喫ふなどは、なすまじき非禮である。

正しく着席すること　挨拶が濟んで後着席するに當り、主客何れよりするも差支ないが、姿勢は正しくするのが第一の條件で、落すやうに腰を下したり、放り出すやうに腰掛けたり、足を組んだりするのは禮でない。安樂椅子たりとも應接の際は、身體を横たへてはならぬ。

爐煙等を獨占せぬこと　席上の物を自分で獨占するのはよろしくない。たとへば冬ならば自分が寒むければ他人もまた寒いのであるから、椅子を勝手に引きよせて爐煙などを獨占するなどは許すべからざる無禮である。

對手の身體に手を觸れぬこと　對手の注意を喚起せんため、肩を押へ、肱をつくなどの無作法をするものもあるが、これは野卑な動作として、紳士の避くべきことである。

絶えず時計を見ないこと　應接室に於てのみならず、客を招きたるときにも、その客の前で、屢々時計を見たり「おや、もうこんな時間かな」など、獨語して見たりするのは、客に對して「お暇りなさい」といふのと同樣で、不快の念を抱かしめるものである。

長居せぬこと　人を訪問して要談をへたならば、直ちに辭去すべきである。況して他に來客があつた場合や主人が多忙の場合などに、いつまでも椅子に腰を据ゑられてゐるのは甚だしい迷惑さである。

度々席を立たぬこと　客と對話中自分は他用に赴いたり、又はたび〳〵席をはづして忙しさうに落ちつかぬは甚だしい非禮である。

以上は東西共通の心得であるが、特に外人に應接するときの心得を左に摘記する。

婦人に先立つて出入せぬこと　日本では女は男に先立つものでないとされてゐる習慣から、讓つてもすゝめても婦人の方で遠慮する場合が多い。其際止むを得なければ速く會釋し、先に立つて室に出入しても差支ないが、外國婦人に對しては、何處までも婦人を尊重して男子は後に隨ふべきものである。これは女尊男卑といふ意味でなく、弱者たる女をいたはる紳士としての作法とされてゐる。隨つて着席の際も婦人に先立つて腰を下してはならぬ。また樂應品を出された場合にも、婦人が手に取つた後にすべきが作法である。

婦人より誘はれたる場合　應接についてのみでなく、如何なる場合にあつても婦人からダンス、撞球、觀劇などに誘はれた際は、これを謝絶するのは先方の名譽を毀損することになつて無禮である。萬一止むなき要用又は先約などがあつたならば、同伴出來ない遺憾さを陳謝して事情を述べ、更に他日その緩會を懇願すべきである。歐米で婦人が男子に同行を誘ふのは、親密な友情の表示であり、男子としてはこの上もない誇りとされてゐるから、出來る限り婦人の求めに應じなければならぬ。

第六節　握手の作法

日本人同士であれば、外人の真似をして握手する必要もないが、對手が西洋人である場合、相識の間柄であれば尚更、假令その場で紹介されて初めて顏を合せた人に對しても、握手するのが禮であるから、茲にその作法を摘記して置く。

必ず右手ですること　握手するには先方の右手を握り、輕く一二回上下に振つてから離すのである。尤も右手に負傷などがある場合は、對手方の宥恕を乞ふて左手で握手して差支はない。

堅く握らぬこと　力の無い冷淡

握手の仕方

なのはいけないが、餘り力一杯握り締めるのも失禮である。殊に對手が婦人だとそんな無作法をしてはならぬ。又餘り大きく振るのも非禮である。

手套を着けてゐる時　男同士または女同士で双方とも手套を用ひてゐるときは、屋外は勿論室内でもお互のことだから、手套は脱るに及ばないが、對手方が手套を脱つてゐれば、礼儀へ屋外でもこれを脱らねばならぬ。急の場合で脱つてゐる暇がなかつたなら、一寸對手方に宥恕を乞ふてそのまゝでもよい。

必ず上席者から行ふ　握手は先づ主婦から始め、次で婦人、主人といつたやうに上席者から先に手を出すべきもので、下位のものからこれを求めてはならぬ。

婦人に求めぬこと　婦人に對しては、自分が餘程地位が高い場合は格別、其他にあつては男子から握手を誘つてはならぬ。これは醜笑婦を遇すると同じ無禮である。

婦人の求めは拒絶せぬこと　婦人から握手を求められてこれに應じないのは、對手を侮辱する非禮であるから、婦人が手を出したら、喜んでこれを受けねばならぬ。

婦人は禮裝の場合は、食時以外には手套を離さぬものとなつてゐるから、其際は對手方が手套を脱ると否とにかゝはらず、こちらも手套を着けたまゝで差支ないのである。

着席後は差拉へること　握手は必らず着席前になすべきで、着席後暇を下したまゝでこれをなすのは、甚しき非禮とされてゐる。

一同に求めぬこと　握手は主婦及び主人に對してのみ行ひ、他の同席者に對しては、主婦や主人が紹介してくれた場合は格別、さもないとき室内で、他の來客に一々これを行ふ必要はない。たゞ輕く會釋さへすればよいのである。

第七節　人に接する一般の心得

容姿を整へること　人に接するに服裝を素してゐたり、髭を伸してゐたり、其他見苦しい姿態をなすのは、自己の體面ばかりを損するのみでなく、客に對してもまた失禮である。高價な美服を纏ひ、化粧せよといふのではないが、禮に適ひ、作法を守つた服裝ならば、それが木綿物であらうと古洋服であらうと差支ないのである。身分不相應な虚飾よりは、自分に相應した質素な正裝の方が遥かに奥床しいことを忘れてはならぬ。

わざと豪傑風を衒ひ、好んで粗野な風采をなして喜ぶ若者があるが、これは時代を知らぬ愚さである。古風な豪傑を氣取り、服裝などは一切無頓着な者にして、よしや手脚あり素養あるにもせよ、これを活用するには、廣い社會に求めなければならぬ。垢面蓬髪、敝衣短袴といふ如きは、時代錯誤の甚しきもので、附燒刃の豪傑風は何處へ行つても支障ひを喰ふであらう。他人に接するに容姿を正しくするのは、社交界に立つ第一の條件である。

動作と挙動　容姿は正しく整へても、これに魂が入つて居らぬと、所謂沐猴にして冠するもので、いくら燕尾服や絹帽の禮裝でも、人前で鼻糞の丸薬製造などをしては、忽ち愛憎を盡かされる。蠅取りデーや蚊や蚤の撲滅が公衆衛生に必要であると同時に、こんな不潔不快な無作法もまた社交衛生から絶滅すべきである。人の面前で鼻をかむだり、吃逆、欠伸、嚏などをすることもお座のさめることである。

他人に對する態度　他人に對する態度は何處までも親しみがなくてはならぬ。然し餘り狎々しくするのは慎しむべきで、却つて野卑な感じをいだかしめる。「親しみやすく狎れ難し」といふことが格守すべき態度の標準である。

また動作はあくまで沈着でなければならぬ。そは〳〵と落着かなかつたり、始終手を動かしたりすることは勿論、頭髪をかき、頭をなで、扇子をパチ付かせたり、火箸で灰をかきならしたりする癖なども、頗る恰好のよくないものである。

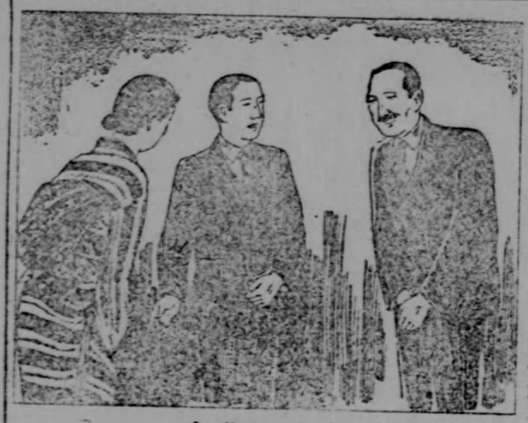
言語を謹むこと　注意すべきは口の締りで、夏座敷のやうに開つ放しは、腹の底まで見えすかされて餘りにだらしなさ過ぎる。さればといつて節季時他出するやうに、何處から何處まで堅く錠を下し、出入禁止の貼札をするやうな態度もまた親しみがない。言葉寡くして含味を多くする。一寸気かしい註文であるが、人に接しては倦かず親しみを續けさせる態度が必要である。

顔面表情　笑つたり怒つたり、目じりが上つたり下つたりする顔面表情を、憤みもなく暴露するのも甚だ見苦しい。心平靜にして動ずることなければ、泰山崩るゝとも恐るゝに足らずといふ落着いた表情が欲しい。然し作り付の人形のやうに無關心の態度は温味がないから、矢張り人の笑ふべきところは笑ひ、怒るべきところは怒り、驚くべきところは驚くの同情は必要である。

第八節　紹介に就ての心得

交友は人格の發露であるから、無責任に人を紹介するものではない。然るに日本人は紹介について、餘り自己の責任を感じてゐない傾きがある。自分で紹介して置きながら、その人の惡口をいつて平然として居る者もある。これなどは甚しい矛盾と言はねばならぬ。

人を紹介するには自分の交友として、恥かしからぬ人物であるとの自信がなくてはならぬ。自信がない位なら最初から紹介しない方がよい。自分の友人として他人に紹介した以上は、萬一その友人に何か不始末でもあつたならば、これを自己の不始末として陳謝するぐらゐの覺悟を持つてゐなければならぬ。輕卒に紹介し、輕卒にその責任を回避するなどは、紳士たる人格者ではない。



紹介の仕方

人を紹介する作法は、必らず下位の者を上長の人に紹介すべきである。握手は上長の人より手を出すことになつて居るが、紹介はその反對である。身分に飛び離れた懸隔がない以上男子を婦人に紹介すべきで、これも握手の場合と反對になつて居る。

なほ婦人によつて紹介されても握手を與へず、默禮のみで濟ます場合もあるが、これは非禮として咎め得べきでなく、婦人の任意で差支ないとされてゐる。

午餐會、晩餐會などで、主人や主婦が來客同士を紹介するには、食堂の開かない以前にするのが例である。尤も園遊會、アトホーム、夜會などで紹介された來賓同士は、それのみで確然たる社交關係が成立したといふ譯でなく、いはゞ來客接待上の一慣例とされて居るのであるから、其後相互が途中で出會した際、かねての知己の如くに應對するや否やは本人同士の隨意である。一度紹介されたのを幸ひ、殊更らゝ馴々しく接近するやうな態度をとると、何か野心でも抱いてゐるやうに誤解される場合もないとはいへぬから、そういふ點からいつてもこのことは注意すべきであらう。

第三章　名刺

第一節　名刺の由來

名刺は自己を表示するもので、無意義に濫用すべきものでない。名刺といへば歐米の習慣模倣のやうに思ふが、その歴史は却つて日本の方が古いのである。歐洲で現今のやうな名刺形式を作り出したのは、百五六十年前だといはれてゐるが、日本では既に、德川初期において盛んにこれを使用した。たゞ現今の如く印刷したのでなく、用紙を切つて自筆し、これを名札と稱した。

名刺は正式からいふとすべて自筆するのが本來であらうが、使用範圍が現在の如く廣汎になつてくると、到底一々これを書いてゐるわけには行かないから、略して印刷としたものである。

第二節　名刺の種類

名刺は公式又は業務上に用ふるものと、社交上に用ふるのとがある。公式または業務上に用ふるものには位官、職位または社名、職名等を肩書に附するのが例であるが、訪問贈答等に用ふる社交上の名刺には、一般にこれを附けないのが例とされてゐる。

日本人の姓名は、文字によつて男女の別が直觀し得られるから、殊更歐米のやうに冠稱を附する必要もなからうが、女子にあつて既婚者たることを表示しやうと思へば、何某妻と夫の姓名を、小さく肩書して自分の名のみを記せば間違ひない。

歐米にあつては以上の別を表示するため、男子ならば Mr 未婚の婦人ならば Miss 既婚の婦人ならば Mrs と冠稱を附するのが例で、これは訪問などに際して、男女の別を明らかにするためである。なほ既婚婦人は夫の姓名と併記する例もある。また年長の未婚婦人は單獨の名刺を使用するが、普通淑女は母親、母のないときは父親の姓名の下に、自分の名を併記するのが一般の例である。

男女とも名刺の紙質はあまり厚いのは野卑であるが、又餘り薄いのも好ましくない。何れかといへば、成るべく薄手の純白な用紙を選ぶべきで、大きさは日本ならば、男子は婦人より大きく、歐米式ならば、婦人は男子より大きいのが例である。住所は日本式ならば左下の隅、歐米式ならば左下の隅に住所、右

下の隅に都市の名を入れる。字體は明瞭にして華美ならざるものが宜しく、氣取つて草體などは却つて非禮でもある。

第三節　名刺の置き方受け方作法

男子の場合　先方が既婚者であれば、普通二枚の名刺を置く。これは一枚は主人に、一枚は主婦に宛てる意味で歐米の習慣である。招待を受けた場合は出席の有無に關せず、必らず一週間以内に答禮の訪問に行き、主人と主婦に一枚宛名刺を置くのが禮とされてゐる。親睦、新任披露などで訪問する場合も同樣である。日本式になると、先方の夫妻各別々に置くのは略し、一枚で濟ませてゐる。尤も自分が妻帶者で、夫婦共に饗宴招待を受けた場合には、自分の分と妻の分と一枚づゝ置いて來るのが正式である。

男子が名刺を置かぬ場合は、訪問先が未婚者である時に限るが此際男子は未婚既婚にかゝはらず、名刺を置くべきでない。集會などで紹介された未婚婦人に對しても、一切名刺を差出すのは控へなければならぬ。この歐米の禮は、日本人もまた遵守すべきであらう。

婦人の場合　既婚者にして、妻のみが單獨で訪問するときは、夫の名刺を先方の主人へ、自分の名刺を主婦へ置き、もし主婦が不在であらば、夫の名刺を主人と主婦あてに二枚、自分の名刺を主婦あてに一枚置くのが歐米の例である。自分のが夫妻連名の名刺ならば、夫の名刺を主人へ一枚、連名の名刺を主婦へ一枚置いて來るのが例である。また未婚者ならば先方の主婦あてに一枚置いてくればよい。すべて歐米の作法として未婚既婚を問はず、婦人は如何なる場合でも、自分の名刺を男子に置くべきでないとされてゐる。然かし日本では妻が夫をも代表して、答禮の訪問に赴く際には、夫妻各一枚づゝを先方に置くか、略して夫の名刺のみを出すのが

名刺の受け方

例である。

夫妻同伴の場合　先方の主人が不在の場合は、夫は先方の主人にのみ名刺を置き、主人在宅ならば、その必要はない。前述の如く男子の名刺は、決して淑女に出すべきでないから、妻と雖も夫の名刺を、先方の令嬢などに置いて來るのは違法であるが、それが令息であれば差支はない。

以上は答禮訪問についての名刺の用ひ方であるが、用談のため訪問する際は、訪問者も被訪問者も男子であつたら、取次に名刺を渡すべきは勿論であるが、たゞ被訪問者が婦人である場合に限り、取次者に口頭で訪問の目的と姓名を告げ、名刺は出さない方が正式であり、强ひて名刺を出すとすれば訪問要件を附記して面會の許可を仰ぐべきである。また訪問者が婦人で被訪問者が男子の場合は、訪問者たる婦人は口頭で、取次に姓名を告ぐればよいのである。

郵送の答禮の場合　親しく訪問を受けた場合は、自分もまた往訪して答禮すべきは論を俟たないが、先方から名刺のみを郵送し、または使者を以て屆けられた際は答禮を省いて、單に名刺を屆けるか郵送すればよいのである。

宛名を書く場合　通例名刺に被訪問者の宛名は附記するものでないが官衙、銀行、會社、ホテル、倶樂部、軍隊などで確實に、先方の人の手に入るや否やを危まれるやうな際には、和文ならば右の上部、歐文ならば左上部に、先方の氏名を附記して差支ない。

訪問目的を附記する場合　歐米では祝賀、訪問の名刺には、右方下端に祝賀の意味を歐文にて附記する。それは普通には、P.E. の佛語略字を用ひるが、これを和文にするならば右隅上部に記入すべきである。病氣見舞には下方に To inquire after と記し、和文ならば御見舞と右の上部に附記するのが例である。

また暇乞の名刺には下方右端に英文で附記するか P.P.C. の佛文略語を記し、和文ならば御暇乞と記入する。謝禮ならば同樣の R.P. 略語を用ひ、また和文ならば御禮の二字を記入する。この外紹介、弔問等の場合も、それ〴〵右に準じてその意味を附記するのが例である。

贈答品に添へる場合　使者をして進物を屆ける際、又はその返禮に品物を屆けるときは、必らず名刺を添へなければならぬが、本人自から持參するときはその必要はないのである。

名刺の折り方　自身が訪問したといふ表示に名刺を折るが、そ

の折り方は、普通右上部の隅を內側に折るのである。佛國では、以前自分より高位または長者に對しては、右の下隅を折り、同等または同等以下の人に對しては、上隅を折る習慣であつたが、近來は一樣に上隅を折るやうになつて居る。

第四章　對話

第一節　言葉遣ひ

言葉　言葉については昔から「禍は口より出づ、故に君子は言葉を愼む」とか、「言葉多きは品寡し」とか、「雄辯は銀、沈默は金」とか言つて多辯を戒めてゐる。言葉は人間唯一の意思表示であるから、輕々しく唇を動かすのは愼しむべきであるが、特に人間にのみ完全に與へられた機關を、利用せずに置くのもまた智慧のない話しである。況して時代の推移に伴つて、社交の必要はます〳〵多方面にわたつて來るから、生活上言葉を活用しなければならぬ機會が多くなつて來た。濫用は嚴戒すべきだが、活用も亦大に奬勵すべきことである。

明斷正確な言葉　大聲を張りあげるのは無作法であるが、餘り低聲で聽取るに苦しむ如き言葉もいけない。早口も困るが、牛の歩みのやうにのろ〳〵したのも物うく感ぜしめる。高低緩急を適度にし、明斷で正確な言葉を用ひねばならぬ。

言語の擇擇　言語は長上先輩には勿論、目下の者に對しても懇切にして、丁寧であるのが紳士淑女としての道である。然し「長幼序あり夫婦別あり」とある如く、身分階級を有するものであるから、自分を表示するに最も必要適切な言語を擇擇しなければならぬ。一概に丁寧であれと一樣に律する譯にも行かないのである。何れにしても對者と自己との意思交換に、最も適切なものを選まなければならぬ。

言語はすべて上品なるを尊ぶ　から、平素から文法に注意して、正しい言葉を用ひなくてはならぬ。發音は明快に、切るべき處で切らず、切るべからざる處で言葉を切つたりするのもよくない。

必要以外の言葉　俚言、比喩、警句などを用ひるときはよほど注意しないと、先方の感情を害するし、また野卑低級なものなどがあつては人格を落すことになる。無意味な感投詞を濫用して「フ、ン」「ハ、ア」「ヘ、ー」など纏綴するのは人聞きのよくないものである。

形容詞も注意して上品で、一般的なのを用ひねばならぬが、

あまり難かしい形容詞や各地方特有な形容詞は、對者に意味の通じないことがある。また最高とか最大とかの形容詞は濫發しない方がよい。これを濫用すると最高が最高でなくなり最大が最大でなくなつてしまふのである。專門語は對者によつて全然これを用ひてはならぬ。商談以外に商業用語を用ひたり、音樂趣味のないものに音樂の術語をつかつたり、運動家ならざるものに運動の專用語を使用したりするのは、取りやうによつて一種の侮蔑とも感じられる處れがある。對話は何處までも先方に對し充分自分の言はんと欲するところを理解させるだけの注意が肝腎である。

敬語　敬語は長上先輩には勿論、同輩間にも適當にこれを用ひるのが作法上の禮であるが、自然に流暢に用ひねばならぬ。あまり取つて付けたのは長上先輩に對して非禮であり、餘り濫發するのもまた阿諛に聞える。

必要もないのに漢語や、英語を混用するのも愼しむべき一つで、然かも對者にそれが通じない場合は、氣障を通り越した非禮となる。また我輩を振り廻はしたり、君・僕を濫用したりするなども、打ち解けた友人間以外には愼しむべきである。

第二節　對話二十禁

篤見　談話を交へながら四邊を見廻したり、他視や盜み見をするのは無作法千萬である。

話題の誤り　談話の目的要領をはづれてはならぬ。突拍子もない時分、突拍子もない話しをかつぎ出すなどは愼しむべきである。

執拗　談話は簡明に然かも言外餘情が裏床しいのである。たとへどんな要件にせよ、一つ事を幾度も繰返すなどは聞き苦しくて非禮である。

獨占　自分一人で喋舌り、對手に口を開けさせないのは大禁物である。

遮斷　他人の對話中傍から喙を容れるやうな無作法はなすまじきことで、萬一その必要があつた場合は、一應斷つてからしなければならぬ。

肩越し　談話は對者と向合つてなすべきで、肩越しに話しかけたり、談話を交へたりするのは非禮である。

世辭　世辭の範圍の廣狹がなか〳〵難かしい。要するに自分の意思を自然に流露したものならば世辭ではない。商人な

どには商人として客に對する必要な言葉もあるから、是等も一口に世辭といつてしまふのは苛酷である。心にもない阿諛追從の言葉こそ世辭で、これの濫用は下劣な品性を思はしめるものである。

贅言　話題に關係のない駄辯は慎しまなければならぬ。また話題に關係ある言葉でも、本題より冗長の方がくど〳〵しいのは聞き苦しい。

私事　他人の私事を暴いたり惡口をいふ者は、自分もまた他人から言はれてゐるものであつて、その人の品性を疑はしめる。この種の話は聞く方でも、成るべく直ぐに話題を他に轉ぜしめる機轉が必要である。

反逆　俚諺に「丸い玉子も切りやうで四角、物も言ひやうで角が立つ」とあるが、自己の主張に對しては飽くまで強くなくてはならぬ。

人には誰も主義主張があるから、これを是なりと確信したら、何處までもそれに邁進し、徒らに他人に追從し屈服し、他人任せといふのはよろしくない。

然かし自己の意見なり主張なりを、そのまゝ他人に受け入れてもらふことは困難である。身分により、地位により各異つた考へを持つてゐるから、それを一樣に律するのは不可能で、自己をあまり他人に强ひると、共鬼に爭ひも起ければ口論も生ずる。かういふ場合果して死生を賭して爭ふべきであるか、或ひは隱忍して時機を待つべきであるかを靜かに考察し勞して益なき場合は寧ろ隱るのがよい。自分の主張が果して事理に適してゐるや否やも充分省みずして、我意を徹さんとするのは、徒らに他人の感情を損れるに過ぎぬから、先づ自說を主張する前に他人の說を吟味し、時と場合と對者とに應じ、堂々反駁すべきは反駁し、默して忍ぶべきは忍び、さうして角を取つて丸くなすのが人格の修養である。阿諛追從や附和雷同は深くこれを慎まなければならぬと共に、無益の口論や、役にも立たぬ爭ひもこれを減ぜしなければならぬ。

愚鈍　愚鈍や泣言をならべて、何んの益する處があるかと言へば、利益どころか嘲笑されるぐらゐが落ちである。姑が嫁の愚鈍、奉公人の口から出る主人の愚知など、何れにしても碌なものはない。わざ〳〵人の知らない恥を明るみにかつぎ出し、後指差されるやうな貧慢は減しめなければならぬ。況して愚知は、聞く者に不快の念を抱かしめ、社交の上からも非禮であることを思はねばならぬ。

耳語　祕密の要談があれば場所を選び、對者以外何人にも洩れ聞かれないやうにせねばならぬ。人中でそつと耳打したり、密々話をするなどは決して紳士淑女の態度ではない。

嘲笑　どんな話をされても、また他人がしてゐても、侮蔑の態度を以て嘲笑してはならぬ。「泰山は土壤を擇ぜず」で、靜かにこれを耳に入れるだけの雅量を有してゐなければならぬ。

年齡　他人の年齡を尋ねることは、日本人同士でも感心出來ぬ無作法であるが、外人に對しては殊更の非禮である。「失禮ですが、おいくつで……」などいふが、失禮と知つてゐたなら聞かなければよい。然かもそれが餘程の必要でもあるかと思ふと、何の役にも立たぬ莫迦らしさで、失禮たるを自覺しながら聞くほどのものはないのである。

物品の價格　他人の持つてゐる物の値段を尋ねるのも前條と同じ非禮である。然かし必要があれば問題外で、社交上無用にして失禮な質問を差控へよといふのである。

容貌の批評　人の容貌の美醜を云々することは、殊に外人に對してはこの上もない失禮である。他人の容貌を話題にしなければならぬほど、話の種が拂底だとすれば、却つてその人の見識の淺薄さを笑ふの外はない。

氣轉　對話には機轉が必要である。これが交情を温める潤滑となるものであるから、西諺にも「機轉のないものは、常に他人に對する考へを慎重にして先にすべし、而して自己の事を後にせよ。然らば必らず機轉を利かす時機を見出し得るであらう」といつてゐる。

宗教政治等の問題　是等はやゝもすると議論になり易いものであるから、多人數の中でこの種の話題を提出するのは避けねばならぬ。それと同時に主人主婦は、客の一人がかゝる話しを持ち出した際は、成るべく話題を他に轉じさせる機轉が必要である。

その他對者の顏色を窺ひながら談話すること、下を向いたまゝで談話することなども慎むべきである。

第三節　忌み言葉

西洋にも東洋と同樣い〳〵ろな迷信を持つてゐる。金曜日の旅行や船出を忌みたり、十三の數を嫌つたり、一本の燐寸を三人で點火することを不吉の徵としたりする例は、數へられぬほど澤山ある。日本でも一般に嫌く忌言葉として嫌はれるものは

場合々々に注意して、先方の感情を害さぬやうにする位ゐの注意を持つのは、社交に於ける必要の一つであらう。

普通日本では婚儀の祝賀る、去ぬ、去る、出る、戻る、切るなどの言葉は忌まれる。歸るとか、去るとかの意には開くを用ひ。切る、取るなどの意には繋ぐを用ひる。例へば古來から儀禮の正しい家庭では、膳椀を切るとはいはずに、膳椀を繋ぐといつてゐる。何んでもないやうなことであるが、社交の上にはかゝることにまで注意する必要がある。

また開店、新築の祝儀に潰ぶれる、落ちる、下がる、摺るなどの言葉も忌まれ、葬送に「後を引く」なども同樣であるが、是等はその場席に臨んで注意すればよいので、何も平素から緣起を擔ぐには當らない。平素要もないのに是等の緣起言葉を濫用すると、却つて自己の品格を傷けるから、臨機應變の四字に注意すべきである。

第四節　外人と對話する場合

外人と對話する場合は、たとへ通譯があるときでも、談話は常に對手たる外人を見てしなければならぬ。またすべての場合食指で他人を指すのは、指彈排斥の意味とされ、中でも公衆の面前では絶對になすべきでない。歐米ではこのポイント・アウト（指さし）は、道の方向或ひは物品に對してのみ用ひるか、爭論の場合などに限つてやるので、間違つて日本式に何んの氣もつかず、婦人などを指さすやうなことをしては、非常な侮辱を與へたものとして激怒を買はねばならぬ。已むを得ざる事情があつて他人を指さうとするならば、拇指又は目、頤を用ひるのである。この洋式を氣取つて、反對に日本人を頤でやらうものなら、直ぐ怒られるから、これも對手によつて使ひ分けの注意が肝腎である。

第五章　一般作法

第一節　民衆に對する心得

携帶品の注意　大手を振つて大道を濶歩するのは、紳士淑女のなすべきことでないが、携帶品を振廻す如き無作法極まるものである。また杖や傘を水平に持つて、他人の通行を妨害するなども、公衆に對する無禮である。

喫煙　由來日本人は公衆に對しては頗る不行儀で、喫煙禁の電車内ですら、嚴禁の二字を紳士的に「御遠慮下さい」と敬意を拂つてやると、すぐ掲示を横目で睨みながら平然と喫煙を始める。況して列車内又は、多人數同室の場合でも掲示がないのを幸ひにして、他人の迷惑は一切お構なしに、煙草の煙を濛々と吹き付ける。是非とも喫煙するならば、せめては隣席の人には會釋位して、遠慮勝ちに喫煙するのが紳士として當然守るべき作法であらう。

道路の清潔　或る米人が「日本の東京には田が澤山ある」と冷評したが、雨降り揚句の泥濘を見ると、まさに田植ゑでもやりたくなるに相違ない。又こんな面白いこともいつてゐる。「東京に住めば居ながら世界一周が出來る。即ち車に乘つて市中を疾驅すると、横動と縱動とが正に九十度を超えなんとする危險さは、丁度印度洋で颶風に襲はれたに似てゐるし、突つ風の吹きすさむ日、黄塵濛々咫尺を辨ぜざる有樣は、恰かも亞弗利加の沙漠を横斷するに髣髴してゐる」と。

設備の不完なのは已むを得ぬとしても、それ以上日本人は道路を大切にしない。塵芥があれば拾ひ取るどころか、却つて往來に掃き出して平氣である。通行する者も紙屑を捨てたり、痰唾を吐いたり、往來を塵芥箱と間違へてゐる人が少なくない。道路は文化を表示する血管であるから、これを大切にし、清潔にすることが大切である。

立話　時候の挨拶に始まつて無沙汰の詫、親戚知人の噂言さては世間の評判、噂話まで戀の糸を吐くごとく、縷々條々と繰り返す途上の立話は、通行人にとつて至大な迷惑である。それほど話がしたかつたら連れ立つて歩けばいゝので、天下の公道を一小私事をもつて妨げるなどは、斷然慎まねばならぬ。

婦人を呼び止めること　途上婦人を呼び止むるのは、歐米にあつては紳士のなすべからざる無作法とされてゐる。日本ではそれほどでもないが、作法として矢張り慎に來つて、靜かに脱帽して後辭をかくべきである。

婦人や老幼を劬れ　これは世間周知のことであるが、案外世人一般に通用してゐないのは頗る奇妙な結果である。これは劬る方の男子にも責任があらうが、また劬はられる婦人、老幼の方にも責任がある。實際別に禮をいはれるのが目的で、折角落付いてゐた席を譲つてやる譯ではないが、これをば當然だといはん許りに、どつかと坐りこむと、感情といふ厄介なものを所持してゐるだけに、頗る好い感じがしない。こんなことが度重なると、誰しも莫迦らしくなつて席を譲る氣がし

なくなる。然るにその禮儀を知らぬ婦人連は、電車などで當然男子は席を讓るべきものであると誤信して、何故立つて呉れないかと言つたやうな素振りを見受けることがある。

すべてが美くしい禮儀であるから、男子が弱者として婦人や老幼を勞る同情を發露したら、婦人や老幼は喜んでその厚意に感謝の意を表示すべきである。かうして始めて社會共存の意義が實現されるのである。

出入口を塞ぐ　電車や汽車に乘るさまを見ると、他人を押しのけ突き飛ばし、我れ勝に飛び乘らんとしてゐる。交通機關の運用にも不備の點のあることは否まれないが、日本人同士が公德心に乏しいことを、遺憾なく暴露してゐるものである。少なくも降客の出るのを待つてから乘るとか、婦人や老幼を先に乘せてやるとかの德義を守るべきである。

或る外人が「日本人は妙に門を好む國民だ」といつたが、電車でも汽車でも、觀覽物でも第一番に占領されてしまふ場所は門である。中味が一杯にならない中に、外側だけは爪も立たないやうに混合つてしまふ。中味を充實させて、然る後包裝に取りかゝるのが普通だが、日本人は中味よりは包裝の方に目が眩らむやうに思はれる。品物ばかりでなく電車、汽車、興行觀覽物、何んでも人混雜の際は、我れ勝に外側ばかりを占領したがる。

こんな工合に出入口が塞がれるから、中から詰めて行きさへすれば、何も死者狂ひになつて、犇めきあふ必要のないのに、地獄の繪卷物をいつでも展開げてゐるのである。お互ひに社會共存の生活をしてゐる以上は、もつと公德心を養成するのが急務である。

左側通行　交通巡査が聲を嗄らして「左！左！」と言つてゐるのを聞くまでもなく、從來の慣なく不性無性左側を歩るいてゐる風習を去つて、自分から進んで勵行する習慣を作つてもらひたいものである。

第二節　途上の作法

途上知人に遇つた場合　途上知人に遇つた場合は、三尺ばかり隔てゝ立ちどまり、相互に左方へ二歩ぐらゐ開き、兩手を膝あたりまで下げて一禮し、挨拶を交はして行き過ぎるのが禮である。また上長の人ならば、先方の行き過ぎるまで目送し、自分から三尺ぐらゐ離れたとこらで歩を移すのが作法とされてゐる。尤も世の中がだん〳〵氣忙しくなると、途上禮

式も婦人は別として、知己同士の男子ならば「ヤア」「よう」と一寸帽子を取るのみで濟むやうになつた。

知人同伴の婦人に遇つた場合　知人を伴つた婦人があつたら、必らず脫帽することを忘れてはならぬ。殊に外人に對しては尙更必要である。

婦人同伴の場合　歩行の際婦人を同伴してゐたなら、必らずこれを先立しめるか、中央に立ち列んで歩くべきが歐米の慣例である。然かし日本人同士なら、當然日本の習慣に隨ふべくたゞ外人同行の場合に限り、先方に對する例として歐米の習慣により、前述の如くするのが作法である。

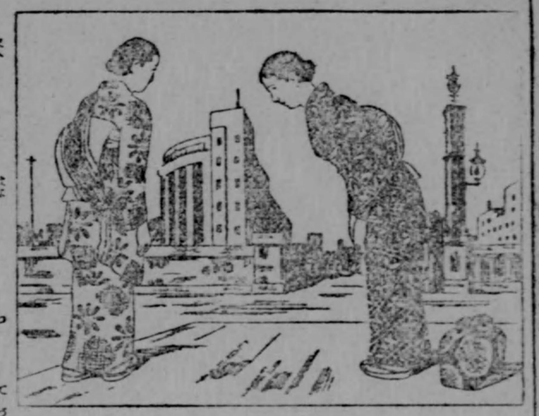
他人の事柄　途上他人の事柄が目についても、決して同伴の者と私語したり、又は指差ししたり、嘲笑するなどは以つての外の無作法で、紳士淑女のなすまじきことである。殊更注意して置きたいのは、日本の妙齡婦人は、所謂著が轉つても鈍感が飛んでも笑ひたがる癖がある。それも嫣然たる微笑なら女らしい愛嬌もあるが、可笑しくもないことにまで黃色な聲を張りあげるに至つては、無作法を通りこした失禮さで、他人の感情を少からず害するものである。況して途上公衆の前でかゝる非禮をなすは、絕對に慎まねばならぬ。

他人に物を問ふ場合　途上他人に物を問ふときには必らず脫帽し、襟卷をしてゐるときなら、これもまた脫らねばならぬ。さうして一禮の上丁寧に尋ねるのが作法で、問ふた後も厚く謝するのは勿論であるが、萬一先方がこれに應じないやうなことがあつても、決して不平の色を現はすべきではない。同時に又ものを問はれたときは、先方の態度の如何に拘らず知れる限り、詳しく丁寧に教へてやるのが紳士たり淑女たるの作法で、萬一先方がこれに對する謝意を表さない場合でも、決して不平らしい顏色を出してはならない。

第三節　敬禮の仕方

立禮　立禮を三つに區別する。第一は最敬禮で、これは兩陛下並に各皇族方に對して行ふ禮である。先づ直立不動の姿勢で視線を拜し奉る方に注ぎ、上體を九十度前方に屈すると同時に、兩手を膝頭まで下げる。帽子は右手で取つて左の腋下に挾むが、女子洋裝の場合は脫帽に及ばないのである。

第二は長上に對して行ふ敬禮で、その方法は最敬禮に準じ、上體の屈し方を鈍角程度にするのと、兩手の下げ方を膝の上部までにすればよい。



立禮の仕方

第三は普通の禮で、同輩又は同輩以下に對するものであるが、これは第二の敬禮を更に少し略せばよい。

座禮　座禮は日本人特有の作法である。先づ兩手を膝の前からあまり離れぬやうに突き、手爪先を八字形に合せ、頭は手爪先の上のところに下げて禮をするのだが、その下げ方は急激でなく、徐々に自然に下げねばならぬと同時に、頭を上げるにもやはり徐々にせねばならぬ。餘り早く頭を上げると、先方がまだ頭を下げた儘であつたりするから、お辭儀の調子をやらねばならぬし、また餘り緩くりしてゐると、今度は先方が困却する。多人數に對するときの座禮は、上座下座をよく區別しなければならぬ。床のある方が上座で、入口に近きところが下座である。もし上下の區別がない席であつたら、自分から見て、左に座してゐる人から順序に行へば間違はない。

第四節　座作進退の心得

着座　着席前には着物の前をよく合せ、袴をつけてゐるときは兩手を袴の兩側に入れ、少し袴を上げて坐り、羽織を着てゐる場合は、羽織擦きをしてから着座すべきである。その坐りやうは、先づ兩足の爪先をそろへ、右の足を少し引いて跪き、

座禮の仕方

下座の膝を上座の膝にそろへ、左足の拇指を右足の拇指に重ねる（女子はこれと反對）。手は右の掌を左の掌の上に重ねて置く。長く坐つて疲勞するやうなときは、足の拇指をそつと重ね替へるとよほど樂になるものである。

立ち方と歩き方　起つ場合は兩手を膝の上に置き、兩足を少し爪立て、下座の膝を少し上げて靜かに立ち上がるとゝもに、上座の足をそろへる。歩き方は室内にあつては手を兩股の左側に添へ、肩や臂を張らず、靜かに沈着いて自然のまゝに歩み、足を高く上げたり、壁を擦つたりしてはならぬし、閾は勿論壁の緣も踏まないやうにするのが法である。

以上は日本の作法であるが、これが洋服で椅子に着席したり、または椅子から離れるときは、日本式に膝を折るといふことはないから、それほどの面倒はないが、たゞ靜かに沈着いて席に着き、または離れるのは東西同一である。

第五節　高貴の方に拜謁する作法

高貴の方に拜謁例付つた場合は、係官から指定された服裝で出頭し、係官の指圖に從つて萬事不敬にわたらぬやう注意せねばならぬ。

拜謁の際に下座の足から進み、お次の間から御座の間に入り御姿の拜されたところで兩足を揃へ、御座に向つて敬禮を行ひ御座の正面に出て再び敬禮し、下座の足から三歩進んで、御座を點る六尺又は九尺のところに停まり、兩足を揃へ、こゝで御座に注目申上げて恭しく最敬禮をする。

尊貴のお方に拜謁の仕方

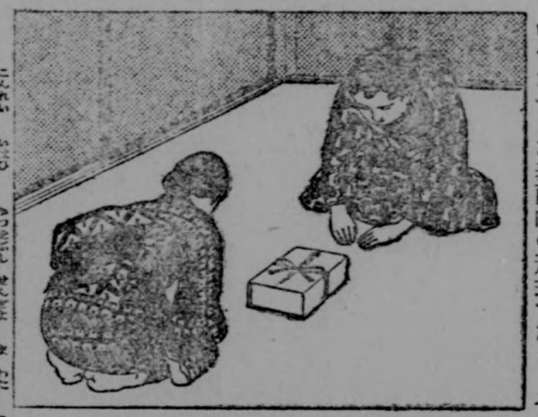
拜し終つたならば靜かに頭を上げ、御座に向ひ拳つたまゝ上座の足から三歩退行して、兩足を揃へて敬禮し、御座に向つたまゝ後に退き、再び敬禮を行ひ、御姿が見えなくなつたとき、向きをかへて常の姿勢にかへり、靜かに退出するのが作法である。

第六章　贈答

第一節　進物撰定の標準

物品贈答の意味　人に物を贈答するのは、自分の誠意を表示するのが目的で、品物の高下は誠意の標準とならぬのである。先方が身分の高い人であつても、徒らに先方のみを標準とし自己不相應な品物を贈呈するのは、誠意の披瀝であるか〻怪まれる。これに反し物品は左程のものでなくても、眞情を籠めて禮を正して贈られたものは、そこに貴い價値とうれしい誠意が現はれるのである。何んの理由もないのにたび〳〵物品を贈られるのは、後からどんな問題を擔ぎ出されるかわからないといふ不氣味さがあり、且つ迷惑でもある。また餘り高價な物をもらふと返禮に困るが、さりとてもらひ放しにするのは氣が咎めるから、贈られて却つて苦痛の種となるものである。國許からの特産物とか、遠方から來た珍らしい品物を分けてもらふのは、それが如何に些少でも、喜びを倶にする先方の厚意が有難く酌まれるものである。

贈答の場合　贈答品の撰定は自己の眞情を披瀝するのが目的であるが、交誼を厚くせんためとか、祝賀の意を表するとか、弔慰の誠意を示さんとするとか、いろ〳〵の場合があつて一定しない。唯徒らに物品を贈呈しさへすれば、義理が濟むといつたやうな表面的の形式でなく、その贈るときの場合を慎重に考察しなければ無意義である。



贈物の作法

品物の選定　普通の例としては年始、誕生、新築、移轉、新任、榮轉などの場合は、嗜好品や便宜な日用品で重實な物品を選み、婚禮の祝には鯉節、鮮魚、眞綿、紅白の縮緬などが通例とされてゐるが、昵懇な間柄では用簞笥、鏡臺、針箱などの調度類乃至衣服地、帶地、羽織地などの先方に適はしい物を贈呈するのも差支ない。弔慰の場合は香奠として現金を包み或は香類、蠟燭などを普通とし、神葬ならば榊料、玉串料として現金を包みまたは鮮魚、清酒、果物などを贈つて差支ない。また先方を訪問して生花、造花、花環、榊などを贈る場合もある。これには人夫を添へるのが例とされてゐる。病氣見舞には特に注意して、病人の口に適つたものとか、目を慰めるものとかを贈り、萬一病人が重態で、食物の攝取が出來ない場合などには、看護の人達に適する物品を選定するのが例である。火災水害などの見舞には、成るべくそのまゝ役に立つ物品とか、その場で食し得らるゝものを選み中元、歳暮其他普通の贈り物は、時と場合に適するものを選むのが例である。

第二節　贈答についての注意

返禮の可否　物をもらつて返禮するのは當然であるが、大急ぎで返禮するのは面白くない。先方の眞情に對する誠意の報酬であるから、形式に走らず適當の時機を待ち、相當の物を贈り返せばよいのである。また贈り物を受けても返禮の必要のない場合もあるが、先方の厚意に對する謝辭は形式一片でなく、心から出た禮でなくてはならぬ。物を贈つて返禮を求める心は絶對に持つてならぬが、物を贈られてそれを忘れてしまふのも決して人たるの禮でない。物を贈つた後にはそれを思ふ勿れ。受けたらばそれを忘るゝ勿れである。

地方の習慣　前述の如く贈物をする場合にも種々あつて婚禮、年賀、誕生、榮進の祝賀、火災、水害、病氣などの見舞、弔慰、送別、安着、答禮、謝儀などそれ〴〵その場合に應じて品物を異にするが、注意すべきは各地方の習慣で、自己としては多少妙な感じがあつても、その習慣には遵ふべきが社交上の作法である。

寫眞の贈答　寫眞を贈るのは親密の情を表はすものであるが、同輩又は目下の者に贈るべきもので、下輩から上輩へは決して贈るべきでない。たとへ尊上から寫眞を贈與されても、自身の寫眞は先方から請求なき限りはこれを贈ることを差控へねばならぬ。

第三節　包裝の樣式

進物は包み得べき限り白紙で包むのが例で、本式には奉書、

杉原紙二枚乃至三枚を用ひ、物品が小さくして二枚の紙を用ひる餘地のないときは、一枚の紙を二つ折にして包むのである。美濃紙、半紙は略式で、更に一枚包みとするのは略の略であるが、凶事の場合は本式でも紙一枚に包むのが作法である。物品の包み方は、先づ物品を紙の眞中に載せ、左方の紙の端を折りかけ、次に右方の紙の端を折つてその上に折り重ね、もし物品が大きくて紙幅の足りないときは、二枚重ねた紙の上に物品を載せ、上方の紙を少し左方へ引出し、物品に合せて程よく包み眞中を水引で結ぶのである。なほ物品によつては左の注意が必要である。

金　子　金子は白紙で包むのが正式で、紙袋を用ふるのは略式である。紙で包む場合はしかと下包みをなし、その兩端を折つて長方形とし、品目其他式の如く表書し、裏面または内部に金額を記し置くべきである。

衣服類　奉書又は糊入を用ひて包むのがよい。

鰹節・海苔　箱入のものは普通そのまゝで差支ない。水引は箱の中に入れるのが作法である。

魚鳥類　正式には蓙又は籠を用ひ、略式には皿や岡持などを用ひる。

一般に紙で包めない物は紙二枚を下に敷くのが法とされる但凶事の際は前に述べた通り一枚紙を用ふべきである。

第四節　表書の認め方

包紙の表書も場合によつて相違がある。普通の贈物には進上、呈上、粗品などの文字を用ひ、略して「いも」と書く場合もある。「いも」なる文字は普通女子の多く用ふるもので、起源は往古殿斗鮑を張る事を禮とした時代、殿斗鮑のない場合、假りにその形を書き記したに始まる。それが後年形を變へて「不正形なる」の字の如くになり、更に變じて今日の「いも」となつたものである。されば自分から目下の者に贈るには差支ないが、同輩以上には決して用ふべきものでない。尚ほ左に場合によつて、進物の表書の書き方を異にする例を記して置かう。

言　事　御祝儀、御祝、御慶、壽　などを用ひる。

凶　事　御佛前、御香奠、御靈前（以上神式）御靈前（以上基督教式）などを用ひる。

料（以上神式）御靈前（以上基督教式）などを用ひる。

謝　禮　御禮、謝儀、寸志、薄志、志　などを用ひる。

見　舞　暑中御見舞、寒中御見舞、近火御見舞、病氣御見舞　などゝ書く。

年　始　御年賀、御年玉、御年始、賀正などゝ書く。

中元・年末　御中元、御歳暮、御年暮などゝ書く。

餞　別　御餞別、御賄などゝ記す。

安産祝　御土産などゝ記す。

金　子　御菓子料、御酒料等の如く何々料と書くのが普通であるが、料の字を略して御肴、御樽などと記しても差支はない。

贈遺の進物　粗品、進上、進呈、贈呈、松の葉、寸志などゝ書けばよい。

昔は何品によらず目錄を添へるのが禮であつたが、現今では婚禮の鄭重な正式以外は殆んど添へないから、品目、員數などは表書に記すのが至當である。例へば「御祝儀」ならばその文字の下に「末廣一對」などゝ記すべきで、この場合は自分の姓名は左に記し、もし品目、員數を記さぬときは、中央下部に書くべきである。又右の肩に進上、進呈、呈上などは特に敬ふ場合に用ひられる。

第五節　熨斗と水引

熨　斗　熨斗は吉事にのみ用ひるが古來の作法であつたが、現今では弔問の外は一般に熨斗を添へる慣例となつた。熨斗の用ひ方については、大體左の例に遵へばよい。

一　紙儀其他正式鄭重な祝には長熨斗を用ひる。

二　熨斗は折紙を用ふるのが法であるが、略して「のし」と記しても差支ないとされてゐる。

三　熨斗は表書の向つて右方、もし特に進呈、呈上などと品目員數以外右肩に表記してある場合には、その左方に貼付ける。

四　魚鳥類には熨斗を用ひず檜葉、笹葉、南天の葉を用ひるのが禮である。

五　弔問には一切熨斗を用ひない。

以上の如くであるが、なほ注意して置きたいのは、最近折紙熨斗（包熨斗）の熨斗を省いて水引を包み、兩用象徴として用ひてゐるが、これは熨斗の意義を沒却した違法である。

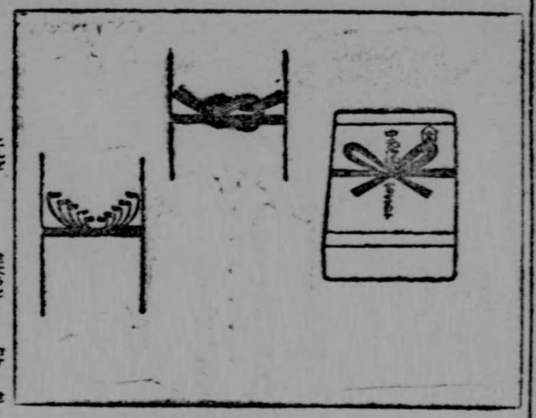
元來熨斗なるものは、その折紙は一つの裝飾で、主要部は中に僅か附せられた打鮑である。それで正式には長熨斗を用ふるので、これを省略しては全然熨斗の意味が失はれてしまふ。

水　引　普通の場合の進物には紅白または赤金を用ひ、正式

の際には金銀、凶事には黒白、青白又は白の一本水引を用ひるのが禮である。そのかけ方は紅白、赤金は共に赤を右に、黒白青白は黒、青を右にする。

水引の結び方は普通は兩貝即ち返し結びとするのであるが、婚儀および凶事には結び切りにする。これは重ねてないやうにとの意である。さうして何れも結び目は、白または金が上になるやうにするのが法である。

魚、鳥或は果物野菜などには、殿斗と同じく水引も亦用ひないのが法とされてゐる。

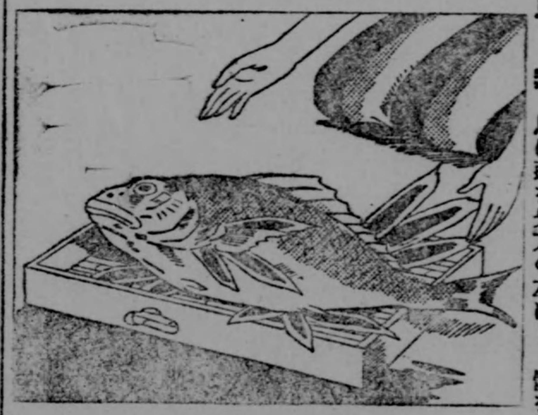


水引のかけ方

第六節　品物の並べ方

魚類は腹を手前に向け、頭を左にして置くが、海の魚は背を自分の方に向け、二尾であれば腹と腹とを向き合せる。これを積む場合には川魚たると海魚たるとを問はず、背を左に、腹を右に、頭を向ふにして積み、三側目にはその向を反對にし、下側と腹合せに積み、順次これに準ずる。海老は頭を左に向け、向ふから手前に順々に積むのが法である。

鳥類　鳥は頭を先方の左にし、體を仰向けに、左の羽翼を右の羽翼の中に押し曲げ、羽を少し擡げて置く。又雁鴨の如きを一羽贈る場合には、頭を左の羽の下に入れ首を先方の左、腹を前とし、數多き時はかくの如くにして體を仰向けとなし、雄を下に雌を上に積むのが法



魚のならべ方

である。

鶏卵果實　三連までは竪に見らるゝやうに並べ、五連以上は連を竪にして、横に見えるやう積むのが法である。

すべて日本の習慣として一對または一番のものゝ外は奇數を擇むべきで、殊に鶏卵や果實などの進物には、絶對に偶數を用ひないのが例とされてゐる。

第七節　進物の出し方と受け方

出し方　すべての贈答品は白木の臺に載せて出すのが本式であるが、略して厨蓋、折敷、盆などに載せ帛紗をかけても差支ない。菓子折または紙に包んだものでも鄭重にするならば必らず相當のものに載せて出すのが至當であるが、現今では紙に包んだ水引をかけた物品は、そのまゝ出しても差支ないことになつてゐる。もし途中で買求めたもので、折敷も盆も用意してゐない際は、扇子に載せて出すのが法で、その扇子すら持ち合せなかつた場合は、買求めた家から相當の物を借り、これに載せて出すべきである。尤も包裝してある物であつたら、現代風にそのまゝ出してもよからうが、よほど粗雑の間柄なら兎に角、贈物を風呂敷に包んだ儘出すなどは決してなすべきでない。また風呂敷を解くと散亂する虞れある品物ならば、先方から盆などを借りて盛り移すべきである。

贈物を主人に出すものは、客間に入る前または入ると直ちに取次に托すべきで、取次のないときは直接主人に出して差支ないが、襖の蔭や衝立の後などに置いて歸り間際に出すなどは甚だよくない。金子入の紙包や商品切手の如き輕い小形のものは、略して扇子に載せて出すのが、現今の通例となつてゐる。

物品を先方へ進める場合は、表書の字頭を手前の方にし細長いものは頭の方を先方の左にするやう進める。また袱紗はその方向に注意し、風呂敷に包んである物品なら先づ風呂敷を解き、袱紗を正しくかけて進める。扇子に載せて進めるときは品物の大小により、五間或ひは七間といふやうに骨數を奇數にたゝみ、正しく先方に向くやうに、右手に要のところを持ち、左手前の親骨の端を持つて進めるか、またはこのやうな工合に扇子を程よきところへ置いてもよい。先方で物品を受取つたならば、扇子を取り上げて右手に要のところを持ち左右の手でたゝみ、自分の傍に置くのである。すべて贈物は必らず下座から差出し一礼するのが作法である。

受け方　受ける方は先づ鄭重にこれを受け、客を上座に直した後、一禮して先方の厚意を謝すべきで、進められて固辭するなどは、却つて先方の厚意を無にする非禮である。

袱紗及び臺、風呂敷、盆などを返すときには、移り紙と稱し美濃紙か半紙二枚を一つ折にして臺、盆又は帛紗の上に載せるべきで、これは再び戴くといふ意味である。器物に袱紗をかけて贈られた場合は、袱紗を裏返してたゝみ、器物の上に載せて返し、扇子は要の方を先方に向けて返すのが作法である。尤も夜間の贈物、婚儀、弔問、病氣全快祝には、決して移り紙を入れないのが法である。なほ移り紙の代りに、何か多少の品物を入れて感謝の意を表するのも略式として用ひられてゐる。

第八節　答禮の心得

婚禮、出産、祝賀等の吉事について、人から贈物を受けた場合は、祝ひの日から三四週間内に相當の返禮をして、謝意を表するのが作法で、その返禮の品は赤飯に鯉節、紅白の餅、鳥の子餅など種々あるが、近來は記念として器具を贈ることが流行し、凶事には枕頭に茶を添へるのが、在來普通の例であつたが、これも近來は器具を返禮に用ひ、または全然これを廢して、慈善事業に寄附するなどのことも流行してゐる。

初節、初節句に祝ひの品を贈られた返禮には、三月には麥餅、五月は柏餅を用ひ、それのみでは簡單過ぎる場合は、三月には白酒、五月には鯉節を添へるのが例である。

第九節　花卉の贈答

花を贈つて共に目を樂しませる習慣は、古代から行はれたことであるが、この自然美を愛好する習慣は、寧ろ西洋より東洋殊に日本支那の方が遙かに古い歴史を持つてゐる。それに伴つた種々の文獻や傳說もある。それほど花の美を愛好する趣味は西洋よりも日本の方が自然的であり且つ風雅である。

然るに歐化の趨勢と時間活用の繁劇は、大第にさうした趣味から遠ざかつて、近來は日本人間にもまた切花を買つて贈物にすることが流行し、自から鉢を載つて南枝の春を贈る餘裕がなくなつて來たやうである。

現今多く贈物にする花は、鉢植または花束である。各種の祝賀、表彰、歡迎、送別等に用ひるのは主として花束で、殊更公衆の面前で手渡しするものや、死者の靈前に供へるものには可

なり大きなものもある。一般進物にする花束は、是等より形は小さいが各種色彩の美をそれ〴〵集めてあるのが普通である。鉢植は病氣見舞などに大分多く用ひられ、食物の攝取に注意を要する病人に目を樂しませる見舞品としては、戀ひの食物を贈るより心の要らぬ適當品とされてゐる。

花の贈り方

リースといふ花環は、主として葬式の行列や葬儀場を飾るためで、時としては花束のやうに祝賀會などに用ふることもあるが、その場合は豫め會場裝飾のために列べて置くだけで、わざ〳〵手渡しするものではない。

造花は生花の代用として用ひられるが、專ら花環のみで花束には餘り用ひられない。生花、造花にかゝはらず花環には、リボンを飾るのが例で、祝賀會や演藝場に飾るものは、大抵紅白のリボン、葬儀に用ひるものは黑または黑白のリボンが普通である。

第十節　花言葉

花言葉なるものは無心の花をかりて、言外の意味を含ませるもので、歐洲から傳播され、主として若い男女の交際間に用ひられる。

元來贈物の目的は、先方の心を喜ばせることにあるのだから、先方の愛好する花を擇んで贈りさへすればよいのであるが、一通りの花言葉を心得て置いて、あまり不吉な花を贈つたり、また誤解を招くやうなことのない注意ぐらゐは、社交上必要であるから、玆にその概略を列記して置かう。

アイリス　傳言・通信。**アカシヤ**　友情・純潔なる戀。
アサ(麻)　幸運。**アサガホ**(牽牛花)　喜悅。
アザミ(薊)　峻嚴・人間嫌ひ・復讐。
アシ(蘆)　慇懃・管の音樂。
アツユキサウ(雪の花)　勝利。**アヂサヰ**(紫陽花)　冷淡。
アネモネ　病氣。**アマリリス**　自尊。

アラセイトウ（紫羅欄花）　衰へざる美・愛着の絆。
アンズ（杏）　うたがひ。
イチヂク（無花果）　證據。**イラクサ**（蕁麻）　意地わる。
ウメ（梅）　貞節・潔白・意志堅固。
エンメイギク（延命菊）　清淨・貞操。
オトギリサウ（弟切草）　敵意・迷信。
オランダイチゴ（和蘭苺）　尊敬・愛（葉）・先見（花）。
オランダセリ（和蘭芹）　親絲。
オリーブ（橄欖）　平和・繁榮・勝利・貞節・子福者。
カーネーション　ああ悲しい（赤）　拒絶（紋）　純愛（新）。
カシハ（柏）　勇敢（葉）・慕待（木）。
カラシナ（芥子菜）　冷淡（種子）。**カラハナサウ**（唐菖蒲）　幸福。
カルセオラーア（巾着草）　私の爲に之れを保て。
キク（菊）　私は愛します（赤）　高貴（白）　あはき戀（黄）。
キヅタ（常春藤）　忠義・友情・結婚。復活（キリスト教）。
キンギヨサウ（金魚草）　傲慢。
キンセンクワ（金盞花）　悲痛・失望。
キンポウゲ（毛莨）　恩知らず・繁榮・子供ほしさ。
クルミ（胡桃）　知識・謀略。**グラヂオラス**　人格の力。
クリ（栗）　私を正當に解して下さい・贅澤。
クローヴア（首蓿）　望みがかなふ（四ッ葉）・勤勉（赤）・私の事を思つて下さい（白）。
グロキシニヤ　尊貴の精神。
クワ（桑）　あなた一人を先に死なしはせぬ（黑）・智慧（白）。
ケイトウ（鶏頭）　虛飾・氣取り・異常。
ケシ（罌粟）　幸運。**サクラ**（櫻）　教育ある事・詐僞（白）。
サクラサウ（櫻草）　少年・陰德・獨立・自尊（赤）。
サンザシ（山檀子）　不朽。**シクラメン**（豚の鼻頭）　滾慮。
シナノキ　夫婦の愛。**シネラリヤ**　常に快活。
ジヤスミン　愛らしきこと（白）　優美・華麗（黄）。
スキートピー（花豌豆）　ゆかしい愉快と訣別。
スキセン（水仙）　注意・うぬぼれ。
スギ（杉）　力・清廉潔白（レバノン杉）・私はあなたの爲めに生きてゐます（葉）。
スグリ（須具利）　豫想。
スズメノテツパウ（雀の鐵砲）　道化・じやうだん。
スズラン（鈴蘭）　幸福が返つてくる。

スヒカヅラ（忍冬）　健康。**スミレ**（菫）　忠實。
ゼラニユーム　憂鬱（暗色）　慰安（緋）・選擇（ばらの香）・友情（柏葉）・のろま（臨葉）。
ソヨゴ（冬青）　愛。
ダーリア（天竺牡丹）　移り氣・永續せぬ。
チユーリツプ（鬱金香）　名譽・仁愛・戀を打明ける（赤）・叶はぬ戀（黄）。
ツバキ（椿）　おのづからな優美（赤）。愛らしき（白）。
テイジー（雛菊）　無意識（赤）・無邪氣（白）・其事を考へます（野生）。
テウセンアサガホ（朝鮮朝顏）　外面如菩薩內心如夜叉。
ハス（蓮）　雄辯・衰へたる戀。
バラ（薔薇）　戀・一致（白赤の共咲）・私は貴方にふさはしい（白）・純潔・愛らしさ（赤）・戀のおとろへ（黄）・祕密（三つの蕾の上に咲ける滿開の花）。
バンジイ（三色菫）　勇氣・思慮。
ヒツジグサ（睡蓮）　成功・純潔。
ヒマハリ（向日葵）　崇拜（總性）・高慢（大輪）。
ヒヤシンス　遊戯・悲哀（牡丹色）・確乎たること（青）・拙へめ勝の愛らしさ（白）。
フクジユサウ（福壽草）　悲しい思ひ出。
ブダウ（葡萄）　酔・慈愛（野生）。
フロツクス　一致。**ヘリオトロープ**　敬虔・忠實。
ホウセンクワ（鳳仙花）　忍耐出來ぬこと。
ホツプ　不公平。**ミヅガシハ**　靜な憩。
モモ（桃）　私は貴方の俘。
モクレン（木蘭）　自然に對する愛。
ユリ（百合）　純潔・溫和・快さ（白）・虛僞・華美（黄）。
リンゴ（林檎）　誘惑（實）・選擇（花）。
レモン（檸檬）　妙味。**ロベリア**　惡意。
ワスレナクサ（勿忘草）　私を忘れ給ふな。
ワラ（藁）　處女でない。

以上が花の言葉の大略であるが、序に月の花と色の感情を附記して置かう。

第十一節　月の花

アツユキサウ（雪花）	一月	**スミレ**（菫）	三月
サクラサウ（櫻草）	二月	**ヒナギク**（延命菊）	四月

サンザシ（山禮子）　五月
スヒカヅラ（忍冬）　六月
ヒツジグサ（睡蓮）　七月
ケシ（罌粟）　八月
アサガホ（牽牛花）　九月
カラハナサウ（蛇麻）　十月
ノジギク（野路菊）　十一月
ソヨゴ（冬青）　十二月

第十二節　色の感情

白　歡喜、純潔、高貴、無限、神、崇高。
黑　悲哀、罪惡、絶望、嚴肅、苦痛。
赤　喜悅、愉快、活動、狂暴、情熱、怒、忿怒。
青　淋漓、平和、永遠、親愛、靜寂。
綠　平和、健全、青春、理想、成長。
黃　陽氣、光明、富貴、溫情、倦怠。
紫　瞑想、優婉、高貴、病氣、沈鬱。
菫　不得要領、含蓄、隱遁、流離、寂寥。
水　忘却、幽閑、處女、運命、淡い悲しみ。
茶　澁い味、廢者、意氣、不安。

第十三節　世界の國花

日本　さくら（櫻）
英吉利　バラ（薔薇）
佛蘭西　花菖蒲（または百合）
西班牙　柳
支那　牡丹（昭和四年後は棉）
スコットランド　蘇
伊太利　菊
印度　罌粟
アイルランド　しろつめぐさ
獨逸　矢車菊

第四編　應接と禮儀作法

緒言

一家は孤立して存するものでなく隣家、親戚から社會、國家に連るのである。世の進歩するに伴ひ、社會生活も複雜化して行く今日において社會道德、公衆作法等を辨へぬ者は、社會人としての資格を缺き、人としての幸福を圖ることは出來ない。社交上の作法はその社會により、國により一樣ではないが、各〻定つた儀禮がある。儀禮は道德の第一義たる自他人格の尊重に發して、社會の秩序を維持する要具である。一家の幸福を圖るには、誠實にして自己的ならざるやう、この儀禮を守らねばならぬ。

禮儀作法は社會生活の根本規定であつて、これあるが故に我々は安全幸福なる生活を營み得るのである。禮儀作法のない社會生活は、法律制度のない國家生活と同じやうなもので、それは考へられないことである。

野人禮に習はずなどゝいつて、禮儀の辨へないことを自慢らしく振舞ふものもあるがそれは間違つてゐる。如何に禮にならはぬからといつて、それがすべて無禮千萬で世の中を渡つてゐるのとは違ふ。無骨の中に禮あり、野蠻人社會中にも相當複雜な禮法があるのである。禮儀作法は人と人との關係應對の法則だからである。これがなければ對人交渉がなくなるから、人が人に對すれば必らず禮あるは必然的である。喧嘩や戰爭においてさへ禮儀作法が生れる。禮なければ社會なしといつても過言でないのである。

野蠻人は放埒で好き勝手な生活だと思ふと大間違ひで、なかなか嚴密なる社會規定、即ち禮儀作法に縛られてゐる。酋長、頭目と族人、父と子、男と女、夫と妻、親と子、夫と妻の妹、兄弟と姉妹等、その間に守らるべき喧しい禮儀あり、部落の山林、食つてもよい物と食つてならぬもの、神に對する場合その他、數多くの作法が存してゐる。

この禮儀作法は文化生活の複雜になるとゝもに段々に發達し、それ〴〵複雜多岐になり、禮儀三千威儀三百などいふやうになる。すると樂女馬禮その煩に耐へぬといふやうになつて、その反動として無禮無骨が、反つて尊ばれることになり、文明を厭つて野蠻の自然に憧れやうとすることにもなるが、それは禮

儀作法がその意義を失つて形式化した弊害に甚くもので、ために禮の眞意を失ふことゝは違つてゐる。自然に離れとか何んとか反動家はいふが、その自然の中に秩序あり、原始社會生活になほ禮儀があるのである。勿論禮儀作法は、人と人との間の生活關係の規定であるから、その社會その時代によつて違つて來る。故にすべて一應現れた禮儀作法を、皆守らねばならぬといふことはない。現代に衹を附ける譯にはゆかない。社會生活といふものは萬人の幸福のために、一人に飛びはなれた遣り口をさせぬことを要求する。この要求の規定として現れたのが禮儀作法である。故にこれが社會生活の安寧秩序の要具となるのであり、これを尊重せぬ個人は、その社會が輕蔑するのである。それは社會の自衞的發動で、無禮者を尊んでは社會生活は亡ぶより外はない。

禮儀作法はそんな性質のものであるから、これに縛られるのを窮屈と考へることは反つて間違つてゐる。寧ろ禮儀作法を守らないからこそ、窮屈を感ずると考ふべきである。自由は反つて禮儀作法に從ふことから生ずる。皆が禮裝してる中に一人無禮裝で居れば、著しく窮屈を感ずるであらう。

社會生活の幸福安寧のための規定を一人で破つてゐては、その生活は不安で堪へられない。法律を犯した罪人は忍る〳〵世を忍ぶ。禮儀を守らぬ野人は、決して安んじて人中に出ることは出來ない。禮儀作法に從つて人の生活は安易に、それらの人々によつてなされた社會生活は、自由にして愉快なものとなるのである。故に禮儀作法が社會生活の根本規定であるのはいふまでもない。

第一章　正しい挨拶の仕方

第一節　社交と言語

舊道德では多辯は惡德であり寡默は美德としてあるが、言ふべきを言ひ話すべきを話す程度ならば、金佛樣のやうに無愛嬌に默々然としてゐるよりは優つてゐて、單に快活な社交的な情味を對手に與へるといふだけでも美德の一つに數へてよい。

人と人とが相對して談話のないほど憂鬱なものはない。人の居ないところでは離辯でありながら、人前に出るとか、或ひは改つてものを言ふやうな場合には、一言も口の利けぬ人がよくある。かゝる人は社交上必要な武器を持たないわけで、何時の間にか同僚から除物にされ下積みにされて、相當の學識を備

夏　季　お久しう御座います。土用に入りましてからは、毎日照りつゞきまして一層お暑う御座いますが、皆樣は御機嫌お宜しう御座いますか。私方もお蔭樣で本年は皆達者で御座いますから御安心下さいませ。まだ〳〵暑さが續きませうから、何卒皆樣お身體を御大切になさいませ。

秋　季　暫くで御座います。朝夕の涼風に爽らか秋らしくなつて參りましたが、お宅樣では皆樣御壯健で居らつしやいますか。私の方はいつも病氣勝ちの母が、本年は至極達者で御座いますので、皆も喜んで居ります。これは鄕里から參りました梨で御座いまして、珍らしくも御座いませんが、ほんの一つお裾分けいたします。どうぞお子樣に差上げて下さいませ。

冬　季　お久しう御座います。皆樣お變りは御座いませんか。私方でも一同達者で居りますが、昨今のお寒さで出不情ばかり致しまして申譯ない御無沙汰を致して居ります。何れその中、緩り一度寄せて頂きますが、少し急ぎの用事が御座いますので今日はこれで失禮させて頂きます。お寒さの折りで御座いますから、お身體をお厭ひ遊ばすやう、皆樣に宜しくお傳へ下さいませ。

第四節　物を贈る例

客「大變お暑くなりまして御座いますが、皆樣お變りは御座いませんか。」

主人「ほんとうにお暑くなりまして御座いますが、貴女樣は何時もお達者で御結構で御座います。私の方もお蔭樣で無事に暮して居ります。」

客「このお茶は誠に少々で御座いますが、八十八夜に摘みました芽を手すさみに製しましたもので御座います。お目に掛けますやうな品では御座いませんが、私の邊では八十八夜に摘みましたお茶を飲みますと惡病にかゝらぬとか申します。お宅樣などは日頃宇治の精撰にお馴れで御座いますから、お口にはとてもお合ひ申しますまいけれど、おまじないのお心算で御老人樣と御笑味下さいませ。」

第五節　中元の挨拶

客「御免下さいませ、お暑い時分にお邪魔致します。」

へてゐるにかゝはらず、世の敗殘者となることが少くない。

近來は最高の學府を卒へたからといつても、卒業證書一枚で無條件で就職出來ることは減多にない。就職に先立つて多くの候補者に伍し、採用試驗を受けなくてはならぬ。このとき筆記試驗では優秀な成績を見せたにかゝはらず、口答試驗で思ふことを十分の一も言ひ得ないため、折角の秀才が落伍者となつた例は決して珍らしくないのである。實際思ふことを思ふやうに言ひ得ないやうでは、日常の事務上に甚だしい支障を生ずるので、これは誠に止むを得ないことである。

學識と辯口は必らずしも兩立するものではない。そして學識が勉學によつて得られると同樣、辯口も日頃から相當の注意を拂つて練磨する必要があるが、それには先づ日常の挨拶からで冠婚祭葬などの改つた挨拶を圓滑に述べ得られるやうに心掛けることが肝要である。尤も挨拶の巧拙によつて、直ちに人格の高下を定めることは出來ない。また日頃の挨拶が如何にも圓轉滑脫だから、辯論が巧みだからといつて、それのみで口答試問で優秀な成績を示し得るとはいへないが、その一助となることは否めない。一歩讓つてなし得ないとしても、社會生活をする以上は社交上の儀禮に適つた挨拶をするのが禮儀である。

されば何人も常に內での習ひを愼み、言語動作に意を用ひて社交上の儀禮に悖らぬやう心掛けねばならぬ。そこで本編においては、是等社交上のあらゆる場合の挨拶の仕方を、簡單に一通り述べて見やう。

第二節　年賀の詞

甲「明けまして、お目出度うございます。」

乙　一緒に「お目出度うございます。」

甲「昨年中は大變お世話になりまして、誠に有難うございました。」

乙「手前共でこそ…どうぞ、今年も相變りませず、よろしく…」

甲「どうか本年も相變りませず、よろしくお願ひ申上げます。」

乙「御同樣によろしくお願ひ申上げます。」

第三節　時候見舞の挨拶

客　季　此節は大變春めいて參りましたが、お宅（お內）では皆々樣お變り御座いませんか。いつも御無沙汰ばかり致しまして相濟みません。私方もお蔭樣で皆達者で過して居ります。此節は私共の邊では、櫻が眞盛りで賑はつて居りますから次の日曜日にでも皆樣お揃ひで、是非お出掛け下さい

主人「いゝえ、本當によくお出掛け下さいました。」

客「大變お賑しう御座いますが皆樣お變りは御座いませんか。時々お伺ひ致しますのが本意で御座いますが、失禮ばかり致して居ります。」

主人「いゝえ、私の方こそいつも御無沙汰ばかり致して居りますが、お暑いにも拘らず昔樣お變り御座いませんで、何よりも御結構で御座います。私方も本年はお蔭樣で皆達者で暮して居ります。」

客「左樣で御座いますか、お互樣に達者が一番結構で御座います。つきましてはこれは誠にお粗末な品で御座いますが、お中元のお印で御座います。」

主人「まあ何かと存じましたらお中元を下さいますとは過さ事で御座います。私の方から致しますのが道ですのに、貴方樣から頂戴致します道は御座いませんから、御志だけを頂くことにして、これは元通りお納め下さいませ。」

客「そのやうに仰せられては赤面致します。どうか是非これはお納め下さいませ。」

主人「では主人が歸りましたなれば如何申しますか分りませんが、お言葉に從ひまして御遠慮なく頂戴致します。有難う御座います、どうぞ皆樣に宜しくお傳へ下さいませ。」

第六節　歲暮の挨拶

客「大變押詰りまして御多用に御座いませう。年內は色々とお世話樣になりながら、つい御無沙汰ばかり致しまして、申譯のないことで御座います。」

主人「何を仰しやいます、御無沙汰は當方で御座います。お內樣には皆樣お變りは御座いませんか。又本日は御遠路のところを能くお出で下さいました何卒御ゆつくり遊ばしませ。」

客「有難う御座います。時にこれは誠にお粗末で御座いますが年末の御祝儀のお印で御座います。何卒お納め下さいませ。」

主人「左樣なことは、何卒御無用にして戴き度う御座います。毎年々々お變理堅く御心配をお掛け致しまして、却つて痛み入ります。」

客「何をお仰しやいます。平素は御心配の掛けつ放しで誠に申譯が御座いません。何うぞお納め下さいませ。」

主人「左樣で御座いますか、では折角の御芳志で御座いますから頂戴致して置きます。有難う御座います。」

客「ほんのお印でお恥かしう御座います。」

第七節　婚禮の挨拶

招待を受けた場合　結婚披露の御招待を受けたなら、餘り差迫らぬうちに適當なお祝品を持つて、お喜びに伺ふのが禮儀である。

客（御兩親及び御當人へ）「お嬢樣（或は御令息樣）には、この度御良緣がお調ひになりましたさうで、誠にお目出度う御座います。幾久しく御幸福をお祈り申上げます。」

主人「有り難う存じます。」

客「これは、誠に粗末な品で失禮では御座いますけれど、お祝ひのお印で御座います。どうぞお納め頂きたう存じます。」

主人「これはどうも、御丁寧に恐れ入りました。」

と兩手でお受けして、床の間なり、棚なり、お祝品を飾る場所へ丁寧に据ゑてから、改めて、

「御鄭重なお祝ひの品を頂きまして、有り難う存じます。幾久しく頂戴致します。」

とお禮を申上げる。

客「また、御披露のお席にお招き頂きまして、誠に有り難う御座います。喜んで參上致します。」と招待に對する禮を述べる

結婚當日の場合　婚禮の當日は、招待された者同志でも、知合ひならば年始のときと同じやうに、

「今日はお目出度う御座います。」

といふ挨拶を交すのがよい。

また新郎側の知人として招かれた場合は、新郎及びその兩親に、新婦側としてならば、新婦及びその兩親に、

「今日は、誠にお目出度う御座います。またお招きに預かりお手厚いおもてなしを頂きまして、有り難う御座います。」

と。挨拶を述べる。

披露に招く場合「其後は御無沙汰致して居りますが皆樣お變りは御座いませんか。さてかねてお世話樣になつて居りました靜子も、此度良緣が御座いまして一昨日結納の取り交しも相濟みましたので、明日は晴れの結納披露を致したいと存じます何かと御多用のところ御迷惑で御座いませうが、永々お心安く願つて居りましたばかりでなく、色々とお世話樣になつて居りました靜子も、これが娘と致しましての御交際のお終ひで御座いますから、是非ともお遊びにお出で下さいますやうお願ひ申上げます。」

「それは〳〵誠にお芽出度う御座います。かねてお噂は伺つて居りましたが、御結納の御式もお濟みになりましたとは誠にお芽目度う御座います。お祝言を申上げます。就きましては明日御披露にお招き下さいまして有難う存じます。定めし御立派なことで御座いませう。何を置きましても是非御伺ひ致しますで御座います。」

結婚祝を贈る場合　「承りますれば此度御令嬢樣の御良緣が芽出度くお整ひ遊ばしまして、明後日がいよ〳〵お輿入れで被居いますさうで眞にお芽出度う御座います。取り分け御先方樣は御家柄なり、御人格と申し誠に申分のない御立派なお方で御座いますから、御本人樣は申すまでもなく、御一同樣も定めし御滿足の御事と私共までがお喜び申上げて居ります。これは誠にお粗末で御座いますが、お祝の御印で御座いますから何うぞお納め下さいませ。」

「御遠方の處わざ〳〵お運び下さいまして有難う御座います靜子は家事其他に就きましては少しも心得が御座いませんから、今暫く家庭に置きまして修養をと思つて居りましたので御座いますが、何某樣のお骨折りで某家へもらつて戴くことに纏まりました次第で御座います。就きましては、只今は誠にお美事なお祝を頂戴致しまして有難う御座います。靜子の紀念として厚くお受け致します。何卒某家へ參りました後も、夫婦ともに行末永く御交際下さいますやうお願ひ申上げます。」

嫁の荷を持參した場合　「今日はお天氣と申し、お日柄と申し誠にお芽出度う存じます。只今何々樣のお荷物を御持參いたしますから、何卒ぞお改めの上お受取り下さいませ。」

「お使のお役目眞に御苦勞樣で御座いました。お荷物の數々確かにお受取致しまして御座います。就きましては荷役のお方御一同樣に一献差上げて居りますから、何は無くとも御緩りお祝ひ下さいますやうお願ひ申上げます。」

双方の親同志の場合　「お初にお目に掛ります。私は靜子の父何と申します者で御座います。此度は何樣の御盡力に依りまして、不束な娘を御拾ひ下さいまして有難う御座います。何分辨へのない娘に御座いますれば、自然何んの仕附も御座いませんから定めしお目だるいことゝ存じます。何卒嚴しくお仕附け下さいますやうお願ひ申上げます。尚ほ私どもゝお釣合ひ申しませんことのみで御座いませうが、何卒末永く御願申上げます。御親戚御一同樣にも宜敷お願ひ申上げます。就きましては御親戚御一同樣に御紹介申上げます。これが娘の

何子でして、不束者で御座いますが、幾久しく宜しくお願ひ申上げます。」

親族より双方の親への場合　「御挨拶申上げます。此度御兩家の御縁典も芽出度くお濟みになりまして誠にお芽出度う存じます。就きまして私は何の娘靜子の叔父に當りまして何と申します無作法者で御座いますが、靜子の縁に連れまして御親類の末席をお汚し申しますことになりましたから、何卒末永く宜しくお願ひ申上げます。」

「有難う御座います。御挨拶誠に恐入りました。仰せの通り此度は不思議の御縁で御親類のお交際をさして戴くことになりましたが、こちらは不行屆の者ばかりで御座いますから、何かとお氣附のところは御遠慮なく御指導下さいますやうお願ひ申上げます。」

御禮廻りの場合　**姑**「昨日は御多忙中をわざ〳〵御足勞下さいまして有難う御座いました。實は此度長男の縁に何村の何某の娘靜子をもらひ受けましたから、今後は私ども同樣宜しくお願ひ申上げます。」

主人「それは〳〵御鄭重なる御挨拶で有難う御座います。」

姑「(嫁に向ひ)此方はこのお家の何々樣で御座いますから御挨拶を申上げなさい。」

嫁「お初にお目にかゝります。私は靜子と申します不束者で御座いますが、何卒宜しくお願ひ申上げます。」

主人「申後れました。私は何々で御座いますが、何卒お互ひに宜しくお願ひ申上げます。」

第八節　出産時の挨拶

産婦の姑に對する場合　「今日は誠に結構なお天氣で御座います。承りますれば、二三日前奥樣には、御ご疲遊ばしたさうでお芽出度う御座います。それに何時もお坊ちやんばかりで被居いますのに、此度はお待ち兼のお嬢さんで居らつしやいますさうで貴女樣はじめ皆樣も、定めし御滿足で居らつしやいませう。本當にお芽出度う御座います。奥樣は平素御丈夫で居らつしやいますから、御安産のほどは豫期致して居りましたが、此度はまた格別の御安産で居らつしやいましたさうで、重ね〳〵お芽出度う御座います。これは誠にお粗末で御座いますが、ほんのお祝ひのお印で御座います、何卒お納め下さいませ。」

「有難う御座います。かねて色々と御心配をお掛け申して居りましたが、案じて下さいました程でも御座いませず、至極樂々と一昨日身二つになりましたから御安心下さいませ。その上今度は待ちに待ちました女兒が産れましたもので御座いますから、皆の者も大變喜んで居ります。早速お宅樣へもお知らせする筈で御座いましたが、つい遲くなりまして相濟みませんでした。それに只今は早速御鄭重なお祝ひを頂戴致しまして誠に有難う存じます。お歸りになりましたらお内の皆々樣に、宜しくお禮を申上げて下さいませ。」

産婦の夫に對する場合　「今日は誠に結構なお天氣で御座います。承りますれば奥樣には今度が御初産にもかゝはらず一昨日御安産遊ばしましたさうで、誠にお芽出度う御座います。取り分け坊樣がお生れ遊ばしましたことは、貴兄方樣御兩人は申すまでもなく、初孫のお顔を御覽になりました御兩親樣は、また格別のお喜びで居らつしやいませう。この品は誠にお粗末で御座いますが、ほんの心ばかりのお祝ひのお印で御座います。何卒お納め下さいませ。」

「これは〳〵御遠方の處をわざ〳〵お運び下さいまして誠に有難う存じます。何分初産で御座いますばかりでなく、生れます日も十日ばかり延びましたものですから、皆の者も大變心配致して居りましたが、案ずるより生むが易いとか、産婆さんの參りましたときは、もう産れて居りましたやうな譯で樂々と身二つになりまして皆の者も安堵いたしました。其後の肥立もよく、子供も大變丈夫に見えますから御安心下さいませ、また只今は誠に結構なお祝ひを下さいまして有難く頂戴致します。何れその中家内をお禮に差上げまして御挨拶申上げますが、お歸りになりましたら、お内の皆々樣へ宜しくお傳へ下さいませ。」

産婦に對する場合　「今日は誠に結構なお天氣で御座います。貴女樣には一昨日樂々と坊樣御安産で御座いましたさうで、お芽出度う御座います。それに大變お達者で被居いますさうで、本當にお芽出度う御座います。日頃のお祈り通り坊樣で御主人樣を初め御兩親樣も、嘸ぞかし御滿足で居らつしやいませう。坊樣もよく只今は御よつて居らつしやいますね。一寸お見せ下さいませ。大變大きな赤ちやんで居らつしやいますね。これは誠に失禮で御座いますがお祝ひのお印で御座いますから何うぞお納め下さいませ。又これは貴女樣へのお力附けにと思ひまして、地玉子を少し持參致しましたから召上つて下さいませ。」

産婦よりの答禮の場合　「此度は色々と御心配ばかりお掛け致しまして、誠に相濟みませんでした。兩親初め良人も皆喜んで居ります。それに生れますときに比較的樂で御座いましたので、今日あたりは床に伏つて居りますのが、何だかまどろかし位で御座います。そして只今はまた重々のお祝ひを頂戴致しまして有難う御座います。お歸りになりましたら何卒皆樣に宜しくお傳へ下さいませ。」

第九節　誕生祝の挨拶

誕生に招く場合　大變お暖かでお凌ぎよくなりました。お宅樣にも皆樣お達者で御結構に存じます。私の方もお蔭樣で靜子が滿三歳になり本月何日が丁度誕生日で御座いますので、心ばかりのお祝を致してやり度いと思ひます。何にも御座いませんが、私の手料理で粗酒を一素差上たいと存じますから御主人樣を初めお子樣御同伴で正午からお運び下さいませ。わざ〳〵お運びを願ひましても何の風情も御座いませんので却つて迷惑とは存じますけれど、何うぞお出で下さいますやうお待ち申上げます。

招待を受けた答禮の場合　仰せの通り大變お凌ぎよくなりました。お蔭樣で皆達者で御座います。靜子樣はもうお三つで、さぞお身大きくおなり遊ばしたことで御座いませう。御日出たう存じます。就きましては御誕生日をお祝ひ遊ばすとて、私共までお心に留められ御鄭重なお招きで恐れ入ります。何を差し置きましても必らずお邪魔させて頂きます。何うぞお歸り遊ばしましたら皆樣に宜しくお傳へ下さいませ。

祝物を贈る場合　先達ては御遠方の處わざ〳〵お運び下さいまして有難う御座いました。お言葉に甘へまして御當日は子供達を召し連れまして、早々からお邪魔をさして戴き、綾る〳〵遊ばして頂きませうと皆の者も喜び勇んでお待ち申上げて居ります。これは誠にお粗末で御座いますが、何かのお役に立ちましたならば、私の滿足はこの上もないことで御座います。お恥かしい品で御座いますがお納め下さいませ。

第十節　雛祭の祝物持參の挨拶

お嬢樣も定めしお身大きくお成り遊ばしましたことで御座いませう。これは誠にお粗末の品で、お目にお掛け致しますやうな品では御座いませんが、お嬢樣のお飾句の玩具で御座いますが何うぞお納め下さいませ。

第十一節　入學に關する挨拶

通知の場合　其後は大變御無沙汰致しました。いつもお變りなくて何よりで御座います。時に御心配をお掛け申して居りました入學試驗も、お蔭樣で合格して一昨日入學を許されましたから何うぞ御安心下さい。本年の受驗者は、募集人員の十數倍も御座いましたから心配したのですが、幸ひに入學出來たわけで御座います。この上は一意專心勉强致しまして相當の成績を擧げたいものと思つて居ります。何うぞこの上とも御指導を願ひます。

本人へ祝賀の場合　此度は某學校へ好成績で御入學なさいましたさうで、貴方樣はもとより御兩親樣を初め、皆々樣のお喜びはまた格別で居らつしやいませう。本當にお芽出度う御座います。何うぞ御入學の後は時々お遊びに入らつして下さいませ。お待ち申して居ります。お身體を御大切に御勉强遊ばしませ。

入學者の家族への場合　常々お話で御座いました御子息が、此度優等の御成績で何校に御入學なさいましたさうで、御本人樣は申すまでもなく皆樣も定めし御滿足のことで御座いませう。お祝申上げます。素より御入學は豫期致して居りましたが、いよ〳〵御入學遊ばしたと承り、今更にお嬉しう存じます。何うぞお身體にお氣をお付けなさいまして、この上ともに御勉强なさいますやう、御本人樣へお傳へ下さいませ。これは誠にお粗末な品で御座いますが、お祝ひのお印にお赤飯を蒸しまして御座いますから、お口汚しでは御座いませうが差し上げて下さいませ。

家族より答禮の場合　貴方樣にはいつも〳〵御心配ばかりお掛け申して居りましたが、此度靜子が漸く入學を許されまして皆の者もやつと安堵致しましたやうなわけで御座います。就きまして貴方樣には早速のお祝ひを頂戴致しまして誠に有難う御座います。何分子供のことで御座いますから、本人よりは私どもの方が却つて心配致しましたやうなわけでお恥かしう御座います。貴方樣の御申し聞けの事どもはよく本人に申し聞かせまして御座いますが、入學式の前に本人をお禮に差上げますから、何うぞ細々とお諭し置き下さいますやう特にお願ひ申し上げます。

第十二節　就職依頼の挨拶

依頼者「……皆様のお導きで、どうやらこの三月は、某學校を卒業させて頂くことになりましたが、厚かましい望みでは御座いますけれども、出來得るなら、當地で何かお仕事をさせて頂きたいと考へて居ります。不束者では御座いますが、何と何々とには多少自信も御座いますから、大體そんな方面で使つて頂けます所がありましたら、どうかお世話頂きたいと存じまして、お願ひに上りました。どうぞお心にお掛けおき下さいますやうお願ひ申上げます。……履歴書を三通持參致しましたから、お預りおき下さいませ。」

主人「もう卒業で……それは結構でいらつしやいますね。及ばずながら心掛けておきまして、出來るだけ御盡力いたしてみませう。」

第十三節　榮轉祝ひの挨拶

客「此度は、御榮轉でお目出度う御座います。」

主人「有り難う御座います。皆様のお引立で……でも、こんなにお親しく願つて居りましたのに、お別れ致しまして、何も知らない所へまゐりますのは、本當に心細う御座います。」

客「本當に、折角御懇意にして頂いて居りましたのに……お名殘り惜しう御座います。何かとさぞお心忙しいことでいらつしやいませう。私どもで出來ますことなら、何んでも喜んでお手傳ひ致しますから、お心おきなく仰せつけ下さいませ何なりとお役に立ちたいと存じますから。」

主人「御親切さまに恐れ入りました。」

第十四節　新築祝ひの挨拶

客「大層お立派に御普請がお出來になりまして、お目出度う御座います。隨分御便利なお間取で御座いますね。お廊下の廣いのは、本當に結構で御座います。まあ！　このお床柱のお立派なこと。」等々。

主人「有り難う御座います。至つてお粗末な普請で御座いましてね。この座敷などは、夕方までお火が要りません。今度は、御ゆつくりと、日向ぼつこをするつもりでお出で下さいませんか。」

第十五節　壽筵の際の挨拶

これは間接に申上げる挨拶の言葉である。

「お祖母様には、米壽（或は喜壽）でいらつしやいますさうで、誠にお目出度う御座います。珍らしい御長命で、然もお丈夫でお羨ましいことで御座います。私どもゝ是非あやからして頂きたいもので御座いますね。これはお祝ひの印で御座います。お羽織下の赤いおちやんちやんを作つて參りました。お召しになつて頂けば、私もお祖母様にあやかれさうな氣が致します。どうぞ、あなた様からよろしくお祝ひ申上げて下さいませ。」

第十六節　引越の際隣家への挨拶

いくら世の中が簡單を尚ぶやうになつたといつても、蕎麥屋任せに引越し蕎麥を配らせて、それで挨拶のつもりでゐるのは物識らずの骨頂といはねばならぬ。

引越し蕎麥の習慣は必らずしも惡くはないが、主人或ひは主婦自身が、向ふ三軒兩隣ぐらゐには、當然挨拶に出るべきであらう。その言葉は、

引越して來た人「私は、今日お隣りへ越してまゐりました、何々と申す者で御座います。いろ〳〵とお世話様になりますことで御座いませう。どうぞ宜しくお願ひ申上げます。」

主人「御丁寧に恐れ入りました。どうぞよろしく……」

第十七節　召使より新主人への挨拶

「此度こちら様に御奉公させて頂くことになりまして、誠に有り難い幸せで御座います。何もわかりません者で御座いますから、さぞお使ひ難う御座いませうけれども、一生懸命にお仕へ申上げたいと考へて居りますから、御面倒様でもどうぞ宜しく御教導頂きたう存じます。」

第十八節　來訪者に對する挨拶

主人「さ、どうぞお當て遊ばして。（或はおかけ遊ばして）」と、座蒲團なり、椅子なりをすゝめる。

客「はい、有り難う存じます。」

と答へておいて直ぐにはそれを受けず、椅子席なら立つたままで——

客「大變御無沙汰を申上げて居りました……」

主人「手前からこそ……皆様、御機嫌よくいらつしやいますか……」

客「有り難う御座います。お蔭様で皆な元氣で居ります。此方様でも、皆様お寒さのお障りはございませんか……」

主人「有り難う御座います。手前どもでも幸ひ皆な元氣で御座います。……まあ、どうぞお當て(或はおかけ)遊ばして下さいませ。」

客「恐れ入りました。」

と、初めて指定された席に着く。

第十九節　初對面の挨拶

「お初にお目にかゝります。私は何々と申す者で御座います。かね〳〵何樣からお噂は伺つて居りましたが、大層御立派な御事業を遊ばしていらつしやいますさうで、有り難いことに存じて居ります。不東な者で御座いますけれど、今後はよろしくお願ひ申上げます。」

第二十節　轉居暇乞の挨拶

客「今日は一寸お暇乞ひに伺ひました。長い間御懇意に願ひまして、一方ならぬお世話樣になりましたことを、しみ〴〵有り難く存じて居ります。時々出てまゐりますから、その節は是非寄らせて頂きたいと存じます。彼方へお出掛けのことも御座いましたら、是非お立ち寄り下さいますやうに……では皆樣醫分お體をお大事に遊ばして下さいませ。」

主人「お事多いところを、御丁寧に恐れ入りました。誠にお名殘り惜しいことで御座いますね……若し當地へ御用が御座いましたら、何なりと御遠慮なく仰せつけ下さいませ。喜んで致しますから……ではどうぞ吳々もお大事に遊ばせ。」

第二十一節　弔問の挨拶

お悔みに念入りの長い挨拶は無用である。

「お悔みに伺ひました。」

と丁寧に禮をして名刺を出せばそれでよい。

親戚の間柄なら一寸上つて、靈柩の前に嚴かに禮拜させて頂き、それから家族の者に對して、

「誠に飛んだことで御座いました。どんなにかお力落しのことでいらつしやいませう。」

と申し述べる。香花料を贈る場合には、その場の樣子をよく伺つて、家人に直接なり、或ひは受附の者なりに渡しながら、

「これはほんの心ばかりの物で御座います。御靈前へお花でもお供へ下さいますやうに……」

總じて不幸のときばかりは、謹んで弔意を表すといふだけに止め、餘りくだ〳〵しく病氣の經過などを尋ねたり、細々と同情の言葉を寄せることは、却つて避けた方がよい。

夫とか妻とか子供とかの、最も近しい者を失つた人にとつては、深い同情の言葉ほど堪へ難いもので、同情が同情にならぬ場合がある。たゞ、

「お察し申上げます。」

といふだけの弔辭などは、千金の有難味があるものである。

第二十二節　會合の挨拶

客「今日は、お招きに預りまして誠に有り難う存じます。大喜びで參上致しました。」

と謝意を述べ、若しもその招待が何かの祝事であつたならば適當のお祝ひの言葉を申し述べる。また單なる社交上の御招待ならば、話題は小出しにして、終りまで上手に使ふやうにするのである。

第二十三節　停車場に見送る時の挨拶

見送り人が大勢の場合は、發つ人を獨占するやうな、長い挨拶は控へなければならぬ。分けても家族を殘して旅立つ人の場合は、殘る家族にしみじみと別れを惜む機會を與へるやうにする。

停車場の見送り方

見送られる人「お忙しいところを、わざ〳〵恐れ入りました。どうぞ皆樣御機嫌よう。」

やうに……では御機嫌よう。」

第二十四節　停車場に出迎る時の挨拶

出迎への人「まあ！　暫くで御座いました。」

着いた人「お久しぶりで、お忙しいところを誠に恐れ入りました。」

出迎への人「御道中は、お變りもいらつしやいませんでしたか」

着いた人「有り難う存じます。お蔭様で……」

出迎への人「さぞお疲れでいらつしやいませう。今日は御ゆつくりお休み遊ばすやうに……何れまた緩りとお目にかゝらせて頂きます。」

着いた人「恐れ入りました。落着きましたらお邪魔をさせて頂きます。」

出迎への人「是非どうぞ、お待ちいたして居ります。」

第二十五節　入營者に對する挨拶

「此度はいよ〳〵御入營ださうで、誠にお目出度う御座います。御健康に折紙をつけられたお立派なお體格で、軍服をお召しになつたら、本當に頼しい軍人さんで御座いませうね。御兩親様のお蹤下にお出でになりますのとは違ひまして、初めのうちは何分御不自由にお感じなさいますことも御座いませうが、お馴れになりますと、却つて規則正しい御生活の方が樂におなりになつて、御健康も一層よろしくなるさうで御座いますね。

お留守中は時折お見舞申上げて、及ばずながら御兩親をお慰め申上げますから、どうぞ御安心なすつてお務め下さいませ、では臭々も御大切に……」

第二十六節　退營當日出迎の挨拶

今日は滿期除隊になられまして、御無事でお歸りになり何よりお芽出度う御座います。お宅様の方でも定めし皆様がお待ち兼ねで居らつしやいませう。お心がお落着になりましたら、私の方へもお出掛け下さいまして、御在營中の面白いお話などお聞かせ下さいませ。必らずお待ち申して居ります。

第二十七節　出征を送る挨拶

「いよ〳〵御出征のことになりましたさうで……本當に御苦勞様で御座います。直接國難に當つて下さる皆様に對しては、たゞ有り難いと申上げるより外御座いません。お留守宅の方は、及ばずながら私どもでお見舞申上げて、出來るだけ御不自由をお掛けしないやうにと考へて居りますから、お家のことは御心配なく御奮闘をお願ひ申します。御武運長久を祈つて居りますよ……ではどうぞ宜しくお願ひ申します。」

第二十八節　凱旋兵への挨拶

「お目出度う御座います。本當に御苦勞様で御座いました。傷

一つお受けにならずに御凱旋なさいましたことは、全く御幸運でいらつしやいましたね。國家のために大變なお骨折りを、心から御感謝申上げます。」

第二十九節　見舞の挨拶

近火見舞の場合　今晩は御近所がお騒々しいので御心配で御座いませう。御迷惑のお荷造り其他のお手傳はもうお出來になりましたか、風向きも宜しいし大分離れて居りますから、お宅様は大丈夫とは思ひますが、何なりとお手傳ひ致します。何うぞ御遠慮なく仰やつて下さいませ。

類焼見舞の場合　今朝程新聞で拝見致しますと、昨夜御近所からの御出火でお宅様も御類焼なさいましたさうに御座いますが、皆様は御無事で在らつしやいますか。實は早速主人がお伺ひして、何んかとお手傳を致しますのが本意で御座いましたが、二三日前から地方へ參りまして留守中で御座いますもので誠に失禮致します。何れ一兩日中に歸宅致しますから直ぐお伺ひ致させます。これは誠にお粗末で御座いますが、お見舞のお印で御座います。若し私でお役に立ちますやうで御座いましたら、何なりとお手傳致しますから仰しやつて下さいませ。尚ほお入用の品は何なりと御遠慮なくお申付け下さいませ。

病氣見舞の場合　お聞き致しますとお宅のお父上様は、先達てから御病氣ださうで御座いますが御容態は如何で御座いますか。本年は大變季候が不順で御座いますから、御病人にはさぞお障りになることで御座いませう。お宅様のことで御座いますから、何から何までお手ぬかりは御座いますまいが、精精お氣をお付け下さいませ。これは誠にお粗末の品で御座いますが、ほんのお見舞の印で御座います。御病人に差上げては如何か存じませんが、主治醫の先生のお許しが御座いましたらお目にお掛け下さいませ。どうぞ精々御養生なさいまして一日も早く御全快なさいますやうお祈り申します。

第三十節　祭禮に人を招く挨拶

其後は誠に御無沙汰致して居りますが、昨今は大變涼しくて凌ぎよくなつて參りました。皆様お變り御座いませんか。私の方も皆な達者で喜んで居ります。就きましては例年の通り本月何日が氏神様のお祭で御座いますから、皆様お揃ひでお出掛け下さいませ。本年は例年の大神樂やお神輿様の外に、素人芝

居や素人拳絃相撲も致しますさうで、過日から若者達がお稽古に夢中になつて居ります。其外田舎は田舎なりに色々の趣向を凝らして居りますさうで御座いますから、例年よりは一層賑ふ事と存じます。何のおもてなしも出來ませんが、お子樣をお連れなさいまして、御祭からお泊り掛けでお越し下さいませ。お待ち申して居ります。

第二章　電話と社交

社交上電話のかけ方も、一つの大切なる事項である。それにもかゝはらず世間には、電話のかけ方ぐらゐ何んでもないやうに思つて、無雜作に間違ひだらけのかけ方を繰り返してゐる人が多い。そのために相手の感情を害したり、意思を疎隔したり、大事な顧客に對して信用を墜したりしてゐるものが、どのくらゐあるか判らないのである。

若しもこの損害が目に見えたら莫大な損害で、電話の應對を輕く考へ込んでゐる人達も氣がつくことであらうが、幸か不幸かこの損害は無形である。

電話上の言葉遣ひにしても、普通に人と逢つて會話をする遜りにすればよいのだと言ふ人もあらうが、それは單なる理窟に過ぎない。殊に電話ではお互ひに顔を見てゐないだけに、一寸した言葉や文句の言ひまはし方が、相手の感情の榜徴に觸れるものである。直接對面して居れば、相手の顏色を讀みながら話を進めることも出來るが、電話ではそれが利かないのであり、此處に電話のかけ方や聞き方について、特別な研究の必要を生じて來るのである。

殊に電話の使用されることは、文明の進歩に伴つて急遽に殖えて行きつゝあり、今後どの位ゐまで商賣に社交に、人と人との媒介體となつて行くか計り知れぬものがあるから、簡單に電話のかけ方ぐらゐ何んでもないと片附けて置けるものではない。油斷なく再吟味して見るならば、人の氣づかぬところに成功の鍵を發見するであらう。左に一通り電話應對に關する心得を述べて、參考に供する所以である。

第一節　電話の正しいかけ方

かける時刻　特別に急用でもなければ早朝、深夜、食事時などは成るべく遠慮するのがよい。若し已むを得ずかけるときは「お時間も考へませんで、まことに失禮で御座いますが…」と、一言お詫びすべきである。

以上は一般的にいへることであるが、それ以外にも如何なる人もそれ〴〵仕事の都合で忙しい時間、比較的忙しくない時間といふものがある筈だから、先方の都合を一應念頭において電話をかけるやうにせねばならぬ。

電話番號　電話をかけるのに第一正確な番號が必要である。平素かけつけたところでも、ウッカリして間違ふこともあるが間違はれた先方としては甚だ迷惑であるのみでなく、手數と料金の無駄をすることになるから、平常必要なところの番號は拔き書にして、電話室の見易いところへ張り出しておくと便利である。

間違へやすい番號、例へば千二百六十七番などの場合は能く氣をつけて、一千二百六十七番といふ風に言へば解りやすくて便利である。

又絕えず電話をかけるやうな所は拔き書に赤字を打つておくとか、或ひは番號を記憶してしまふことであり、記憶の方法としては四六四九番といふやうに、數字を特別の讀み方にすると容易に覺えられるものである。

先方が電話口に出たときは、「モシ〳〵、神田の一千二百六十七番でいらつしやいますか」といふ風に、先づ先方の番號を確めた上「こちらは上田で御座いますが、貴下樣は山本樣でいらつしやいますか」といふ風に、こちらの名を先にいつて先方を確めるのが作法である。かくて始めて用件を話す順序となるが、先方を確めずに大事な用件を話してしまひ、若し間違つてゐたとしたら取返しのつかぬことになるのである。いつもかける知人の間であつたら大抵電話口の聲で、間違つてゐるか居ないかゞわかるから「モシ〳〵、木村樣でいらつしやいますか、私は山川で御座います」といふ具合に先方の名前を先に尋ねても失禮にならない。

呼出しを待たさぬこと　「旦那樣、何々樣から電話で御座います」と取次が知らせたときは、急いで電話口へ出る。すると先方の女中か書生の聲で、「ちよつとお待ち下さい」といつて一旦引込み、間もなく先方の本人が出ることがある。然かしこれは呼出された方にとつては、餘り感じのよいものではない。殊に電話口に出てから散々待たされたりすると不愉快にさへなるものである。

電話は用事があればこそかけるのであるから、取次で濟むことなら兎も角、主人なり廣樣なりに電話口まで出てもらふ場合は、女中などを使はず、自分でかけるべきである。

ろなく女中にかけさせた場合でも、先方が出ない中に電話口に出て、待つてゐるのが禮儀である。

要件は正確に　よく他人の電話をかけるのを聞いてゐると、だら〳〵と話を延ばしてゐながら極めて不得要領なのがあるが電話では特にパッキリした言葉で、用件は簡單明瞭に濟ませるのが本旨である。

電話のかけ方

從つて電話で話を打ち切るときは先方が果して用件を諒解したかどうかを確めねばならぬ。折角話しても先方が諒解してゐなければ何の役にも立たず、若し又用件を誤解してゐたのでは役にたゝないのみでなく、後に至つて思はぬ迷惑を及ぼすことも生じて來るものである。

電話の終つた時　話が濟んだ後は「失禮致しました、御免下さい、さやうなら」等と、その場合々々によつて、丁寧にハッキリと挨拶をせねばならぬ。用件のみでガチャッと受話器を掛けてしまふのはどんな親しい間柄でも慎しむべきである。

殊に先方が目上の人であるとか顧客である場合は、必らず先方で切つてから、こちらで切るやうにすべきで、それでないと先方の話がまだ濟まないことが往々〳〵あるものである。また受話器は丁寧に取り外しをしないと、先方の耳に強くひゞいて感情を害するものである。

第二節　正しい電話の聞き方

電話の聞き方はかけ方と同樣に慎重な態度を要する。殊に商賣上絶えず顧客から電話で、注文や照會を頂く場合は、かけ方以上に聞き方が大切である。

信號があつたら直ぐ出ること　チリ〳〵とベルが鳴つたら直ちに電話口に出ること、待たすのは何より失禮である。來客と應接中電話がかゝつて來た場合は、「相濟みませんが、一寸失禮させて頂きます」といふ風に、來客に其旨を斷つて電話にかゝるべきである。

名乘の注意　急いで電話口へ出たならば、先方から名を訊かれない先に、此方の名を告げるやうにすると、先方でも間違ひがないことが確められて安心しやうし、此方も向ふから訊かれるのを待つてゐるより、時間の節約が出來て双方とも利益である。

電話で一番困るのは聞き慣れない人の名前である。發音の似よつたものは特に間違ひ易いから、かゝる場合は解るまで聞き返してよい。それは決して失禮にはならない。充分聞きたゞしもしないで、後で間違を生ずることこそ却つて失禮である。

商人が電話で注文を受けた場合は、特に先方の住所氏名を間違ひないやうに聞くべきであるが、姓名には同音異人あり町名でも區の異なるものがあるから、この點は特に間違はぬやう細心の注意を拂はらねばならぬ。

本人が不在の場合　若し主人が不在中主人への電話があつたら取次に出た者は「只今主人は不在でございますが、承つておきまして宜しいことで御座いましたら、おつしやつて頂きます」といつて先方の意向を伺ひ、若し用件を話して呉れたならば、取次に出た者は一度自分でその要件の趣きを繰り返して先方に聞いてもらひ、間違の有無をたゞして置かなくてはならない。先方の話を聞いて自分ではわかつたと思つても電話では往々〳〵間違ひの生じやすいものであるから、念の上に念を入れることが大切である。

そして伺つた用向は、直ぐ黑板なり紙片なりに書き止めておき、主人が歸宅されたら直ちにそのことを取次ぐやうにする。忘れるつもりでなくても忙しい場合は、つい忘れることがあるから、如何なる場合でも必らず書き止めて置くやうにせねばならぬ。

綿通した人が聞くこと　電話を聞く場合新參の女中や慣れない書生を出してはならない。先方から何を訊かれても滿足な返事が出來ないやうでは、先方は非常な迷惑である。殊に商店の場合などは是非商品知識を豐富に持ち、店務に通じた人を出すことである。何を問はれても「一寸待つて下さい」と、一々支配人から聞いて返事をするやうでは、顧客は面倒がつて怒つてしまふにきまつて居る。店務に不精通のため過失があつたり、對話上で先方の感情を害し大切な顧客を逃した例は少くないのである。

留守を使はぬこと　名忙な實業家や名士の家庭で屢々見受ける

ことであるが、主人は在宅しながら留守を使ふ者が少くない。「御主人は御在宅ですか？」と訊かれたら、取次の者はその場ですぐ不在か在宅かを、ハッキリと返事すべきである。然るに「ちよつとお待ち下さい」と一旦待たせてから「ハイ居らつしやいます」では、先方に決して好感を與へない。

用件についての返事は、「ちよつとお待ち下さいませ」と、一應先方に待つてもらつて主人にその旨を取次ぐのが順序であるが、この場合主人たる者が先方の申込みに應じられないときは、その理由をハッキリ先方に告げて斷らせるやうにせねばならぬ。

第三節　電話の言葉

電話の言葉は普通の會話を、そのまゝ移せばよいやうに思はれるが、實際に當ると、なか〳〵難しいもので、あまり丁寧すぎても面白くなく、さらばといつて簡單すぎては、いかにも無愛想のやうに聞えて感じのよくないものである。

言葉遣ひは丁寧に　然かし何れかといへば言葉づかひは丁寧に充分敬意を持たせねばならない。面と向つての話では氣に障らないことでも、電話のやうに、耳だけから入るものは、粗雑な言葉は耳障りになるものである。

從つて電話に出たならば、相手が面前にゐる氣持で應對に話し、たとへ親しい間柄でも、決して不眞面目な調子になつてはならぬ。よく電話口を防ぎもせず、大きな聲で內緒話をしてゐるのなどを見受けるが、第三者が聞いても氣持のよいものではない。

明朗で平靜に　電話の音聲は、明朗にして平靜で、然かも親しみのあるものでなくてはならぬ。大聲、小聲、早口、氣取つた聲、含み聲、高調子、泣き聲などはすべて禁物である。そのためには早口を矯正するとか、感情の高ぶつてゐるときには電話に出ないやうにするとか、適當の方法を講ずべきである。また電話の聞きとれぬ際は、失禮なことを言はぬやうに氣をつけねばならぬ。語尾をハッキリさせることも大切で、これが不明瞭なため、全然反對の結果を生ずるやうな場合も往々あるのである。

第五編　饗應と禮儀作法

第一章　和洋共通の作法

作法といふ言葉に含められるものゝ中で、最も重要視されるものが食卓作法であり、又最も間違ひ易いものもこの作法である。それで本章においては日本、西洋、支那の各々について說明するが、然らばといつて日常家庭における食事の作法は、一々煩はしく論述する必要はない。就交上是非心得て置かねばならぬ宴會常道ともいふべきものにつき、一通りの作法を記述するに止めるが、現代は公私の宴會に、和食よりも洋食を用ふることが流行してゐるから、主としてこの方に重きを置いて說明することにする。

第一節　宴會時間の心得

時間の嚴守　宴會に招待を受けた時は、決して指定された時間に遲れてはならぬ。一般日本人の通癖として葬式時間、宴會時間などゝ勝手な名稱をつけ、態と氣を利かした積りで時間に遲れて行く惡い習慣があるが、歐米では遲刻することを、非常な失禮であり恥辱であるとしてゐる。

すべて饗宴などの場合は、先方に相應の支度準備があるから、時間に遲れるのは先方に對する失禮のみか、他の來客全部に對してもまた甚だ迷惑を及ぼすのである。

宴會に招待されたら、指定された時間より、約十分間前に參集するのが禮である。尤も餘り早くから押しかけるのも、まだ準備の整はぬ先方に對し、迷惑を與へるものと心得ねばならぬ。

以上は被招待者側であるが、招待者側は來客以上に時間を嚴重に勵行しなくては、客に對してこの上もない失禮になるから、少くも主人は定刻二十分以前から、待受けるやう準備を整へねばならぬのである。

開宴時間　開宴の時間は各國によつて習慣に多少の相違があり英國では指定時間より早からず、定刻を過ぐる十五分以內に參集し、二十分過ぐれば遲刻者などに構はず宴を開き、佛國では定刻十五分前から參集し、定刻には必らず開宴する。其他の歐米諸國では、この間を折衷して宴を開くのが通例になつてゐる。然るに日本の和食宴會は、定刻に參集した者は火鉢、煙草盆と睨め合ふこと一時間近く、飲みたくもない茶を

何杯か飲んで後ち、漸やく客の顔が出揃ふといふ體である。以上を參酌して日本式の宴會は問題外とし、洋式の宴會ならば、定刻二十分過には遲刻者に顧慮せず、開宴するのが適當であらう。

第二節　服裝其他の心得

服裝　宴會に列するには先づ容儀を整へ、服裝を着するのが和洋通じての禮である。日本式では服裝を指定することは少ないが、洋式にあつては招待狀に服裝を指定するのが例で特に略式にての附記のない以上は、必ず禮服を着さねばならぬ。また略服にての附記があつた場合にでも、客は主人より略裝してはならぬのが原則である。例へば主人は背廣服で出る場合でも、主人が相當地位のある人ならば、客は通常服以上の服裝で出なければならぬ。卽ち主人の地位を斟酌してタキシードを着するとか、モーニングを着用するとか、背廣でも黑の三つ揃ひを着用するとかするのが禮で、詰襟などで出席するのは非常な失禮である。從つて主人もまた招待狀へ、特に略式と附記して置きながら、自分が燕尾服などを着用するのは、客に對して失禮であることも忘れてはならぬ。

着席　如何なる場合でも、主人主婦が指定した時に着席しないのは、先方及び他の客に對して失禮である。また主人主婦が指定した席へは、直ちに會釋して着くべく、この場合の遠慮は却つて無作法であり、且つ他の客に迷惑を及ぼす。

日本の習慣として、互ひに席を譲り合ひ、爲めにいつまでも席が定まらぬやうな場合がよくあるが、席を定めるのは主人主婦の當然の職能で、上座に招ずるのは招ずるだけの理由があるから、主人主婦の厚意を受くるのが、饗應に臨む主要な目的である以上、主人主婦の厚意に背き互ひに席を譲り合ふ如き禮を失するだけのことで全く意味のないことである。

態度と姿勢　如何なる宴席に臨んだ場合にでも、姿勢は正しく保つべく肱を張つたり、足を組んだり、投げ出したり、貧乏揺りをしたりするのは和洋を通じての禁物である。態度は飽くまで愉快に、温和閑雅の品格を保ち、大聲を發し、或は隣席の人と密々囁いたりするのは東西共通の無作法と心得ねばならぬ。この外鼻をかんだり、咳つたり、嚏、嚏、欠伸などをするのも失禮で、萬一その必要があつた場合はそつと横を向いて手巾又は紙をあてゝなすべきである。食事中前後左右を見廻したり、他人の喰べ方や、料理に注目するのは無

作法を通り越した非禮である。また自己一人のときならば格別、他人と席を列する宴席で新聞、雜誌、書翰などを讀むのは絶對になすまじきことである。

自分の欲するものが手の屆かぬ處にあつたら、給仕人に命じ、若し給仕人が手近にゐなかつたら、附近の同席の人に頼んで取つてもらふのが禮で、勝手に座席を離れたり、他人の膳部や料理等の上から、猿臂を延ばして取るなどは禁物である。食事の際に肱を張るのも、多人數集つた宴席では思ひがけない疎忽をするばかりか恰好がよくない。又ポケットに手を入れるのは、和服の懷手と同樣非常な無作法である。

第三節　料理に就ての心得

喰べ方　セカ〳〵と貪る如き喰ひ方、大口を開けて頬張る如き食ひ方、食するに音を立てたり、食器をガチャ〳〵させたりするのも、東西共通の無作法である。

好まざる料理　饗宴の際に出された料理は、悉く食するのが主人の厚意に酬ひる賞賛の表示で、主人としては最も喜ぶところであるが、嗜好は人によつて同樣でなく、又その量も體質などによつて差異があるから、自分の好まない料理を出された場合は、無理に食ひ盡さなくても差支なく、この場合和式にあつては初めから箸をつけずに置くべきである。

洋式では運ばれた料理を、簡單に謝絶すればよいが、此際嫌ひだからとか、もう喰べられないとかの理由を述べるのは却つて失禮とされてゐる。

料理の批評　出された料理を彼是と批評することは、徒らに自己の野卑な人格を暴露するものであり、主人側の厚意に對しても甚しい侮辱を加へるものであるが、特別に珍らしい料理は、これを賞美して差支はない。

飲酒の心得　酒は切り上げ時が肝腎である。洋式宴會では整然と順序が進んで行くが、日本式の宴會では、盃の離し工合によつて、宴の順序が非常に亂雜になり、主人側及び他の客にも少からぬ迷惑をかけるものであるから、適度にして切上げるやう注意せねばならぬ。

酒を飲ませて醉ふなといふのは無理であるが、程よく呑み愉快に醉ひ、主人側の歡待を快よく受くべきである。然かし酒は度を過し易いもので、程よく愉快に醉ふといふのが難しく、動もすると飲み過し、席も次第に亂れてくる。亂になつては飲酒も、百害ありて一利なく、最早禮儀作法の問題では

ない。

洋式の宴會だと謝絶の方法も簡單で、給仕が注ぎに來たとき輕く手を擧げるとか、左手の食指を盃の緣に當てゝ、不要の旨を合圖すれば濟むが、日本式の宴會ではさう簡單に行かない。酒の飲めない表示法として、盃を伏せておいてもそれを取り上げて突喊してくる。當人に取つては迷惑千萬な話で、折角の厚意も惡意となつてしまふ。下戸が酒を謝絶したならば、二度と勸めない作法を作ることは、日本式の宴會で最も必要な改善である。

辭去の作法　食事の終るのを待つて、直ちに辭去するのは餘りに現金過ぎた非禮である。主客の食事が終つたなら、座談又は喫煙し、然る後ち適當の時間を見計つて辭去すべきである。

總て宴席では、目下の者にも懇切丁寧を旨として應接するのが、紳士として奥床しい人格の輝きである。招かれた先の使用人に對して、横柄な態度で臨むやうなことがあつては、威容を示さんとして却つて威容を傷けるものである。

第二章　和食の心得

第一節　席順

正座、上座は床の正面のことで、床龍が第一位、遠樹のある方が第二位、床脇が第三位、床脇の並びを第四位とする。然かし男女同人數又はこれに近い場合は、床の間の左を男の座席順、右を女の座席順とする場合もある。床の間のない室ならば入口より遠い方、或は入口の正面に在るところを上位とするのが普通である。

着席については、その順序を主人側より指定されたらば輕く會釋して遠慮なく座に着くべきである。但し日本の習慣として男子は女子の上位につく不文律があるから、主人側の懇望で婦人が上座に招ぜられたときは、一應これを辭退するのも作法であるが、再應これを强ひられたときは、主人及び他の客に會釋して上座に着くべきである。遠慮を重ねてゐると、後からの客も席に着くことが出來なくなり、お互ひの迷惑であるから、主人側に指定されたら成るべく早く着席すべきであるが、普通の順序は歐米と反對で男は先、婦人は後に席につき、主人は最下位につくのが作法である。

第二節　配膳の作法

膳には本膳、二の膳、三の膳等があつて各々その形を異にしてゐる。本膳は大きく、二の膳三の膳は稍や小さい。膳の足にも猫足、銀杏足、胡桃足などの種類がある。八寸膳は左右二枚足でそれに窓があいてゐる。會席膳は方形で足なく普通方尺二寸、黑、瀧、朱などの漆塗が通例である。吸物膳は會席膳よりも稍や小さく、これには普通低い足がついてゐる。

盆は古名を「ひらか」といひ、土器中の扁つたいものゝ總稱であつたが、現今は專ら木製が用ひられ漆塗と生地とがある。「ついかさね」は昔貴人に食物を供するとき用ひたもので、臺には窓があいてゐる。三方とはこの窓があいたもの、四方又は小四方は窓が四方にあいてゐるものを言ふやうであるが、現今では神前または儀式張つたときや貴人に供する以外には餘り用ひられない。

膳の出し方に正式と略式とがあるが、現時は多く略式に從つてゐる。

膳の持ち方

正式の饗膳ならば先づ本膳から出し、これが出揃つてから主人は中央の下座に座し、來客一同に挨拶して退き、次に二の膳三の膳が出る順である。膳を撤するには飯を終へて全部が漸く箸を置いた頃、上席の膳から撤し始め、總て撤き終つた時主人は再び出て挨拶をなし、食後の茶菓を饗してから、客室又は餘興場に導くのである。

今日普通に行はれてゐる略式では、先づ吸物膳に刺身取肴などを添へて出し、多少儀式張つて銚子、盃を出すときでも、それが一とわたり濟めば直ちに猪口と燗酒に替へる。かくて酒がやゝ酣となる頃を見計らひ、主人が末座で挨拶し、二の膳、三の膳を略する場合には、吸物膳に飯、汁、一二の取肴、香の物などを出すのである。

第三節　盃の献酬

昔は式三献といつて銚子、土器で献酬の作法があり、さもないときには本膳、二の膳などを出してから、中酒の禮が行はれ其後吸物を出し、肴が添へられる例であつたが、近來は冠婚の儀式以外に用ひられない。

盃の献酬はまづ杯を三方に載せて出されたとき一禮し、兩手で三方を少し引き寄せ、同じく兩の手で杯を取り上げてから、左の手先を疊につき、右手で酌を受けるのが本式の作法であり、また兩手で受ける流儀もある。受けた酒は強ひて呑む必要なく、一寸杯を戴いて唇につけ、杯中の酒（した）を別の杯（したみ）にあける。もし「したみ」が添へてないときは、吸物椀の蓋を取つてこれにあけても差支ない。さうして更に兩手で杯を持つて再び唇につけ、そのつけたところを右手の拇指の腹で、右の方へ二度拭いて三方に載せ、拇指は懷紙を出して拭き、三方を押進めて目禮する。この場合杯洗を出すき、拇指でなく懷紙でする流派もある。この杯を拭くとのは本式でないが、もし出されたならば杯を杯洗の水で洗ひ懷紙で拭くべきである。元來正式のときは褥は敷かぬものであるから、酌人が主人または主婦であつたならば、客は當然これをはづさねばならない。

近來は盃の献酬が亂雜になり、一々以上の作法を守るものも少なく、また式に從つて三方を出す宴もないが、一應は心得て置いて然るべきである。

第四節　飯の喰べ方

飯椀は兩手で執つて左の掌に載せ、右手に箸の中央部を持ち、手の内側を仰向けて膝の上に置き、適宜にこれを持ち直し左手の拇指を椀の緣にかけ、他の四指を底に當てゝ持ち上げ、二箸三箸食したならば、右手に箸を持つたまゝ兩手で椀を膳に置き、次いで箸も下に置いて兩手で汁椀を取る。さうして箸を置いたまゝで汁を吸ひ、次に箸を取つて汁の實を食し、また箸を下して汁を吸ふ。尤も箸で實を押へて汁を吸つても差支はない。次に飯に戻り、また汁に移るのであるが、二度目からは汁の實を先に食して汁を後で吸ふのである。次に飯に戻つて今度は本膳の膾に移る。膾は膳に置いたまゝ、左手を一寸疊についてこれを挾み、皿の緣の横で膾を切つて食するのが法である。次にまた飯に戻り、その次は壺に移る。壺は汁のあるものならば、取り上げて實を食し汁を吸ひ、汁のないものならば、膳に置いたまゝで喰ふ。次に飯、次に二の汁の順序となるが、これは蓋を右手に取り上げ、左手を添へあしらつて右側に置き、椀を左手に取つて實を先に汁を後に吸ふ。また飯に戻り、更に平に移る。平の蓋は本膳の汁の作法にならひ、蓋を右手で取り上げ、左手に移して食し、汁のあるものならば箸を置いて吸ふ。次に飯、次に三の汁の蓋を左手で取つて左側に置き、二の汁の要領で實を食し汁を吸ふ。次に飯、次に刺身を箸で醬油皿に入れ取り上げて食する。次に飯、次に猪口を右手に取つて左手に移し、箸を取つて喰ふ。以上一巡終づたならば、その後はどんな順序で食して、も違法でないが、移り箸は絶對につゝしまねばならぬ。食し終つたならば湯を受ける。さうして最後の香の物で箸を納めるのであるが、箸は懷紙で拭いて箸臺に置く。箸臺のないときは膳の中に置き、決して緣にかけてはならぬ。

飯椀の受け方は、これを出すには箸と椀とを置いて左右の隣客を眺め、隣客がまだ食し終らぬやうであつたならば、一寸會釋して兩手で椀を出す。取るときもまた兩手を用ひ、決して片手で受けたり、拇指を椀の中や緣にかけてはならない。

第五節　箸の扱ひ方

箸は全體の長さの上から三分目位のところに、右手の拇指を當てゝ持つのが適當とされてゐる。下の方を持つのは不恰格であり、餘り上の方を持つてはまた目上の人に對して失禮とされてゐる。

箸の置き方

上座の客が箸を執らない先に箸を持つは無作法である。從つて上座の客にして箸を取るべきときに取らないのは、他の客全體に迷惑をかけることになるのである。

本膳は最初膾から始り、膾に終るのを本式とし、懷石は膳部が出揃つてから箸をつくべきであるが、儀式其他の都合で先に吸物が出る場合もある。吸物は冷えぬ中に吸ふべく、その際は箸を持つて差支ない。

箸の扱ひ方については、次の諸項が禁物となつてゐる。

及び箸　膳越に物を挾むもの。

移り箸　菜から菜に移り、飯に戻ることを忘れるもの。

迷箸　どの肴を挾まうか、又は菜に付けやうか、飯に戻らうかと箸が中途で迷ふもの。

突き箸　ものを挾まずして突通すこと。

突込箸　箸は舌頭に乗せる程度に運ぶべきもので、口中深く箸を突入れること。

かみ箸　箸を噛むこと。

こみ箸　口に物のあるとき更に食物を口に入れること。

にぎりこ箸　箸に着いてゐる飯粒を箸で落し、又は逆手に箸を握り看類を突き割ること。

ねぶり箸　箸を口中に入れて甜ること。

こぎり箸　煮物、汁の實などの下にあるものを、こぢ起して食すること。

探り箸　まだ何かないかといふ風に索つて見ること。

迴し箸　香の物を湯茶の中でぐる〳〵掻き廻すこと。

空箸　箸をつけながら、食はずに箸を引いて了ふこと。

第六節　汁の吸ひ方

前記飯の喰べ方の項で述べた如く、一の汁は最初汁を先に吸つて實を後に食する。二の汁は最初實を先に食し、汁を後にする。尤も一の汁も、二度目からは實を先にし、三の汁は二の汁の要領に從ふ。汁の吸ひ方にうけ吸ひといつて、汁の再進または酒などを通ひから受けて、膳に一應置かずに、直ちに吸ふことは禁物である。

第七節　膳のすゝめ方とひき方

本膳を持つには左手を膳の眞下、右手を右側にかけるのが本式であるが、二の膳、三の膳の如く膳下に兩手を入れ、四指を下に揚指だけを横の下縁にかけて持つて出ても差支ない。鼻より少し高く捧げるのは呼氣のかゝらぬ注意である。膳の下から足許を見て客前に進み、三尺ばかりのところで立ちどまり、左足を少し退いてその膝から先きに坐ると同時に、膳を客の左の方へ少し寄せて下に置き、兩手を緣に軽くかけて押進める。次いで二膝退いて立ち上り、上座に廻つて歸るのである。二の膳、三の膳は本膳と略ぼ同樣であるが、この膳部は揚指を兩緣にかけて持つて出るのを本式とするのと、二の膳を客の右方に三の膳を左方に置くだけが異つてゐる。四の膳を出すときは二の膳に倣ひ、五の膳を出すときは三の膳に倣へばよい。

膳のすゝめ方

膳をひくには先づ客前から三尺ばかりの處へ進み、右足を少し退いて坐し、一禮して一膝進め、膳の兩足に手をかけて手前に引き寄せ、前述の持ち方に倣つて立ち上り、下に向き直つて歸る。會席膳は足がないから左右の緣に軽く手をかける。ひき方の順は侑める時と反對に五の膳、四の膳、三の膳、二の膳、本膳と上席から先に撤くのである。

第八節　給仕の仕方

飯　飯をすゝめるには流儀によつて多少の差はあるが、本來は本酌、介添の二人でするのが正式である。先づ飯櫃を臺に載せ、手前に杓子を置き、右手を櫃の蓋にかけ、左手を添へてあしらひ、下手から上手へ「の」の字形に廻つて蓋を取り、露を切つて介添に渡し、本酌は蓋ともに飯櫃を兩手に持つて客前に行き、膝の上方にこれを置き、出された飯椀を右手の揚指と食指とで摘み、他の三指を延ばし左手を添へて受け、これを左手に移し、右手で杓子を取り、櫃の中を軽く左右に掻き分け、二すくひ半に盛る。これを受け方と同樣の持ち方で客にすゝめ、飯櫃を持つて上座を廻り元の場所に歸る。

御飯の盛り方

また飯櫃を臺に据ゑ、本杓子を前に置いて通ひの者と共に末席に控ゑ、通ひの者が盆を持つて客前に進むとき飯櫃を受持つた者は蓋を下手から上手に、「の」の字形に廻して取り、露を切つて横に置く。通ひの者は客の左から、盆を右手で差出し飯椀を受取り、左手を添へて立ち上り、退いて飯櫃係りに

渡す、飯櫃係は、これを兩手で盆から取り、左手で飯櫃の糸底を摘んで、右手の杓子で二杓半に盛つて通ひの者に渡し、通ひの者は盆に受けて客前に薦める。

現在では多く後者に倣つてゐるのが多い。然かし厳格にいふと盆を以てするのは正式でない。いづれにしても客前に出すときは、膳上や眞向に差出さず、必らず客の左側からするのが作法である。

汁　通ひの者が盆を持つて、下座の方から順次に盛り替へる。盛り方は先づ盆を右手に持ち、左手を壓に少しくついて、汁椀が据ゑてある方から受取つて退き、再進を盛り替へ、蓋をして持ち出で客前で跪き、一度盆を置いて蓋を取つて盆の左縁にかけ、左手をつき右手で薦めるのである。

取肴　肴を取る者と、通ひの者二人が瓷へ、二鉢に盛つて臺に載せて運ぶ。肴を取る者は山、河、海、畑の順に盛つて通ひの者に渡す。通ひの者はこれを盆に載せ、皿ものならば上座から、木皿ならば下座から順次左右に分れて据ゑ付ける。これは客の右方からするのが作法とされてゐる。

引肴　先づ一人毎に皿または他の器物に肴を盛り、三方または足折に載せ、膳を持つやうにして客前に出で、太膳の中央から少し客の右に寄せて置く。また略して肴を臺に載せて客前に出で、臺から取つて客に薦め、臺を持ち歸る仕方もある。前者を鉢々引、後者を引下しといつてゐる。また臺引といつて肴を盛る器物を一人々々に別けず、臺または鉢に肴を載せ、これを吸物椀または、其他の蓋を取計ひ移し載せて出す仕方もある。

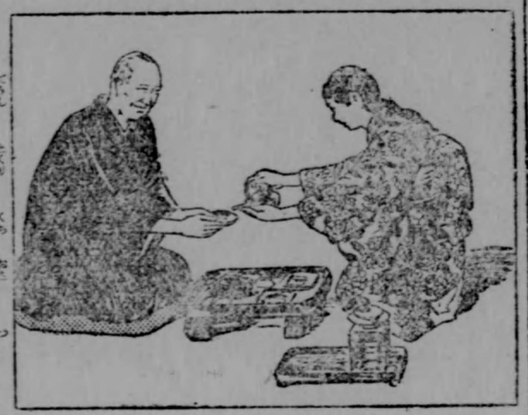
燒物　小皿などに盛つて、太膳と二の膳の手前に置く。また三の膳がないときは三の膳の場所に置くのが作法である。

鉢盛　鉢盛の漬物は盆に載せて持ち出で、茶椀の明蓋を取つてこれに盛り、客の右の方に置く。また鉢に盛つたまゝ箸を向ふにつけて客前に置いてもよい。

第九節　酌の仕方

鉢子　兩方に口のあるのを「もろくち」、一方に口のあるのを「かたくち」といひ、多くは長柄である。これで酌するときは右手で下より受け、菊形の鉢のところを摂指で押へ、左手で猫足のところを取つて酌をする。

德利　右の手で下から持ち、食指を德利の肩に屈かせ、摂指を輕く上にかけ、左手で德利の左下の尻を持ち添へて注ぐ



酒の注ぎ方

錫は右手で細い部分を持ち、左手を膨れた部分にかけるのが作法である。

酒の注ぎ方は壷九分、夜八分の作法があり、溢れるほど注ぐものではない。盃を傾けて受ける人があつても、鉛子や德利の口で押へて注ぐのは無作法である。また鉛子や德利を替へるには、酒の少し殘つてゐる間にしなければならぬ。

第十節　茶と菓子

茶といつても茶席の作法は一般向でないから、こゝでは一般の宴席及び家庭に於ける煎茶の一通りの作法に止めて置く。

煎茶も本式の茶の湯に從ふと、却つて抹茶以上に難かしい方則もあるが、現代一般には夫れほどの心得はなくとも濟む。先づ煎茶を客に薦めるには、客の前で茶を入れるのと、次の間で茶碗に注いで持ち出るのとあるが、何れにしても茶托を用ひなければならぬ。持ち方は左の手で茶托を持ち、左手を下から添へて客前に置き、左手を突き、右手で茶托の右の縁を持ち、客の取り易いところまで差出すのである。また天目を用ふるときは、必らず茶碗に蓋を要する。これを持つには、左右の摂指と食指とを兩縁にかけ、殘る三本の指を廻して輕く屈め、客前三尺ばかりのところに座して下に置き、兩手で薦めるのである。

煎茶も玉露になると、一々湯加減を見、湯冷しなどをも用ひなければならないが、是等は茶の湯の範圍になるから省略する。

煎茶の飲み方は、普通は右手で茶托の縁を持上げ、左の掌に載せ、次に左手で茶托を下に置いて、右手の茶碗を受け添へて三口に飲む。飲み終つたならば兩手で茶托に置き、あとを欲しくなかつたら茶碗を伏せて置く。また天目の場合は最初蓋を取り、兩手で茶碗のみを取り上げ、そのまゝ三口に飲んで臺に載せ、蓋をするのである。

薄茶を出された場合は、兩手を膝くついて一禮し、作法通り

菓子を喰べ、次に兩手で茶甌を取り上げて自分の前に据ゑ、右手で取つて左の掌に載せ、右の手を添へて推し戴き、茶甌を右手で二廻り手前に廻して三口に飲む。飲んだならば拇指を内に、食指を外にして唇のあたつた部分を廻して拭き指は懷紙で拭く。次で茶甌を右手に取つて下に置き、更に兩手で一尺ほど前に差出して置くのであるが、相客があれば相客に會釋する。薄茶の飲み方は茶の湯の範圍に屬するが、煎茶の代りに薄茶を出される場合が往々あるから、こゝに附記して置いたのである。

お菓子のすゝめ方

菓子は蒸菓子でも干菓子でも出し方は同じで、菓子器に盛り饗または盆に載せて出すのであるが、蒸菓子ならば楊子を添へ干菓子ならば菓子箸を添へて出すのが禮である。置方は茶甌の右(客の)が法で、多人數の來客には、各半紙を筋違ひに折り、折目を客に向けて出すのである。

主人から箸または楊子で、菓子を薦められたときは、右手に左手を添へて受け、すぐ食さない場合は懷紙を出して菓子を載せ、自分の傍に置けばよい。各自の菓子器に半紙を折つて盛つた菓子は、客に持ち歸つてもらふのが主人の作法であり、また食べ餘した菓子などは持ち歸るべきが客の禮である。

第三章　洋式宴會の心得

第一節　晩餐會

洋式饗宴の標準ともいふべきものは晩餐會で儀禮、祝典の賀宴、公式非公式の宴會、家庭的の略宴など何れもこの晩餐が主たるものである。從つてこれに關する諸作法は、多くの場合の範となるべきものである。こゝには主として晩餐會に關する諸作法を詳說し、其他の宴會などは異つた部分だけを摘記する。

第二節　招待の作法

數人臨時に會食するときの招待とか、親友間の會食ならば口頭または電話で案内するも差支ないが、鄭重といふ點と日時場所の間違ひなどを避けるためには、一般に招待狀を發するのが作法である。

大宴會の招待狀は三週間前に發する場合もあるが、一般の場合は少くも一週間より遲からざる以前ならば差支ない。本來は一々使者に持たせて屆けるのが正式であるが、多人數の客のときは非常な手數なので、これを郵便に托するのが例となつてゐる。然かし作法からいへば成るべく鄭重にするのが鄭重な譯である。

招待狀は各自別々に出すのが禮で、一家内にある兄弟に對しても、それ〳〵別に招待狀を發すべきであるが、同一家内にある姉妹に限つて、連名でも差支ないといふ除外例もある。夫婦は一身同體と看做すべきであるから、歐米でもこれは連名にするのが通例で、甲夫婦が乙夫婦を招待するにも、甲乙共に連名でよいのである。爰中にある人に招待狀を出す可否については議論はあるが、非常な不幸に遭つた人へは遠慮すべきは勿論として、其他の場合は西洋人は一ヶ月、日本人では忌明の後ならば差支はない。尚に結婚式とか大宴會のときは、多分來ないと思はれる人に對しても、厚意として招待狀を發するのが歐米の慣例となつて居る。

招待狀に出席の有無の回答を求める意味を書く場合は印刷するのが例で、英國では The favor of an answer is requested と略記し、其他の歐米各國では、同意味の佛語レポンデ・シル・ヴー・プレー(Répondez. s'ilvous plait)の頭文字を取り R. Z. V. P. と略記するのが例となつてゐる。

一方招待狀を受けた者は「出席有無乞御回答」が記載されてゐなくとも迅速に回答すべく、返事を遷延するは非禮である。又何の理由で招待され、どんな顔觸れかなどゝ、招待者に問合せるのもまた甚しい無禮である。差支ない限り出席するなどの曖昧な返事を出すのも面白くない。直截鮮明に諾否を即刻回答すべきが、和洋通じての作法である。

回答は必らず招待狀一葉に對して一葉づゝなすべきである。先方では出席の男女別などによつて、席順の配置に非常な苦心を拂つてゐるのであるから、一家より誰か一人出席するなどの返事は慎まねばならぬ。

但し除外例として席待狀を出すときと同樣に、夫婦または同一家内である姉妹のみは、連名で回答して差支ない。尤も夫婦

の中どちらか缺席するならば、夫なら夫、妻なら妻と、明瞭に返事をしないと準備に差支を生ずる。

回答はやはり使者を以て通達するのが正式であるが、郵便に托するも招待狀發送と同じく差支ない。萬一出席出來ない場合は招待の好意を感謝し、缺席の理由を明細に詳記して陳謝すべきである。一日斷つて置きながら、其場に臨つてノツソリ顏を出すなどは非禮極まるものである。また晩餐會の時刻は、通例午後七時半から八時で、招待狀にはその服裝を指定するのが例となつてゐる。

第三節　宴會の服裝

饗宴に臨む場合は主人や主婦のみでなく、時に高貴の人に接する場合もあるから、服裝は總服を着さねばならぬ。また饗宴のみでなくホテル、倶樂部など多人數の集合する食堂でも如何なる人に遭遇せぬとも限らぬから、何れも禮服を着るべきが作法で、少くも通常服以上に改めなければならぬ。背廣服の如きは自分一人の食事か、內輪の友人同志のみが、料理店などで會食する場合等には差支ないが、其他の會食には着用すべきでない。食堂に入る際には、先づ鏡に向つて服裝を正しく整へ、慌れた所があつたら、これを改めて宴席に出ねばならぬ。

第四節　席順の心得

洋式では常に婦人が上席である。婦人の上客が主人の右、その次は主人の左に、男子の上客は主婦の右、この次の客が主婦の左になるのが席順である。尤もこれは一般社交的及び家族的非公式の慣例で、中でも高位高官の人、年長者、知名の婦人を上席とし、既婚者は年齢の如何にかゝはらず常に未婚者より上席に着し、婦人が着席してから男子が着席するのである。然かしこれが公式になると主人來賓ともに男子が上席となり、主人は當日の主賓及び年長者などと共に先に食堂に入り、主婦は最後に食卓につくのである。室內での順位は爐火か飾棚のある方または正面が上位で、入口に近い方が下位であることは、日本の床の間を基準とするのと類似してゐる。親子、夫婦、兄弟、姉妹、親戚同士を列べて着席させることは、社交上成るべくこれを避けるのが慣例で、廣く歡談を交はすため、席順を考慮することは、洋式宴會に於ける第一の常道である。

客を招待した場合は主人が先に立つて案內し、自分の右に客中の上位者を着席させる。婦人同伴の客を招待したときは、婦人全體を着席させてから、男子の着席をこふのである。主人夫婦が連名で招待した場合は、略式ならば主婦が先導で婦人客を案內し、次に主人の先導で男子客を案內して、主人主婦が着席するのを待ち客は着席する。

主人夫婦または、招待者が二人以上ある場合は被招待者の着席順の如く、招待者も客の人數に準じ、被招待者を等分に配席し、招待者はその中間たる位置に別れて着き、接待の責任を果す便宜を計るのである。一人にて客を招待するときも同じく、客席の中間としての便宜位置を、客の數に準じて定める。然かし結婚披露宴では、新郎新婦を合せて一と看做す例外があつて媒酌人はその左右に一人づゝ着席する。

普通長方形の食卓の座席は、兩側を奇數とし、合計して偶數となるやうに配置するが、結婚披露宴には新郎新婦を一と看做すから、正面の席は偶數となる。歐米では十三といふ數を非常に忌むから、十三人の場合は座席を十四人分とし、その一を缺とし食器のみを列べ置く慣例がある。

第五節　着席に就ての心得

着席の順序はあらかじめ主人側で苦心して定めたものであるから、指定以外の椅子に腰を下すのは、席順を亂すことになつて非禮である。自分の地位は如何に低くとも、客として招待を受けたときは常に主人側より上席となるのが普通である。婦人が着席するか、または主人が着席の合圖をするまでは、決して着席してはならぬ。

紹介は着席前にすべく、また椅子は成るべく食卓に付けることを忘れてはならぬ。これは給仕の通路を妨げないためと、疎忽を妨ぐ用意からである。

食卓につき方

第六節　配食の受け方

正式の宴會では一々客の註文を待たず、皿に料理を盛つて持ち廻るから、この皿に着いてゐるスプーンを右手に持つて其そ

一人分の料理を掬ひ、フォークを左手に取り、それを押へて拭み自分の皿へ移し取り、移し終つたらスプーンとフォークを、元の皿に元通りに置くべく、此際自己の食器を用ひるのは無作法である。

以上の配食は給仕が順に料理を持つて來るから、その順序を誤ることはないが、家庭的の會食の際などは、同一食卓中の婦人が、また配食を受けない間は男子が先立つて、配食を受けてはならぬ。すべて持ち廻りの際には、飲物（スープは料理で飲物でない）は必ず客の右から出し、料理は左から出すのが正式である。

正式の宴會でなくホテル、倶樂部の食堂などに出席した場合は、自分の嗜好に應じて料理を註文しなければならぬ。其際の順序としては給仕または女給仕の差出す献立表により、最初に食する物から註文するのであるが、始めから食する物全部を一時に註文するのは、徒らに食卓を塞げて無作法である。定食料理では、パンだけは註文がなくとも、最初に付けて出すから註文する必要もないが、其他のものはすべて一皿食し終つたならば、献立表を見て次の料理を註文する。この註文を聞いて給仕または女給仕は、前の皿を引くことになつて居る。

献立表は佛文か英文で書いてあるが、專門的の名稱が多くて全部がわかる人は少ない。それに各ホテルで勝手に附けた特殊の料理名もあり、聞れた人でも往々わからない場合があるが、それを知つた振りして盲滅法に註文すると、飛んでもない失敗を招くから、わからない時には遠慮なく給仕に尋ねるがよい。

第七節　ナプキンの取扱ひ方

ナプキンは食事の際、指先や唇に何か物の附着したとき、輕く拭くためのもので、これで顔を拭いたり、食卓を拭いたりするのは無作法である。

先づナプキンの掛け方をいふと、着席後落付いてから、初めて料理が出さうになつた時これを取るべく、膝に着くや否や急いでナプキンを掴げるのは恰好がよくない。又風呂敷の塵でも拂ふやうに振り掴げるのは、隣席の人に對して無作法になるから、輕く掴げて膝の上に載せるのである。全部掴げてもいゝが二つ折にして折目の方を上に載せるのが正式とされて居る。尤も日本人殊に婦人は、西洋人と異り脚部が短いので、椅子にかけて足を床に着けると、膝が下つて載せたナプキンが落ちやすい憂ひがある。さういふ時はナプキンの端を、帶の下に少しく

挾む方が安全である。全部ナプキンを掴げて、帶の上に挾むのも咎め立てするほどの違式でないから、改まつた宴會以外ならば、疎忽から衣服を汚すのを防ぐため、便宜上不馴れな人はやつても差支なからうが、唯これをチョッキの釦穴に挾んだりするのは、黴米で老妖者に限られ、堂々たる紳士達のなすべきことではない。

ナプキンのかけ方

本來ナプキンの使用は一回限りで、新品または洗濯したものと取換ふべきであるから、使用後は洗はない方が作法である。丁寧にたゝむのは作法のやうであるが、使用後キチンと元通りにたゝんで置くと、給仕が新らしいものと誤認して、他の客に用ひないとも限らないから、殊更たゝまずに輕く不規則に纏めて置くのが總法である。

然かしこれにも例外があつて自分の家庭、下宿屋又は汽船内などでは、食後ナプキンをきちんとたゝみ、各自番號或は符號の記してあるナプキン・リングに捲き込み、汚れるまで數回使用する。これは家庭や下宿屋などにあつては、ナプキンを使用する毎に一々洗濯するのは不經濟であり、汽船の航海中は淡水を節約するためである。

食事中過つてナプキンを取り落しても、自分でこれを拾ふのは隣席や向合つてゐる客に對して甚だ見苦しい。かゝるときには遠慮なく給仕を呼び、他の客に目立たぬやう拾つてもらふ方がよい。食事に際して往々ナイフ、フォークなどの食器をナプキンで拭く人があるが、これは非常の失禮である。眞にその食器が汚れてゐるものならば、非公式の場合なら低聲で、給仕に告げ取り替へてもらつて差支ない。然かし家庭などに招待された際かゝることをしては、わざ〳〵行き届かぬことを責めるやうで、主人に對する侮辱となるから避けねばならぬ。

第八節　ナイフとフォークの使ひ方

洋食では必ずナイフを右に、フォークを左に持つものと思ひ込んでゐる人もあるが、洋食の原則としてはフォークは右手に持つのが本當である。切らねばならぬ料理が出たときにナイフ

を用ひ、掬はねばならぬ液體のときに、スプーンを用ふのであるから、ナイフとフォークとを共に手にする時にのみ、フォークを左手にし、其他の場合は、フォークは右手に持たねば違式である。

フォークの持ち方は右にする際は、筆を持つやうに拇指を上にして料理を掬ひ取る。掬ひにくい物であつた場合は、左手で皿の左側を輕く支へ、それでも掬ひにくかつたならば、パンの小片を左手に持ち、右手のフォークにあしらふと便宜である。但しこの持つたパンは、料理を喰べた後、皿の隅に捨てゝ下げさせ口に入るべきではない。料理が大きくて一口にし難いものは、フォークを前と反對に、拇指を下に手の甲を上にして、掌中にフォークを握り、食指でフォークの柄を押へて力を添へ、その側面で手前の方から漸次に一片づゝ取り、前述の要領で食する。突刺して食する場合は、拇指を上にするも下にするも隨意でよい。

フォークで取ることの出來ない場合、始めてナイフを一緒に使用するが、此時は右手にナイフ、左手にフォークを取り、フォークで料理の手前の端を刺し押へ、ナイフで適宜の大きさに切り、左手のフォークで突き刺したまゝ口へ持つて行く。其際の扱ひ方は、兩方とも柄を掌中にし、手の甲を上にして力を添へるため、食指をナイフとフォークの峰に當てるのが便利である。

初めから料理を全部細かく切つて置き、改めて一片づゝ口に入れる人を見受けるが、あれは子供に與ふる場合で、一人前の男子のなすべきことでない。又ナイフとフォークと一緒に動かす人もあるが、これは動もすると料理を皿の外に滑走せさ、食卓に墜落させる危險がある。

食事中に談笑する時は、ナイフとフォークを自然に持つてゐればよく、わざわざその扱ひ方を作爲すると却つて不恰好になるものである。勿論食物を誇張りながら談話するのは無作法である。中座するとか水を飲むとかの必要が出來たとき

ナイフとフォークの使ひ方

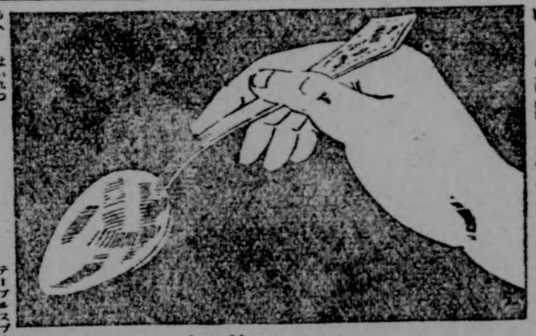
には、ナイフとフォークの尖端を、兩側に分けて皿の緣にかけ置くべきである。食事後はナイフとフォークとを一緒にまとめればいゝので、これを組合せたり交叉させたりするのは、却つて違式である。匙はナイフとフォークとを皿に載せ給仕に下げさせるとき、その柄が袖口に引掛らぬやう、客として注意を加へて一纏めにするのが作法なので、スプーンの場合もまた同樣である。

以上の如くフォークは左手に持つ場合よりも、右手に持つ場合が多く、唯ナイフと同時に持つとき始めてこれを左にするのみである。勿論ナイフは絶對に左手に持つてはならない。またナイフで物を掬つて口にするなども無作法である。

料理によつてナイフに普通小刀、魚類用小刀、前菜用小刀、果物用小刀、菓子用小刀、牛酪用小刀などの別があり、フォークにも普通肉叉、魚類用肉叉、前菜用肉叉、果物用肉叉、菓子用肉叉などの別があつて、宴會などには皿の代る毎に、外側から內側へ取るやう整め給仕が、獻立表の通りに並べてあるから間違へてはならない。

第九節　スプーンの取扱ひ方

スプーンはスープ、茹玉子、粥、アイスクリームなどの液體または水氣の多い菓子、果物などの如く、フォークで扱ひにくいものに限り用ふるものである。その扱ひ方は筆を持つ時の如く、右手に拇指を上にして柄の中央部を持つのである。尙ほスプーンも用途によつて持廻用大匙、普通スープ用匙、曹達攪拌用匙、食鹽用匙、茹玉子用匙、ソース用匙、ソース用大匙、生菜用匙、紅茶用匙、珈琲用匙、氷菓子用匙、蜜柑用匙、砂糖用匙、菓子用匙などの種類がある。



スプーンの持ち方

普通食事にあつて食卓の上に配列しあるものは、普通用匙、食鹽用匙位で、宴會になるとアイスクリーム匙や、菓子用匙などを配列して置くが、他の匙は大抵その品に添へて、給仕が持つて來ることになつてゐる。

第十節　パンの喰べ方

パンは食事中を通じて食べて差支ないが、まだスープの來ない先から食べるのは不體裁であるから、スープを濟ましてからにする方がよい。大體は次ぎの料理の續ぎに食べるのが、食時の進行上好都合で、徒らに料理の皿を前に飾りながら、パンばかり喰べてゐられると、給仕は料理の皿を引くわけに行かず、これがため宴會などでは非常に迷惑をかけるから、宴會の進行を調節し、料理の持ち運び、皿の引き方などに留意して、給仕を困らせないやうにしなければならぬ。

パンの喰べ方

パンは最初から食卓に配列し、普通麵麭皿に載つて左脇にあるからその皿の位置を動かさずにパンを取り、一口に食べられる位に小さく捩り、バター・ナイフでバターをつけて喰べる。もし各自に牛酪入とバター・ナイフが備へられてないときは、デサートナイフで手近のバター入から、バターを適宜に取つて自分のパン皿に移すのであるが、初めからパン一團にバターをなすり付けて噛るのは甚しい無作法である。

パンは中部の柔かいところよりは、緣の方が消化もよく且つ美味なものであるから、內部の柔かい部分のみを喰べて堅い部分を殘すのは、パンの味を知らぬ喰べ方である。宴會其他でロール・パンといつて、圓形又は卷いたパンを出すことがある。あれには豫めバターが入つてゐるから、バターを付けるには及ばない。このパンに限りパン皿を用ひず、直接に食卓掛の上に置いてあるからすぐわかる筈である。パンはデザート・コースに入ると、もう喰べない作法になつてゐるので、殘りがあつても給仕は引いて了ふのである。

第十一節　各種料理の喰べ方

スープ　スープは食物であつて飲物ではない。從つて洋食でもスープは、他の飲物のやうに客の右から出さず、食物と同じく左方から出すのが定則である。このスープにも種々あつて、各容器すら異にしてゐる。普通日本の洋食屋でスープといつてゐるものは、鳥スープに野菜を入れ、これをスープ皿で出す。これはスプーンを中央より少し上部を持ち、手前から先方へ掬ひ、スプーンの側面に口をつけて吸ふ。此際左手でスープ皿の手前を、少し横に擡げて掬ひやすくするのは差支ないが、一滴も殘さぬ苦心から皿をグル〳〵廻すなどは下品である。

スープの喰べ方

ビーフ・テイ・イン・カップは牛肉のスープの一種で、紅茶または珈琲と同一の茶碗に入れ、受皿に載せて出すが、必らず小さい匙が添へてあるから、茶碗を皿に載せたまゝ左手でその把手を持ち、右手のスプーンで攪拌して五六度喰べ、熱かつたならば適度に冷して後ち、スプーンを受皿の上に置き、今度は右手で茶碗の把手を取り、飲み干すのが正式である。茶碗は近來兩方に把手のあるブイヨン・カップが出來てゐる。最初は左手で左の把手を取り、右手のスプーンで喰べ、今度はスプーンを置いて右手で、右の把手を取つて喰べられるやうになつてゐるから、把手を廻す必要はないのである。

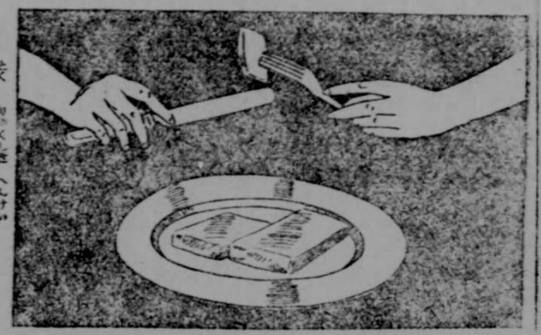
ポタージュ・マリガトーニーはカレー粉入りの濃りスープで、矢張りスープ皿に入れて出す。この中に米飯を入れるので手數を略くために最初から入れて出すこともあるが、本來は給仕が別の容器に米飯を入れて持ち廻るのが正式である。この容器から米飯を適宜スープの中に取り入れ、靜かに攪拌して喰べるのであるが、餘り澤山米飯を取り入れるのは下品である。

ブーイヤベーズは一名フィシュスープともいひ、スープの中に海老、魚類、野菜などを澤山入れてある。これは最初フォークで實を喰べ、殼や骨が出たらそれを皿の手前に寄せ、次にフォークをスプーンと取り替へ持つて、スープを掬ひ食するのである。スープを掬ふに手の甲を上にし、掬指を下に

する人を見受けるがこれは不恰好とされてゐる。スープに限らずすべての飲食物を、チュー〳〵音をさせて啜り込むのも甚だ無作法である。又パンの小片を小さく捩つてスープの中へ入れるなども大の禁物とされて居る。スープは元來朝飯には用ひない。それを知らずにホテルなどで朝飯の際、スープを請求するなどは、飛んだ赤毛布の暴露といはねばならぬ。

前菜又は小菜　食慾を増すため、スープより先に出す料理で、酒でいへばコクテルと同じ目的を持つものである。これにも種類があつて、クラッブ・コクテールは蟹の肉をコクテール・グラスに入れ、トマト・ケチャップ・ソースを掛けて皿に盛せて出す料理である。フォークで掬ひ食するもので、其際左手で輕くグラスを押へるが、最後にグラスから酒でも飲むやうに、ソースの殘滴を駆り込むのは大の禁物である。

オイスター・オン・ハーフ・シエル・ウイズ・レモンは、貝付牡蠣にレモンを添へた前菜の一種で、よく宴會などにも出る料理である。これは右の指で先づレモンを摘んで汁を絞り、左手で貝殻を押へ、右手のフォークで牡蠣の肉を掬ひ食すべきであるが、貝に殘つた柱を喰べるに一寸困難であるから、不馴な婦人達は柱だけは割愛する方がよい。貝をよく皿の上で押へ、フォークで剝して食すればよい。往々貝を皿の中から持出して、一生懸命剝がしてゐる人も見受くるが恰好がよくない。



前菜の喰べ方

魚類　魚類には普通のナイフ、フォークと異つた、魚類用銀製のナイフとフォークとが出てゐるが、若しこの用意がしてないときには、特に略式の變形フォークのみを出すこともある。これは普通のフォークより薄く、魚肉をちぎる便宜に出來てゐる。この變形フォークを用ひるときは、魚類用小刀は別に出さないことになつてゐる。

ロブスター・マヨネーズ・ソースは伊勢海老の煮たのを半分に割り、マヨネーズソースを添へた料理で、これもよく宴會に出る。喰べ方は左手で海老の尾を押へ、右手でフォーク

魚料理の喰べ方

を取り、尾の方の肉に刺し左から右へ剝がして取り、フォークを左手に持ち替へ、右手にナイフを持つて適宜に切つて喰べる魚類のフライ類を喰べる場合、骨などを口中に入れたとき、これを皿の上に吐き出すなどは無作法であるから、靜にフォークで受けて皿の一隅に置くべきである。

主菜　主菜は料理中主要の御馳走で、料理人が最も苦心するところであるが、例外として露國では寧ろこの主菜より、前菜の方に苦心して種々珍らしい馳走を出す風習がある。

ブロシェット・ドウ・ヴオライユは、鶏肉とベーコンを銀の串に刺してフライした料理であるが、多人數の宴會等で銀串が不足するときは、竹串に代へることもある。喰べ方は串の頭を左手に持ち、右のフォークを横にして串を通し、肉を支へ、徐々に左手の串を引き拔いて、串は皿の隅に置き、串を持つた指頭をナフキンで拭き、次にフォークを左手に、ナイフを右手に取つて、適宜に切り取つて喰べるのであるが、肉が小さくて切る要のないときは、ナイフを持つ必要がないから、フォークはそのまゝ右手に持つたまゝ食すればいゝのである。但し竹串の際は銀串に比して拔きにくいから、兩手を動かして引拔くとき、餘りフォークに力を入れてゐると、往々肉を皿の外へ跳ね飛す虞れがあるから、右手に力を籠めたり、動かしたりしないやう注意せねばならぬ。

ムーズ・ドウ・ジヤンボンはハムの燻身を、ジェリーで固めた料理で、頗る柔かいから、ナイフの用を借りるまでもなく、右手にフォークを持つて適宜にちぎつて喰べればよい。

カリード・ライスはライス・カレーのことで、持ち廻りで出るときは給仕が米飯の容器を持つてくるから、自分の皿へ適量に移し取り、カレー入れからカレーを移し取つた上、更に持ち廻る薬味皿から自分の嗜好に應じ、茹玉子またはハムを細かに切つたのや、醤油漬などを移し入れ、フォークで混

ぜて食する。この料理で稍や事が面倒になるのは、以上の藥味の他に胡瓜の酢漬や、インデアン・マンゴー・チャツネー又は、ポンペイ・ダックなどが出ることがある。これを細かくして藥味皿に入れて持ち廻つてくれゝば面倒もないが、ビックルス・スタンド（漬物や、ジャム、マーノマレードなどの容器立）の瓶に入つたまゝ持つて來たならば、必らずビックル、フォークといふ專用のものがあるから、それで自分の皿の手前に移し入れ、ポンペイ・ダックであつたら指でちぎり、其他のものならナイフで細かに切り、フォークで掻き混ぜて喰べるのである。又普通のカレーでなく、ドライ・カリード・ライスといつて、汁氣の少ないカレーを用ふることもあるが、喰べ方は別に變りはない。

テンダーロイン・ステーキは、ヒレのビーフ・ステーキのことで、ナイフとフォークで喰べる。但しこれには多くリボン・ポテトースといつて馬鈴薯を薄く切り、リボンのやうに捲き、油で揚げたものを附合せとして出す。これは先づフォークで押へ、ナイフで靜かに飛ばさぬやうに毀はし、フォークを右に持ち替へて喰べるのである。

クルスタードは、米飯または裏漉にかけた馬鈴薯で作つた球形の上部を横に殺ぎ、中味を刳り拔いてフライした中へ、料理した魚、鳥、獸肉等を小さく切つて詰めたもので、フォークのみで食してもよく、ナイフを使ふべき要があつたら、兩方を用ひて食するもまた任意である。

ヴォルオーヴァンは前同樣のものであるが、これはメリケン粉で拵へたパッフペストリケースといふ型に詰めた料理である。ところがこの型が容器のやうに見えるので、往々誤解して中味のみを掬つて喰べる人もあるが、これは外部の型を一緒に毀はして食するものである。

蔬菜　野菜にもいろ〳〵あるが、こゝでは宴會料理として最も多く用ひられる物の喰べ方を說明する。

アスパラガスは譯して西洋獨活といひ、觀賞植物のアスパラガスとは同名異種である。これを喰べるには、アスパラガス・トングといふ砂糖挾みに似た銀器があつて、それで莖を挾み、尖端の芽だけを食するやうになつてゐるが、アスパラガス・トングを設備してゐる處が少ない。多くはその代りに左指を用ひて莖を摘み、莖から驚文茶かい部分だけ齒でしごいて喰べる。然かし英國式になると、矢張りナイフとフォークを用ひるのが正當とされてゐるから、儀式張つた宴會には英國式に從ふのが作法である。アスパラガス・トングを出すとすれば、卓上フォークと並べて置いてあるからすぐわかる。

アスパラガスは上記の如く、芽と芽に次ぐ柔かい部分のみを食するのであつて、下部の莖まで喰べると口中に纖維が殘り、これを吐き出さねばならぬ無作法をせねばならぬ。左手の指で摘んだ後その指を拭めたりしないで、ナフキンで拭くことを忘れてはならない。又時によるとアスパラガスの芽または、柔かい部分だけを撰んで出すことがある。其際はフォークで刺して喰べればよい。

グリン・ピースは青豌豆のことで、これは右手のフォークで掬ふて喰べる方がよく、右手にナイフを持つとなか〳〵フォークに載せにくい。豆が柔かいときには、右手のフォークで押し付けると好い加減に潰れて喰べよくなる。

アーティチョークスは、綠色の大きな松毬に似た野菜で、これにいろ〳〵なソースを添へて出す。喰べ方は鯖形の鱗葉を一片づゝ右の手で剝がし、下の端に少しソースを附け、內側の極少量の肉實を下齒で碎いて喰べ、殘片は皿の手前の片隅に捨てる。面倒がつてナイフで切り、一口に入れると芯と棘があるから、いくら我慢しても鵜呑にすることが出來ず、吐き出しの無作法を招くのである。アーティチョークにはボットムといふのがあつて、直徑約二寸、厚さ約六七分で黃色を呈し、頗る珍味とされてゐるが、これならば右手のフォークのみで喰べればいゝ。

蒸燒肉　蒸燒肉が濟むとデザート・コースに入るのだから、いはゞ料理の打止めである。蒸燒肉に用ふる肉は牛肉、豚肉羊肉、鷄、家鴨、雉子、七面鳥、鶉等數十種あり、いづれもナイフとフォークとを併用して食し、その種類により骨附と然らざるものとがある。こゝには最も多く宴會などに用ひられる鶏の喰べ方を記載して置くが、他の骨附もまたこれに準ずれば間違ひはない。

クエール即ち鶏の蒸燒は、先づ仰向けになつてゐる鶏をフォークで押へ、胸骨に沿ふてナイフで切り込み、左側の肉をそぎ落して食し、次に殘つた右側を左側に向け替へ、前同樣にして切り取つて喰べる。後には兩脚だけが殘るが、これは附根をナイフで切り落し、脚の端を右の指で掴んで肉を骨から噛み取るのであるが、儀式張つた宴會や客人の殘席してゐる際などは、體裁上遠慮して、脚だけは下げさせる方が無難

である。また其他の首や背は、骨ばかりで肉がないから、最初から手を着けない方がよい。

生菜　蒸焼肉に付物は生菜である。サラドにも數十種あるが、主として高苣といふ野菜の葉を材料とし、それにいろいろなものを取り合せたもので、大抵は細く切つてあるから、フォークのみで喰べられる。もし高苣の葉が大きかつた場合は、フォークで折り疊むなり、ナイフで切るなりして喰べればよい。

間食物と菓子類　蒸焼肉が終るとこれが出て、次にデザート・コースとなる順である。

チース・フインガーは乾酪とメリケン粉で製した、ビスケットやうの細長いもので、これを給仕が出したら、數本パン皿の上に取つて一つづゝ摘んで喰べる。ビスケットやベストリーなども、これと同樣に喰べればいゝのである。

オレンヂ・ヂエリー・ウイズ・ポイツブド・クリームは蜜柑の汁を、ジエリ！で軟かく固めて蜜柑の皮につめたもので元來が軟かいものであるから匙で食すればよい。ソフト・カスタード・プディングとか、ババロアーズオーショコラなども、牛乳と鷄卵で拵へた柔かいもので、矢張り匙で喰べるものである。

シュー・ア・ラ・クリームは、普通シュクリームといつてゐるもので、フォークでも匙でも任意に用ひて喰べて差支ない。然かし無暗に噛み附くと中味のクリームがパツフから飛び出し、衣類や食卓掛を汚すことがあるから、落着いて靜かに食さねばならぬ。

マロン・ア・ラ・シヤンテリーは栗の實を擂りつぶし、クリームをかけたものである。これはフォクでよくクリームを混せないと、ボロ〳〵して取落す虞れがある。

ミンツパイは、燒き立ての熱いのだと指では勿論摘めず、フォークでもなか〳〵捩れない。さりとて匙では用ひにくいほど彈力があつて且つ堅い。出來るならフォークのみで喰べるのがよからうが、右樣の場合はナイフを用ひて差支ない。此際用ふるデザートナイフ及びデザートフォークは、卓上自分の正面、料理の出る向ふ側に配列し、他のナイフ、フォーク、匙は皿の左右にあるのが式である、但しバター・ナイフが樣につけてないときには、このデザート・ナイフを代りに用ひるのである。

鷄と茹玉子　鷄と茹玉子は夕食や宴會などには決して出さぬ。兩方ともに朝食專用で例外として、病人が自分の部屋で食事するのは任意である。

鷄にもオートミル、セモラ、セモクナなど種々あるが、大抵は日本の鷄と同樣に煮て出される。尤も日本のやうに鷄そのまゝで喰べるのではなく、必らず砂糖とクリーム、又は牛乳をかけて食するのである。牛乳よりはクリームの方が適當であるが、日本ではクリームの價が高いので、多く牛乳を代用する。喰べ方は矢張デサート・スプーンを用ひ、スープと同樣の要領にすればよい。尙ほ鷄には初めから多少鹽加減がしてあるが、もし甘いやうであつたら、適宜に食鹽容器から食鹽を少し移し入れ、自分の好む鹽味にすればよい。

ボイルドエッグス卽ち茹玉子は茹で方によつて名稱を異にする。沸騰せる熱湯中へ約二分間ぐらゐ入れたものを半熟、四分間程度のものを普通、十分間ぐらゐのものを「堅」といふ。この標準名稱で任意に注文すればよいが、鷄卵は普通二個が一食の最大限とされてゐる。

給仕が茹玉子の注文を受けたときは、一個をエッグス・スタンドに立て、前に一個を皿に載せ、茹玉子用匙を添へて持つて來るのが例であるから、先づエッグス・スタンドに立てある鷄卵を左手に押へ、右手のフォークの尖端で殼を破つて上部を除き、フォークを匙に持ち替へ掬ひ出して食する。一匙毎に食鹽を振りかけるのは手數であるから、窪め所要の量だけ皿の緣に移し置き、それを少しづゝ匙で鷄卵につけて喰べると都合がよい。但し茹玉子は前述の如く宴會や、食堂の夕食などには出ないから、フォークの代りにナイフで叩き破つても差支ない。右の如く一個を食したら次の鷄卵を矢張り同方法で食する。尙ほ給仕に命じ別に茶碗を持つて來させ、自分で破るよりは給仕に破らせて茶碗に入れそれへ食鹽や胡椒を適宜に振りかけスプーンで掬ひ食する法もある。

其他の注意　燒麵麭は朝食又は午後の茶、珈琲の菓子代りに食するもので、晝食又は夕食の際には決して出さないものになつてゐる。これを知らずにホテルの食堂などに出かけ、夕食などにこれを命ずると笑はれるから注意が肝要である。

ライス・カレーは日本人に限つてスープを用ひるが、これは違式である。

宴會の際チース、ジヤム或ひはマーマレードを請求してはならぬ。チースはバターと一緒に、パンにつけて食べるのであるが、晝餐の食事なら給仕に命ずると、チース・スプーン

といつて、これを掬ひ取るものを添へて持つてくるから、適宜の量を自分のパンにつければよい。チースには特有の臭氣があつて、口が臭くなるから婦人通は、他人の前では喰べないのが歐米の習慣とされてゐる。從つて男子もまた、多人數の會食や宴會などでは食さないのが作法である。ジャム及びマーマレードは、朝食とか午後の茶の時間にパンにつけて食するもので、晝食及び夕食には食さぬ習慣である。況して宴會等では絶對にこれを請求すべきでない。

持廻りの料理に自分のフォークや匙を以て、移し取つてはならぬことは前に述べたが、尙ほ共同のバター入れや食鹽入れ、或ひはジャム、マーマレード入れなどの容器に、自分の食器を突込んで移し取るのは決してなすまじき無作法である。必らずその容器に添へられた食器を用ひねばならない。

パースレーは「和蘭みつば」ともいふ細かい綠草で、料理の彩飾として大抵の皿には附合せとして添へられてあるが、裝飾用のみでなく喰べて香味もあり、衛生上にもよいから遠慮なく口にして差支ない。またソールテット・アーモンドと赤大根は、食事の初から卓上に出てゐる間食物であるから、食事中は勝手に摘んで喰べてよく、生のセロリーも同樣である。

第十二節　洋酒に就ての心得

洋式で普通に用ひられる酒類はコックテール、シェリー又は日本酒、ウオッカ、ポートワイン、白葡萄酒、赤葡萄酒、麥酒、リキュール、シャンペン等であるが、是等はその種類により盃の形狀と名稱を異にし、コックテール用盃、シェリー用盃、日本酒、ウオッカにもこの盃を用ひる。ポートワイン用盃、白葡萄酒用盃、赤葡萄酒用盃、リキュール用盃、三鞭酒用盃、清涼飲料用盃、ダンプラー（水、麥酒、サイダーなどに用ふ）醬油壺水、用盃等があるが、この中白葡萄酒は赤色の盃、白葡萄酒の中でもホッホ及びモーゼルなどの、ラインクワインは綠色の盃を用ひ、他の酒類はいづれも無色の盃を用ひる。

酒はどんな宴會にも附物であるが、日本と違つてそれを注ぐ順序がある。先づ食前にコックテールを用ふるのは食慾を增進させるためで、客が大抵揃つた頃を見計らひ、待合室で薦めるのが例であるが、單に數人會食する際などは、食卓につくとすぐ注ぐこともある。次に前菜又はスープの時にシニリー酒又は日本酒、時としてはウオッカを用ひる。次で魚類に白葡萄酒、主菜に赤葡萄酒及び炭酸水を出し、蒸焼肉が出ると同時に三鞭酒を注ぎ、珈琲の次にリキュール類を注ぐのが作法とされてゐる。

酒の注ぎ方は手を自然に延ばすのが注式である。卽ち瓶の持ち方は手の甲を右側に、掌を瓶の左側につける。日本式に手の甲を下に向けて注ぐのは、洋式に反するばかりでなく歐西亞人に對しては、特殊の侮辱を表することになるから慣まねばならぬ。酒を注ぐときは必らず客の後方右側からするのが給仕作法である。

日本では置注ぎを嫌ふが、歐米ではすべてが置注ぎである。佛蘭西では盃の中に酒が殘つてゐても、客が謝絶するまでは何回でも注ぎ足し、獨逸式だと客がその酒を大牛呑み乾すまでは遠慮して注がない。一切が置注ぎであるから、日本流に盃を手に持つて受けるのは無作法であり、從つて主人が自から酌するのも違式である。盃の獻酬に至つては尤も慎まねばならぬ。酒が不要であるとか、或ひは充分であつたなら、給仕が注ぎに來たとき輕く手を擧げるか、または食指を盃の緣に當て謝絶の意を表すべく、日本式に盃を伏せたりなどしてはならぬ。

飲み方は必らず盃の柄を輕く指先で持つのであるが、タンプラーや曹達水用盃のやうな柄のないものは、その下部を持つて飲めばよい。チュー〳〵音をさせたり零したり、または食物が口にある中に飲んだりするのは大の禁物である。酒類はこれを一口に呑み乾さないのが宴會の作法にされてゐるが、食前のコックテールだけは一口に呑み乾して差支ない。これは宴に移る進行から來たものであらう。酒を飲む前後は一々ナフキンで唇を拭ふのは、盃に汚點を印せぬ注意からで、儀式張つた宴會などでは必らずなさねばならぬ作法である。

リキュールは食後珈琲が出てから飲む酒であるから、コックテールを食前に飲むと同樣、食事中にこれを註文するのは法式に外れてゐる。リキュールにはペッパーミント、キュラソー、ブランデー、ベネディクティンなど澤山の種類があるが、いづれも食後の酒である。

酒類は盃に口をつけて飲むべく、麥稈や捩引紙でこしらへた細い管を、盃の中に突込んでチュー〳〵やるのはペッパーミント、フラッペ、ミルクシェーキ、ミルクパンチ、アイスクリーム、ソーダ、レモンスカッシュなどを酒場で飲むときの例外で普通の席でなすべきことではない。

第十三節　乾盃の仕方

蒸燒肉が出ると三鞭酒が出る。然かし三鞭酒は高價な酒なので、場合によつてこれを白パンチ・赤パンチ又は日本の冷酒を代用して三鞭酒盃に注ぐこともある。

一同が蒸燒肉を食し終つた頃を見計ひ、主人または主人側の代表者が起立して宴の趣旨、參集された禮や挨拶などを述べ、最後に來賓の健康を祝する旨を述べて盃を擧げ乾盃する。

此際日本人間の宴會などでは、來賓一同も起立して乾盃するが、これは異式であるから、日本人同士の宴會ならば兎も角、西洋人の交つた宴會では正式に從ふ方が無難である。主人側の挨拶中來賓一同は着席のまゝ傾聽し、來賓の健康を祝すといつて乾盃する際も、起立すべきは主人側の全員のみであつて、盃の柄を手にして來賓に注目の禮を行ふのであるが、來賓側は着席のまゝ默禮して盃を擧げて、口をつければいゝのである。

これが濟むと主人及び主人側の全員は着席する。それを待つて今度は主賓側の代表者が、附近の人に軽く會釋して起立し謝辭、祝辭等を述べ、最後に主人側の健康を祝して乾盃する。此時は來賓側一同は起立して、主人側に敬意の注目をし、主人側は起立しないで着席のまゝその敬意を受け、盃を擧げて口をつける。要するに敬意を表する方が起立し、受くる方は着席のまゝが正式なのである。

以上二回の挨拶答辭で、盃の酒を呑み乾するのであるから、最初主人側の乾盃辭に對して、一口に呑み乾してしまふと、第二回の乾盃辭に際して、空の盃を擧げなければならぬことになるから、二度に飲むよう心得ふべきである。乾盃といふ字義からすれば、一口に呑み乾すのが本當なのであらうが、引き續いて二度の乾盃辭に多人數になると、一々給仕が酒を注ぎまはる餘裕がないのと、もう一つは三鞭酒が高價な儀式的の酒であるため、無暗に飲まない遠慮から、かゝる慣例が出來たのであらうと思ふ。

非公式のホテル、倶樂部または家庭などで催す小宴ならば、主人も來賓も別に起立せず着席のまゝ挨拶なり、答辭なりを述べて、乾盃しても差支ない。

なほ主人も主賓もない共同の祝宴などでは、發起人の代表者が起立して祝辭を述べ、他の會衆一同は着席のまゝこれを傾聽し、最後に代表者または別の上席者の發辭で萬歲を三唱するとき、始めて一同が起立してこれに和し乾盃する。

日本人間でもよくやることであるが、プロジットといつて、酒盃の緣をカチンと軽く打つて乾盃するのは主として獨逸、露西亞などの酒場で、誰が主人、誰が主賓といつた譯もなく、單に數人會合會食した場合などに多く行はれるもので、英國では一般に行はれない。

上述の如く乾盃辭は、蒸燒肉を食し終つた頃を見計つて主人または主人側の代表者が起立して述べるのであるが、多人數のときは往々來客中にはまだ喰べ終らぬものもあるが、主人側の挨拶が始つたら食器は置かねばならぬ。かくて主客二回の乾盃辭が濟むと、給仕は直ちに皿を下げ、それからデザート・コースに入り珈琲、菓子、果物等が出るのである。

乾盃辭に次いで、直ちに卓上演說をする人も往々あるが、これは主客は勿論料理人側で非常に迷惑を感ずる。祝辭が濟むと給仕は直ちにデザート・コースに入つて菓子、果物、珈琲等を出すのであるが、卓上演說をやられると敬意を表して傾聽するため、折角の菓子も果物も喰べる暇なく、珈琲を飲むことさへ出來ない。殊にアイスクリームなどは溶けてしまふ。されば卓子演說をやるならばその祝辭が濟んで、主客が一先づ落付きくつろいで珈琲でも飲み終つたのを見計ふべきである。

第十四節　清涼飲料の飲み方

シシリアン・パンチは、アイスクリームのやうなものに果物の入つたもので、主として多種多量の馳走が出る場合、食事の中休みに喰べるものである。喰べ方は左手でパンチ・グラスの下部を捧へ、右手でアイスクリーム・スプーンを掬ふて喰べればよい。

清涼飲料の頂き方

アイスクリームは牛乳（上等なものには クリーム）と鷄卵を主たる材料としこれに香料糖分などを加へたもので、大抵ウエーフアーとかフインガー・ビスケットとか、レテイ・フインガーとかいふ輕い菓子を添へ

て出るから、先づ右手にアイスクリーム・スプーンを持ち、左手にその菓子を持つて、アイスクリームを先きに交互一口づゝ喰べる。これは急激に齒の冷却するのを防ぐためと、アイスクリームが皿の中で滑走するのを扱らふ便利があるからである。尙この菓子はパンの小片で料理を扱らふのとは異なり、結局は喰べて了ふべきものである。

シャーベットはアイスクリーム同樣で、たゞ材料を異にし、牛乳と鷄卵を用ひないで、砂糖水を主としたものであり、喰べ方は前同樣である。

第十五節　ソースと藥味の常識

ソースと藥味を無意味に用ふるのは主人なり、料理人なりに對して非常な侮辱を與ふるものであるが、日本人はよくこれを濫用する。

ソースの作り方は洋式料理第一の祕訣といはれ、從つて料理人はこの製法に苦心慘憺し、名料理になるとそれに適應する獨特のソースが用ひられてある。然るに日本人の多くは、出された料理を一口も味はない中からソースや藥味をかける。これでは折角料理人が苦心した料理を滅茶々々にするものである。勿論人には甘味好きもあれば鹹味好きもあるから、料理人はその注意を料理に加へ、心持ち甘い位にして若し鹹味好きの人ならば、卓上の鹽を少し加へればいゝ位にしてある。されば正式の宴會には、食鹽の外は一切卓上に出さぬのである。これを無遠慮に出來合のソースや、藥味を無暗に振り掛けるなどは、餘りにも無暴であり、餘りに無智である。尤も正式の宴會でなく、普通の食事ならば、一應料理の味加減を試みてから、卓上に出された食鹽や藥味を用ひて差支ない。

スパイス即ち藥味は辛子、胡椒、酢、サラド油など數種あるが、ソースに至つては幾百種もあり、料理によつて一々その種類を異にしてゐる。然かし一品料理屋や一般家庭では、苦心をして發つたソースを作つてゐる暇と技倆がないので、已むなく出來合ひの混合ソースやトマトケチャップなどで間に合はせてゐる。

第十六節　各種果物の喰べ方

果物を食後に喰べるのは歐洲に於ける一般の習慣で米國だとこれを朝食に食するが、普通宴會ではデサート・コースに入つてから、間食物及び菓子類の後に用ることになつてゐる。次に是等果物の喰べ方について述べて見やう。

林檎と梨　先づ最初縱に二分し、一片をそのまゝに他の一片を更に二分し、その芯を去り、フォークで刺しナイフで皮を剝いて喰べ、順次この要領でする。日本風に初めからクリ〳〵坊主に皮をむかない。非公式の宴會や單獨の食事などの場合は、フォークで刺す代りに指で持ち皮を剝いでも差支ないが、最初から全部の芯と皮をとつてから、一つづゝ喰べるのは無作法とされてゐる。これは一片でも殘したとき、皮を剝いて殘すなどは不體裁だからである。また桃などもこの要領でよい。

果物の喰べ方

蜜柑類　日本蜜柑のやうに外皮の剝き易いものは手で剝いても差支ないが、嚙んだ肉皮や核を口から皿へ吐き出すのは無作法であるから、左手で口を掩ひ、そつと剝いた外皮の中に捨つべきである。ネーブルオレンヂやグレープ・フルーツの如く、外皮の剝きにくいものは横に二分し、酸味があつたらば粉砂糖をかけ、オレンヂスプーンでその汁だけを掬つて吸ふのである。

瓜類　瓜類は先づ縱二つに總斷し、匙で掬つて食するのが簡便であるが、四つ切又は八つ切の場合はナイフとフォークで喰べる。種を口から直接に吐き出すのは禁物であるから匙かフォークで受けて皿の片隅に置くべきである。各人の嗜好によつて食鹽、砂糖を適宜用ふるも差支ない。

柿　最初蔕をナイフで刳り取り、堅いものは林檎と同じ要領で喰べ、軟かいのは匙で掬ふて喰べる。

苺　苺は砂糖とクリーム又は牛乳をかけ、匙で潰しながら掬つて喰べる。

バナナ　バナナはナイフで兩端を切り、兩側と上部の皮を去つて、下の皮は其儘とし、その上でナイフを以て切り、フォークで刺して食する。

葡萄と櫻桃　最初果物籠から適宜に自分の皿に移し、一粒づゝ右手でむしり取つて食し、左手で口を蔽ひ、外皮と核を右手で受けるか、或ひは指で取り出して皿の片隅に置く。

果物の砂糖煮　汁の有無により汁のあるものは匙、ないものはフォークで食するが、パインアップルは必らずナイフを用ふ

べきである。

胡桃類　アーモンド、ブラジル、ヘーズル、ピーナッツ、ウオルナッツ、栗など色々あるが、何れもナッツ・クラッカーといふ金物で挟み割つて食する。然しピーナッツのやうに殻の比較的柔かいものは、指で割つても差支ないが、齒で噛み碎くのは禁物である。

すべて果物を食するとき注意すべきは、果物用のナイフとフォークは銀製の小さい專用がある。これは果物の酸によつて、普通の鋼鐵製だと、錆びやすい上に黑くなるから、それを避けるためである。

果物は何れも注意してよく洗つてあるが、萬一洗ひ方が不充分の場合其獨の食事、または內輪同士の會食のときならば、遠慮なく給仕に命じて洗ひ直させるのも差支ないが、公式の宴會または家庭で饗應を受くる場合は、洗ひ直させることは間接に主人の不注意を指摘し、恥を掻かせるやうなことになるから、其際は寧ろ手に執らない方がよい。尙ほ歐米の習慣として果物籠に一顆よりないときには、その最後の果物は決して取らぬことになつてゐる。

第十七節　指洗鉢と爪揚枝の心得

指洗鉢　料理が終ると指洗鉢に水を入れ、皿に載せて出すから果物を喰べるには、鉢だけを自分の少し左側に移し、皿を食正面に持つて來てその上で喰べる。もし果物を喰べないときは鉢は皿に載せたまゝでよい。これは飲むべきものでなく、兩手の指先きを洗ふ用に供するものである。作法としては最初右手にナプキンを取り、右の指先を洗ひ、今度はナフキンを持ち替へて右の指先を洗ふ。尤も洗ふといつても、ジャブ〳〵やるのではなく、たゞ指先だけを濡してナプキンで拭くのである。男子ならば輕く擦るを指先で濡し、ナプキンで拭いていゝが、婦人はそれをしないのが

フインガーボールの使ひ方

禮になつてゐる。

尙ほ指洗鉢は水又は微溫湯が普通であるが、上等の宴會になるとレモンを輪切にして浮かせたり、香水を滴下したりするところから、聞れない者は飲物と間違へるのである。

爪揚枝　爪楊枝は日本の小楊枝と同樣なもので、使用の作法も大差はないが、使用後は靜かに二つ折として、果物の皮等と一緒に捨てさすべきである。使用後耳に挾んだりするのは無作法である。尤もこれは外國人の列席する宴會では出さない方がよく、殊に外國婦人にこれを勧めるのは非常な失禮とされてゐる。

第十八節　紅茶と珈琲の飲み方

紅茶と珈琲とは大抵角砂糖と牛乳（上等ならばクリーム）が附物であるが、必らずしも入れなければならぬといふものでない。各人の嗜好によつて選擇すべく、普通は給仕が一々これを問くことになつてゐるが、多人數の宴會や公式の宴會等では、一々註文を聞いてゐるわけには行かないから、角砂糖を二個茶碗の受皿に載せ、客の嗜好に任せ、牛乳だけは別に廻つて注ぐことになつて居る。分量は給仕の注ぎ工合を見てゐて、それでよいと思ふとき一寸右の食指を擧げて合圖する。

チョコレート、ココアも牛乳の注ぎ方は同じであるが、異なるのは紅茶には必らず冷たい牛乳を用ひ、珈琲やココアには熱いのを用ふる。これは各特有の味と香氣を失はないためである。

以上の飲物は必らず茶碗に入れて受皿に載せ、匙を添へ飲物の方則により客の右側から出すが、この匙は砂糖や牛乳を攪拌するためで、これで掬つて飲むためではない。尙ほこの飲物は料理のビーフテイ・イン・カップと異り、何處

紅茶々碗の据え方

杯代りを請求しても差支ないから、更に代りを註文したいときは匙を受皿に載せ、反對に不要のときは茶碗の中に入れて置いて意思を表示すれば、給仕は匙の置き方によつて客の意を知り、一々註文を聞く手數を省略する例になつてゐる。

第十九節　給仕を呼ぶ心得

各食卓にはそれ〴〵受持の給仕があつて、常にその客の樣子に氣を付け所用を辯ずる任務を持つてゐるから、永くその場所を離れるやうなことはない。從つて何か用があり、給仕を呼ばうとしてもその姿の見當らない際は暫らく受持の場所へ給仕が戻つてくるのを待つ方がよい。然かし急を要する場合や給仕が氣の付かぬ場合などは、靜かに給仕の顏に注目しながら右の手の食指を擧げ、一二回手前の方へ引くのが法である。これを知らず日本風に手招きすると、反對に彼方へ行けとの合圖になるから注意が肝腎である。一品料理屋の女給でも呼ぶ氣になつて、ナイフなどの柄でコツ〳〵卓上を叩くなどは無作法である。

給仕人の呼び方

第二十節　挿花に就ての心得

洋式の宴會には大抵卓上に花を飾るが、その種類は切花、盛花、生花、花造、數花等があり、すべて食堂内の裝飾で決して勝手に手にすべきものではない。これに反し挿花は卓上裝飾用の花とは全然別で薔薇、菫、勿忘草、カーネーションなどにアスパラガス（食用のアスパラガスと同名異種）の葉を配合し、銀紙で元の方を捲き、上等の香水をふりかけた小さい花束で夜會、舞踏會などの宴に限つて特に準備し、殊め特定した席の皿へ、いろ〳〵な形に畳んだナプキンの中に一個宛入れて置くが、男女により花束に大小があり、婦人用のは比較的大きく且つ華美である。

これを挿花と間違へて、裝飾用の花をお構ひなしにちぎり取るのは、これこそ落花狼藉である。然かし特に主人が手づから取つてくれるとか、御自由にお取り下さいとかの言葉があつたらば、取つて襟にさしても差支はない。客から强請るのは以ての外の無作法である。

第廿一節　中座と退席の作法

食事中は一切この席を離るゝなかれとは、洋式宴會の禮式であるが、何時どんな突發的急用が起らないとはいへないから、そんな場合に幸ひ主人（或は主婦）が隣席にゐれば、そつと小聲でその理由を告げて立ち、若し主人（或は主婦）の席と離れてゐたら、わざ〳〵その席まで出向かず、隣席の人または給仕に、中座の理由を後刻主人に傳言してもらふやう小聲で頼み、他の客には挨拶せず靜かに席から離れるのが法である。然かしこれが便所へ行くのであつたら、「一寸失禮を……」といへばよく、決して便所なる言葉を用ひてはならない。

退席については公式の宴會ならば主人が先づ起立し、叩頭の默禮をして離席し、來賓の上席婦人、又は上席者を案内して退席するから、來賓もつゞいて食堂を出て別席に入り、暫時休憩歡談の段取りになる。非公式のときは先づ婦人達が退席し後ち男子の順である。つまり宴が終れば、食事中差控へてゐた喫煙が許されるわけで、食後休憩室（應接室）へ行かず、そのまゝ食堂で喫煙するのが殆んど例となつてゐる。英國では特に婦人が氣をきかして退席する習慣があるが、佛國や米國ではこれを婦人敬遠策として攻擊してゐる位で、一から十まで英國を模倣する必要もないから、そこは任意で葉巻の煙をさまで苦にしない婦人ならば、居殘つて歡談を交はす方がよい。婦人が退席する際は、他の客は勿論その夫もまた起立して、これを室外に出るまで見送るのが禮である。

以上は食堂内の喫煙を述べたもので、別席へ案内するならば矢張り主人が先導して離席するのが法であり、又共同宴會などであつたならば、上席者から順次退席するのが至當である。

食後餘興があるならば格別、さうでない場合は別席へ退いて休憩歡談も二十分ぐらゐで切り上げ、主賓又は上席者は主人主婦に挨拶して辭すべく、主賓又は上席者がいつまでも愚圖々々してゐられると、後の客はその人に先立つて辭るのを失禮とされてゐるので、お附合に殘つてゐなければならぬ苦痛を與へるからである。然かし已むを得ざる要用で辭去するときは、主人主婦にだけその理由を告げ、他の來賓には默して退出するのがよい。これは慇ひ挨拶すると、他の來賓に辭去を促がすやうなことになるからである。

食後餘り時間を費すのも失禮であるが、さりとて直ちに辭去するのは、饗應に對する不滿でもあつたのではないかと、不安の念を主人に抱かせる處があるから、然るべき歡談は時間を見計つて交はさねばならない。辭去の際御走の禮を述べる人もあ